



暁紅を待て



—青潟大学附属シリーズ—
中学編
第二シーズン 2

舞夜じよんぬ

その1 いじめない理由

健吾が知っていたはるみはこんな泣き虫じゃなかった。

ちょっと靴に変な虫入れられただけで足をばたつかせて泣きじゃくり、悲鳴をあげるような女じゃなかった。

顔をこわばらせて足をばたつかせるはるみがいる。白いストッキングから這い上がってくるのは灰色っぽい虫だ。よく便所にいる。そばで黒いびろうどのドレスを来たあの女がその足をひっぱたきながら何か命令口調で罵っている。

「はるみ、黙りなさい。今脱がせるから」

「怖い、いや、怖い、気持ち悪い、梨南ちゃん、助けて」

地べたにぺたんと座り、うす桃色のスカートがべっとり泥で汚れていた。足をくねらせながら何度も叫ぶはるみ。

——あの女の指だ。

——離れろ、佐賀から離れろ。

健吾がこらえられなくなったのは、小学校卒業式数日前の、あの瞬間だ。

「佐賀、俺の背中におぶされ」

「できない、できない、怖い、いや」

打ち所が悪かったのか、スカートをまくった状態で横たわっているあの女を見据え、健吾ははるみに命令した。あの女と同じくらい強い口調で、決して逆らえないように。

「それに、梨南ちゃんが」

「お前まだこの女にくっついていたいのか。ばかやろう！」

倒れている女に一発、二発蹴りを入れたがびくとも動かない。白いレースのついた下着が丸見えだった。何度か動こうとしているらしいが頭が痛くてならないらしくうめいている。

「ほら、落ち着け。今から靴脱がせるからな」

黒いつやつやした靴。お姫様靴だと女子たちが騒いでいる靴だ。ぱちんと留める部分を外した。指先でも感じる滑らかさだった。はるみの足で踏み潰された白っぽい虫が注ぎ込まれていたらしい。

——あの女のせいだ。

——この女が、佐賀にしたことすべてだ。

健吾はゆっくりと、手でその虫たちを靴の中からすくった。指にごによごよする感覚、まだ生きています。たぶんこいつらは蛆虫だ。

「健吾、何するの」

指で数匹生きていた奴を、目の前でだらしなく横たわっている女に振りかけた。ちらっと顔を見上げたが瞳はにくにくしいままだった。長い髪の毛をそのまま背中と肩に流している、墨で塗りつぶしてやりたい顔。

——ざまあみろ。

もう一匹生きていた。ゆっくりと、艶やかな髪の毛の上に落とした。

「佐賀、行くぞ」

はるみが鼻をすすり上げながらも、黙って健吾の肩に両手をかけた。ちょっとだけ膨らんだ足と尻に手がかったけれども、あえて感じない振りをした。重たい。

「いいか、もう泣くなよ。俺はお前のことを守るからな」

自分でも恥ずかしい台詞だった。

正気で言えない言葉だと人は言う。

けれど、この言葉なしで、健吾ははるみを守れなかった。

杉本梨南からはるみを取り戻すためには。

あれから半年以上経つ。だいはるみもあの頃のようにおびえなくなった。何かの拍子で健吾の目に見え隠れする時、いつも怒鳴ってしまう。

「佐賀、いいかげん俺の前でびびるのはやめろよな」

教室から連れ出し廊下で人がいないの確かめる。

「お前、俺のことを信じてねえのか」

「信じるって、健吾のことを？」

「俺はお前のことを守るって言っただろ」

ああ、くさい。白々しい言葉だ。相手のはるみでなかったら健吾は死んだって口にしない言葉だろう。

「だって、健吾」

はるみはそれ以上の言葉を口にしなかった。健吾の腕にもたれて顔をうずめるだけだった。先生たちにばれたら大変なことになる。中学一年のくせにいやらしいと言われるかもしれない。しかも野郎側は青大附中一年B組評議委員ときている。クラスの野郎ども、同じ学年の連中ども、健吾はあえてよけいなことを言わせないようにさまざまな取引をしている。決してはるみに手を出させず、うっかり誰かが悪口を言おうものなら半殺しにするようおどしをかけていた。

「いいか、あの女のやり方にまだおびえてるんだったら、安心しろよ。佐賀、俺は正々堂々とあの女をつぶしてやる。佐賀が堂々とこの学校を歩いていけるようにしてやる」

「健吾、そんなことしなくたって」

表向きはるみはまだ、あの女のことを好きなふりをしている。六年間さんざんこき使われた後遺症だ。

「お前が気付いてねえだけだ。いいか、佐賀」

——俺はあの女たちと違う。汚い手を使いしねえよ。

耳の上に大きく編み上げたお団子をくっつけているような髪型。いつか解いてしまいたくなる。本能がうごめき、たまらなくなると健吾は窓の向こうを見た。

「どうしたの健吾」

はるみの声が響く。

「なんでもねえよ」

一年B組の教室に入ると空気は一転して息苦しいものとなる。健吾もそうだがはるみもたぶん、息がつまりそうだろう。前から二番目の廊下側の席に座り、真ん中らへんのはるみをちらりと眺めた。見張る、と言った方が正しいだろう。なにせ後ろの悪魔に乗り移られそうな席なのだから。

はるみの後ろで、泥のような髪の毛を一本に結んだ女がじっと一点を見つめている。今年の三月、数匹の蛆虫を振りかけてやった相手だ。健吾に復讐するだけでは物足りないとかで、今度のはるみにターゲットを絞っているらしい。

朝の会が始まり、健吾が号令をかけた。

「元気いな、新井林。よおし、おはよう！　まずはな、溝口先生の容態からだ。先生は来月の手術に向けて……」

二学期に入ってから担任の溝口先生が体調を崩して入院していた。一部情報筋によると不治の病ではないかとの噂もある。もともと一学期から顔色の悪いこけた頬をしていた。クラスもごたごたしていたし心身ともに追い詰められていただろう、きっと。

代行の担任として、若い男性教師の桧山先生が入ってきた。教師になって二年目、初めてクラスを持つのだそう。見た目はほとんど大学生と変わらない。髪の毛も前髪を軽く持ち上げた感じで、よくいる売れない役者さん風だった。校内女子の人気も相当なもの聞く。顔のいい野郎というのは、大抵性格がよくない限りやっかみの対象になるものなのだが、桧山先生だけは違った。

——まあな、この先生は、明らかに「男子」だからな。

大人としてまともな考えをもつ教師は、この人だけだった。

なぜ一年B組の男子たちが桧山先生になつきまくっているのかを健吾は知っている。

「先生、いいですか」

「あの、今週の部活報告をやりたいんだけど、いいですか」

わざと、教室中央に響くよう、どすの利いた声で答えた。

「お、そっか。そうだなあ。先週のバスケ部、交流試合どうだった」

あまり答えたくない結果だが、健吾は振った以上答えるしかない。

「すみません。負けました」

「だらしないなあ、まあ力いっぱいやった結果だからまあいいか。今度の試合はいつだ？」

「来週もまたあります」

もちろん、悪びれずに答えた。

「そうか、お前もよくやってるもんなあ。来年は新井林がエースだもんなあ」

にやにやしながら桧山先生は頷いた。次に別の男子を指名した。

「次はテニス部、お前はどうかだ？」

「すみません、ぼろ負けでした」

野球部、卓球部、陸上部、バレ一部、男子連中に尋ねていくのだが、誰一人として勝利の報告

を持ってこることがなかった。なんてこつたいと健吾は思う。でも仕方ない。青大附中の運動部というのは、青潟市でも有名な超弱小部と呼ばれているのだ。四年前から委員会最優先主義に犯されてしまい、文化系・体育系の有能な選手がみな、委員会に走ってしまっていることに問題があるとされている。

「まあなあ、良く頑張った。お前らはまだ先があるんだから、次回も燃えろよな」

ぼろ負け報告を受け取った後、楡山先生は連絡事項を読み上げようとした。

「先生、よろしいですか」

虫唾の走る声が割り込んだ。せつかく朝さわやかな空気が流れているというのににごってしまったじゃないか。健吾は無視を決め込んだ。自分だけではない、周りの男子たちも、そして楡山先生も同じ表情をしている。

「なんだ、杉本」

泥髪の女・蛆虫を這わせた女。あの杉本梨南が立ち上がった。ねめつけるようなまなざし。周りの人間を誰も目に入れていないような、少しいっちゃったような視線だった。わざとらしい笑みを浮かべ、投げやりに答える楡山先生を健吾は、男として正しいと思う。

「弱弱しい部活の報告よりも評議委員会および他の委員会報告を最初に聞くべきだと思います」

「それは失礼じゃないかな。杉本、人をお願いする時の口の利き方はそれでいいのかな」

わざと優しい言い方をする楡山先生。

「楡山先生こそ、教師としての常識を覚えなくて教師になられたようです。それはともかく、これから評議委員会の報告をさせていただきます。許可を求めてもすぐに切られるのでこのまま話します。今回の評議委員会は学校祭の反省および二年の合唱コンクールの結果についてでした」

いきなり許可も得ないでしゃべり始める杉本。

——頭がおかしいぜ、あの女。

杉本の言うことも間違いではない。二学期に入ってからというもの、楡山先生が最初に決めたことは「朝の会において最初に確認するのは委員会報告ではなく部活の結果報告である」という点だった。当然、評議委員の杉本が激怒しないわけがない。毎朝、委員会報告を行う時間になると楡山先生とバトルを繰り広げることになる。楡山先生も最初は馬鹿にした態度で無視していたのだが、杉本がしつこくしゃべりつづけるので仕方なく、話を聞く振りをしていた。学校祭、一年のクラス参加企画が一切なかったのは、ちょうど中体連の時期だったから。杉本はずっと二年の評議委員連中とくっついて何か手伝いをしていたらしいが、健吾を含めた男子は無視していた。もちろん、楡山先生も。

うんざりした顔を隠さず、楡山先生は杉本の並べる御託を聞いていた。男子たちのつぶやき「また始まったぜあの女」「頭おかしいんでねえの」「ばあか、ここでなんか言ったらさ」が聞こえる。あえて健吾は一切口を利かなかった。

「よおくわかったよ。杉本。お前が言うことはよくわかった。一応、言いたいこと言ったら満足しただろう」

「ちゃんと先生が理解されたかどうかは定かではありませんが」

真っ正面からじっと見つめて答える杉本を、徹底して鼻で笑う態度に健吾は満足していた。

「君は、頭がいいね。とにかくこれで終り。座りなさい」

「命令される筋合いはありません。礼儀を守ってください」

「そうだな、礼儀を守るだけのことをしてくれればな」

いきなり後ろの野郎連中から拍手が沸いた。

「よく言った！」

健吾が振り返ると、普段は何も口にしないおとなしい野郎たちがばやばやと拍手を送っていた

。

目が合い顔かれた。健吾は無視することにした。

——本当は、こうやってあの女を馬鹿にできれば楽なんだがな。

——そうだよな、あの女と同類のことができればな。

杉本梨南は真っ正面を見据えたまま席についた。周りの女子たちがひそひそと悪口らしきものをつぶやいているのを無視していた。もしくは気付かないのだろう。哀れな女だ。

——あの女と同じことを、するもんか。

心に誓ったことだった。

放課後、健吾がバスケ部の練習に向かおうと、バスケシューズを背負い体育館に足を向けた時

。

「よお、新井林、先日はすごかったらしいなあ。シュートチャンスが鬼のようだったって聞いたぞ」

声をかけてくれたの本条里希評議委員長だった。

これでも一応は、一年B組の男子評議委員なのだ。自分でも評議委員会というのは二次的役割だと考えていたが、でも本条先輩の前ではきちんと答えたい気持ちもある。

「けど一本しか決まらなかったんで」

「すげえじゃねえかよ。やっぱり新井林、お前は男だな」

たぶんこれから評議委員会だし、一応は出るように言われるだろう。部活の練習が最優先だ。学校祭も終わったし、しばらくは無理に参加しなくてもよさそうだ。

本条委員長は目鼻くっきりした顔立ちを、気持ちよく笑顔に代えて答えた。

「まあな、しょうがないな。部活をいかげん復活させろってのが教師連中のお言葉だもんな」

「青大附中の体育部が弱すぎるってことっすよ。だから俺たち一年が」

「まあなあ、原因は委員会連中にあるとも嫌味言われてるもんなあ」

「本条先輩だってこんな委員会に入ってなかったら、運動部の大スターだったでしょうなあ」

多少おふざけを混ぜても、本条先輩には何も文句を言われぬ。そういう人だった。かなりわがままを言ったところで許してもらえる。現在一年B組の評議委員同士が反目していることも、委員会活動は杉本に、クラス活動は健吾に二分割されているのもすでにOKが出ている。

本条先輩は単なる「大好きな先輩」であり、委員長ではない。

「じゃあ今日は、杉本に委員会任すって形になるがいいのか？」

「あの女に委員会はやるって約束、一学期にしたからしかたない」

「まだ考え直す時間はあるからな、忘れるなよ」

頭を軽く叩かれた。本条先輩は楽しそうに鼻歌を歌いながら三階に向かう階段を上がっていった。たぶん三年A組で行われるのだろう。

一年の一学期。杉本梨南と激しく争い罵りあい一時的に敗北した。

全校集会というイベントにおいて、健吾はてっきり二年生女子たちが企画したものだと思い込み、脳天気に参加してしまった。ファッションショーみたいなクイズ大会だった。すっかり舞い上がってしまった自分がなさけなかった。なにせはるみを相手に、手のひらへキスまでしてしまったくらいだ。

しかしあの企画そのものが、天敵・杉本梨南の手によって仕切られたことを知り、健吾は理性がぶっとんだ。許せるだろうか。憎たらしい相手の手のひらで踊らされたことを許せるだろうか。しかも後ろ盾には二年女子だけではなく、軽蔑すべき先輩らしき奴の影までちらついていた。

——あの男だけはゆるさねえ。

もし、あれが本条先輩だったらしかたないだろうと思える。あの人には叶わない。成績が学年トップであること、評議委員会を始め他の委員会、クラスをすべて統治しているのだから。さらに彼女を二人持っていて、その手の経験も豊富。男としてもうらやましい。

——けど、あいつなんかに。

本条先輩が全身全霊で可愛がっている二年の後輩がいる。次期評議委員長を指名されたあいつだ。

ろくに九九も言えず、女みたいな顔をしてなよついでいて、やたら人の顔色ばかりうかがって、裏で汚い手を使ってのし上がり、女をしつこく追いかけてつづけクラスの人気者たちとわざと付き合いをして自分の保身にきゅうきゅうとしている奴。

——決して俺はあいつが泣き虫だったとか、頭が悪いとか、いじめられて当然の奴だったとか言う気はしねえよ。けどな、あいつが何をしてきたか聞いてれば、当然じゃねえか。尊敬なんてしねえよ。

健吾は真上を見上げつばをかけてやりたかった。二階は二年の教室が並んでいる。天に向かってつばを吐きかけても顔に当たるだけ。むなしいのでやめた。

——しょせん、最低女は最低野郎にしか認められねえもんな。俺はあんな人間と同類になてなるもんか。

とっくの昔にネクタイなんて外している。規律委員の連中も文句を言わない。先生たちも最近では健吾に対して鷹揚だ。一学期に起こした評議委員会関係のごたごたで顔も名前も覚えられ、本来だったら健吾の方が叩かれてしかるべきだったのにだ。運が良かったとは思わない。その百倍、吊るし上げられて当然の女がいたからだろう。封建的といわれるかもしれないが青大附属の教師たちは男性が圧倒的に多い。かなりいい方向に働いたのだろう。

「健吾、悪いがちょっと来てくれないか」

真面目そうな顔をした奴らからたまに呼び出しがかかる。目立つ一派とはすでに一学期の段階で話がついているが、問題は優等生面した中途半端な連中だ。今日もその類だろう。

健吾は体育館前の通路で立ち止まった。

「なんだ、これから練習なんだ」

「一言二言で終わる。悪い」

何度も、「悪い」を繰り返すのは、A組の奴だった。

顔見知りで何度か話をしたことがあるのだが、それほど仲がいいわけではない。優等生面をしているので健吾とは繋がりをもてそうにないタイプだった。ネクタイを緩めている所見ると、崩したい気分なのだろう。

「B組のあの女についてなんだが、お前どうして締めないんだ？」

単刀直入に話をするのが優等生連中の単純なところだ。健吾はあきれつつも鼻をつんと上にあげた。少しつつんにした前髪をかきあげた。スポーツ刈りだが前髪に主張を残している。

「あの女、か。人間と思ってねえからな。人間にだったら腹も立つけどな、虫けらなんか腹立てたって時間の無駄だ」

「よくそこまでおまえ、割り切れるなあ。健吾、お前あの女をつぶそうという意見を切って捨てているって話聞いたけど、いったいなんでだ？」

何度もぶつけられた質問だった。一学期、杉本梨南との対決で一応の負けを認めて以来、健吾は一切の手出しを禁じた。いや、もっと早い段階でだったろうか。自分なりの意志で、一年B組の奴らに命令した。

「杉本梨南に手出しを一切してはならない。紳士としての義務として」

と。

他の一年連中にとっては理解しがたいことだったらしい。実際何度か

「お前が立場上手出しできないのだったら、俺たちがつるそうか」

という申し出を少なくとも十人以上の連中から受けているが、あえて健吾は理由を丁寧につけてやめさせている。

「けどなあ、健吾。この前もうちのクラスの連中に向かって、『自分の価値を判断できない馬鹿な人間は、頭のいい人たちに迷惑をかけないところでやってください』とかなんとか言い放たれてさ。クラスの野郎どもは爆発寸前。幸いっていうかなんというか、あとで桧山先生が教室に来て、『君たちは本当に紳士だな』とか言ってくれたからさあ。おさまったけどな。でも、これはいいかげん何かせねばってC組、D組でも意見がまとまってるらしいんだ」

「ああ、俺のところにも大量にオファーが来るぜ」

健吾がOKを出せば、あの女はもう二度と学校に来れないだろう。裏でいろいろ手を回すことも可能だ。自分の手を汚さないように杉本を吊るし上げるなんてお茶の子歳々だ。青大附属以外であの女を嫌悪している集団を健吾は知っている。公立の連中を使えば足もつかない。

しない理由を健吾は何度も繰り返す。

「あのな、俺がなんであの女を汚い手でつぶさないかというのだ」

「佐賀のことが好きだからか」

「もう一度言ったら殺すからな」

ひとつめの理由は向こうが言ってくれたからはしょれる。健吾はポケットの手をつっこんだまま、壁にもたれた。目の前の壁に大きな影が映った。

「あの女を仮に、つるすなりまずみられねえ顔にしたとする。となるとまず、疑われるのは敵方である俺たちだよな。俺たちが呼び出しくらってそれなりの説教を食らう。どんなに俺たちの側に、あの女をぶっつぶすだけの理由があったとしてもだ。暴力をふるった人間が悪いというのが、おきてになっちまっている。残念ながら俺もそれには逆らえない」

「ひ弱な奴だぜ。健吾、お前そんな」

「ちょっと待った。話の続きを聞け」

健吾は落ち着いて一呼吸置いた。みな、説明するところという反応を示すのだ。タコの吸盤みたいな口をしている。キスしたいんだろう。変な奴。

「悪いが俺としては、あの女のために説教とか停学とか食らうようなことをしたくねえよ。自分が汚れるぜ」

「けどさ、あの女がしていることはなんだ？俺たちをさんざん馬鹿にするわ、汚い手を使って大人連中を動かしたりしているんだぜ。この前も聞いたぞ、死んだ猫を家に投げ込まれたくらいで、やった奴の親の仕事を取り上げて町から追い出したとかなんとかって」

「だったらこちらが正々堂々とした態度で、どこも文句のつけようのないやり方でつぶしてやればいいことじゃねえか。俺はあの女とおんなじことをしたくないってわけだ。俺はきれいなやり方でもって、あの女関係を制裁してやりたいんだ。そのために」

「はあ？」

全く理解できないらしい。しょうがない。みなそうなのだ。

「一年野郎連中に俺が命令したのはそういうことだ。あの女につけこまれないよう、俺たちは大人連中に文句のつけられない態度を取りつづけてやるんだ。徹底してな。あの女のやり方がいかに汚いかは、最近桧山先生の様子を見ても分かるが、大人も分かっているらしい」

「ははあ、そうだな。桧山先生あの女を嫌ってるもんな」

「嫌ってるなんてもんじゃねえよ！ やっぱり分かる奴にはわかるんだ。男だったら誰でもな」

最後の一言には別の意味がこもっているが、目の前の奴にはわからなかっただろう。健吾はあきらめの舌打ちをして続けた。

「二学期で俺もつくづく思ったんだ。異常な奴に合わせて自分らが異常になるんでなくて、徹底して常識を突きつけてやれば、周りだって変わるってことだ。俺だって弱い奴をいじめるとか、蹴りを入れるとか、そんなことはしたくねえよ。俺のモットーは『正義の味方』だ。あの女のしていることが許せねえから六年間、正義を貫いてきたってわけだ。ただやり方がガキだったから、つっこまれて俺が悪いことになっていたわけだ。けどな、今は立場が違う。あの女は教師連中にもわかるくらい堂々といじめをやらかしてるんだぜ。うちのクラスでな。どっちが悪いかよくわかるよな」

「しんどそうだぜ、健吾の言うことわかるようでわからねえよ」

ばかか。健吾はあきらめた。要するにすることだけを教えればいいのだと割り切った。

「A組の野郎どもは紳士だと桧山先生も言ってたんだろ。だったら徹底して紳士になっちまえ。そうすればあの女がいかにか狂っているかがよおくわかるって奴だ。手も出さない、何もしない。ただ無視すること。そうすりゃああの女のしていることは浮き上がる。まあ安心しろ。俺も今、別の方法を考えているところだ、このままあの女をのさばらせておくつもりはない」

目の前にいるA組野郎は、納得した顔で頷いた。そしてつぶやいた。

「紳士、かあ。健吾の言うことだから信じるけどなあ。本当に別の方法考えているって信じるぞ」

奴が去り、自分の影だけが壁に映っていた。ゴリラめいていた。バスケシューズをぐるんと、紐のついたまま回してみた。

——なあんだ。結局はこれだけ言えばよかったのかよ。

健吾が部活で遅くなる日は、ひとりではるみは家に帰る。

たぶん杉本梨南はあの軟弱次期評議委員長のところに出かけているのだろうし、手出しされる心配はない。一時期は部活を休んでまでついていっていたが、最近のはるみにたしなめられて部活最優先主義に戻っている。尻に敷かれているとも言われる。青大附属の女狂いともささやかれる。学校行事中に手の甲へキスした度胸のある奴とも。

両親にも

「まさかあの健吾が十三にして女の子に狂うなんて。はるみちゃんでもよかったけど」

とため息をつかれている。していることを見られれば何も言い返せない。言い返す気もない。

——あいつ、大丈夫かな。ちゃんと家に帰ったかな。

先輩も教師もあてになんてしていない。六年間、はるみが杉本にさんざんなぶられていたのを、誰も助けようとはしなかった。かつて健吾もそのひとりだった。杉本とのいがみ合いを続けていたものの、はるみのことをかばうことができなかったのだから。同罪だ。

——健吾、健吾、一緒に遊ぼうよ。一緒にヒーローごっこしようよ。私がお姫様ね。

自信もって笑顔で振舞うはるみを取り戻したかっただけだ。

——あんなに恥知らずなことしているの。男は馬鹿ばかりなのよ。いいかげんはるみも恥を知りなさい。私の言うことを聞きなさい。

ふたりで話をしている時に、目の前で罵ってはるみを連れ去ったあの女の前。はるみはおびえて頷くだけだった。杉本梨南の隣りにいたはるみはいつも、泣きそうな顔をしていた。健吾を見つめて震えていた。

——俺の知ってる佐賀はあんな顔をする奴じゃなかった。だからだ。

小学校卒業式前、健吾が初めて杉本を突き飛ばし、蛆虫を振りかけた時に誓ったことはひとつだった。

——俺は、佐賀を守る。六年間たかっていた蛆虫から、あいつを守る。

佐賀はるみに杉本梨南がしたことを思い起こせば、何百回刺しても悔いはない。

その2 軽蔑する理由

評議委員会には出ないが、本条委員長仕切るじきじきの集まりには参加することもある。部活の練習が休みの日など健吾はだるい気分三年A組の教室へ向かった。大抵男子評議委員のみの集まりである。一年男女評議の仲の悪さに手を焼いた本条委員長が、独断で決めたことらしい。一部の女子たちからは「男女差別よ」と問題視されたらしいが、その辺はお上手な本条委員長。夏休みの段階で氷解させたとか。

「ということでひさびさに野郎会が開けるってわけだ。やっぱりなあ、新井林、お前がいないと締まらんぜ」

嬉しいこと言ってくれるじゃないか。やっぱり本条委員長に男子連中がほれ込むのはわからなくもない。健吾は無表情ながらも黙ってノートを広げた。別にメモするつもりもない。ただ、他の先生たちが通り過ぎた時に「一応、評議委員会の延長」という顔ができるよう、カモフラージュするためだ。

「といっても、大きい行事は一通りすんだと。学校祭も合唱コンクールもなんだかんだ言って無事終わったしな。立村、お前もよくやった」

「ありがとうございます」

二年D組の評議委員、かつ次期評議委員長を任命されている立村上総が頭を下げていた。みな当然のように頷いているのが解せない。いったいこの男のどこが怖くて、周りを黙らせているのだろうか。健吾にとって青大附属七不思議の一つである。

——第一、こいつの本性および過去をみな、知ってやってるのか？

——すべての元凶はこいつだってこと、気付けよお前ら。

健吾も本当だったら、立村のやってきた過去の悪行をさらけ出して窮地に追い詰めたいと思う。それだけのことを以前はされてきた自覚もあるし、何よりも第三者からの情報をたんまり仕入れられている。年上らしいが、たいしたことはない。立村を一度だって先輩だと思ったことはない。

「ということで、十一月に入ると三年連中は最後の進学試験の時期になりほとんど使いものにならなくなると。俺もしばらくは受験生の顔をせねばならないと。ただそれでも二年たちは忙しくて、冬休みに向けてのビデオ演劇創作をやらねばならないと。裏での仕事はたんまりあるわけだな。一年もまあいろいろ部活とかなんとかで忙しいと思うが、少しずつでも手伝ってもらえないかなあ。な、新井林」

「すいません。十一月はまだ試合があるんで」

本当だ。二、三年が使い物にならない現在のバスケ部、健吾がエース状態なのだ。小学校時代はそれなりにいいポジションを取っていたけれども、青大附属ではよきによきと力の差を見せ付けられるようになってきた。たっぱもあるし、シュートの確率も高いとあって、顧問の先生からは、

「青大附中のバスケ部を復権させる切り札だな、お前は」とまで言われている。ありがたい。

「そうか、新井林はなあ、バスケ部のエースだもんなあ」

「二年が本当は主力のはずなんですけど」

嫌味を言うが気付かないらしい。それもよし。他の先生たちから聞くことによると、運動系で力のある連中がみな、委員会活動を優先させてしまい、運動部ではほとんど幽霊状態だという。本条委員長も、本来ならば陸上・バスケット・男子バレーなどなど大抵の体育部での活躍が予想できたのに、あっさりと評議委員会に没頭されてしまったという。何度か運動部に入るよう説得されたらしいが、あっさり断ってしまったとか。

さらに信じがたいことなのだが、かの立村ですら卓球センスにおいては非凡なるものを持っていると聞く。悔しいが健吾も生で見た。一学期に行われた球技大会で、健吾すらすごいと思った二年卓球決勝の試合。あの馬鹿づらでも、卓球のラケットを握っている時だけは真剣な顔でもって球を跳ね返していた。結局審判の誤審で負けたものの、健吾の視点から見ても立村の方が有利だったと判断する。対戦相手は二年卓球部のエースだ。当然、立村にもそれなりの話があって当然だろう。

——運動部がこんなになっちゃったのは、みな委員会のせいだっての。

ひとり、バスケット部を背負って立つ健吾としては、頭にくることこの上なし。

顧問の愚痴を聞かされるのもうんざりだ。

「とにかくだ、お前ら。しばらくは二年を中心とした活動に切り替わると思うんで、みな仲良くやれよ。それとだもうひとつ」

本条委員長は横目で扉の方を覗いた。ほんのわずか、開いている。立村が気付いたらしく、すぐにぴたりと閉めに立ち上がった。目と目で語り合うのが二人は得意だ。噂に聞く「本条・立村ホモ説」が本当ではないかと思うのはこのあたりだ。

「すでにみなの方ご存知かと思うのだが、青大附属では今年に入ってから、委員会活動に対する風当たりが非常に厳しくなっているんだ。一年の連中は知らないだろうけどな。部活に入ることを最優先にして、委員会活動を後回しにしろというご沙汰が出ているようなんだ。まあ、二年あたりまではそんなことなくてな、委員を決めたあとで初めて部活を選ぶ形式だったんだが。そうだろ、立村」

にやにやしながら本条委員長は指を軽く突きつけた。立村もこめかみをつつくようなしぐさをしながら頷いていた。

「そうですね、僕たちの頃は、一年の宿泊研修が終わってからまず委員会を決めて、それからでしたから。ただ、D組の担任は部活に力を入れろとうるさかったですが」

「菱本さんじゃあなあ、そうだな。ま、お前のクラスには次期規律委員長もいることだし、特に問題はないと見えるが」

「二年に関してはまず問題ないと思われます。ただ」

「ただ、なんだ？」

「一年以降の問題です。現在僕の知る限り、まずは部活を活性化させてそのあとで、委員会を行おうという指導が行われているようです。僕もよくその辺はわかりませんが」

——なに口走ってるんだ。こいつ。つまらん委員会やってるよりも、身体動かして勝負かけてる時の方が燃えるに決まってるだろうが。

落ち着いた口調で、一言一言きちんと並べていく立村。髪型は襟足まできちんと整えている。いかにもいいところのお坊ちゃんだ。前髪もさらさらした感じだが少しだけふくらませているのが笑える。顔立ちがどことなく男か女かわからないところとか、異様なくらい肌が白い。病人じゃねえかと最初見た時ぞっとした。「こいつ女じゃねえか」と一時期真剣に疑った。

「青大附属の部活動が低迷していることは認めます。運動部を始め文化部の人たちがかなり厳しい立場だとも聞いてます。ただ、それと委員会活動の上下を決めるのはおかしいと僕は思ってます。現実問題、委員会活動があったからこそ、これまでの学校行事が盛り上がってきたところもありますし、体制をこしらえた結城先輩の力でもあると思います」

「そうだな、結城さんは自分が遊びたいというただそれだけの理由で、部活動よりも委員会活動を守り立てるべく評議委員会最優先主義を唱えちゃったもんなあ」

この辺は噂でしか聞いていないので聞き流した。部活に入ることを家で禁じられた結城さんという先輩がいて、抜け穴のひとつとして「委員会活動を部活化」という案をこしらえたのだそうだ。それが続いて現在にいたるというわけだ。まあ、部活は練習時間も取られるし、親たちが嫌がるのもわからなくもない。その時間があれば勉強しろ、と言いたかったのだろう。結城先輩にとってはそれでベストだったのだろうが、四年前と今とでは事情も違う。健吾は教室でうだうだ下らんこと討論している時よりも、体育館でめいっぱいドリブルしてボールを奪いシュートする方に情熱を感じる。

「別に、委員会よりも部活動を優先とするのならばそれはそれでかまいません。ただ、委員会を大切にしている人たちの邪魔をするのだけはやめていただきたいし、その反対もしかるべしではないでしょうか。僕は、委員会側の人間としてそう思います」

拍手。二年の男子評議たちは妙に団結力がある。どうしてかわからん。共通しているのは、みな文化系の顔をしていることくらいだろう。少なくともこいつらが球技大会で活躍しているところを健吾は一度も見たことがない。

「よくわかった。立村、そうだな。ただ現実問題として、評議委員会が存亡の危機に瀕してることもわかってるよな」

「冬になったらひとつ考えていることがあります」

「なんだよそれは」

「教えられません。今は」

ささやかに笑みを浮かべながら立村が答えた。このしぐさといい、表情といい、どうみても女である。健吾は決して女子を軽蔑してはいない。女はむしろ好きな方だ。はるみ以上の女はいないと思っているだけのことだ。ただ、中途半端なおとこおんなというのには虫唾が走る。堂々と男は男、女は女、ついてるものがついてるのか、さわるところがあるのかないのか、見せ付けてくれるならば落ち着くのだが、どうも立村にはそれが無い。一言でいうと、軟弱だ。

——やだよ、この言い方が女々しいっていうかなあ。

もうつかからないことに決めているのも、こちらにとぼっちりがくるのがいやなのと、これから計画することを邪魔されるのがいやだから。

「まあいいか。わかった。その代わりにあとでこっそり、教えろよ」

さすが「ホモ説」のお相手といわれる本条先輩。そこらへんの抑えも完璧だ。

——やっぱし本条先輩はカッコいいよなあ。

「とにかく、今の状況は部活最優先主義にだんだん傾いてきてるってことで、委員会一筋で生きてきた俺としては非常に淋しいもんがある。ま、新井林、お前をバスケット部のホープとして大切にしたい気持ちもわかるんだ。わかるんだがなあ」

「俺は大丈夫っすよ。ひとつのことしか出来ねえ程ばかりじゃねえから」

あえて、もうひとりの二年に聞こえるように健吾は返事をしてやった。

「俺は二足のわらじがはけねえほど軟弱でもばかでないですから。成績もなんとかなると思いますが、それを認めない奴だって世の中いるわけで、それはしかたないです」

「さあどうした立村、お前すっかり元気ないなあ」

からかう本条委員長の声。二年側の席を横目でうかがうと、立村の表情が少々こわばっているように見受けられた。次期評議委員長に指名されているとはいえ、二足のわらじがはけそうにない代表格だと見て取ったのかもしれない。やっぱり切れる奴は切れる奴の気持ちがわかる。そして切れない奴の精神状態も手に取ったように分かる。

——だから、なんで本条先輩は、俺を次期評議委員長に指名しねかったんだよ。あれだけ切れる人がなあ。俺だっていくらでも二足のわらじはいてやったんだぞ。あの馬鹿女をつぶすことだってできるし、何よりもあの非常識な二年の馬鹿男を。

臨時評議委員会は終わった。相変わらず本条委員長は立村を呼び寄せて、ひそひそ話をしている。こういう集まりが終わった後には必ず、二人仲良く教室を出るのが常だった。「本条・立村ホモ説」健在と言われるのはこういう時だ。二年の他先輩たちもその辺はいつものことと思っているらしい。一年と二年は、一学期に杉本を通じて起きた事件をきっかけに、犬猿の仲になっているが、健吾以外の連中をすでに立村が懐柔しているとも聞いた。健吾にとっては信じがたい事実だが。実質的に、「新井林健吾VS二年男子評議」の図式が出来上がっている。しかも裏で仲良くさせようと手を回しているのが立村ときたら、そりゃあむかつかないわけがない。本当なら健吾も一年の野郎連中に

「なんで立村なんかに頭を下げるのかよ、お前らこそ軟弱者！」

と問い詰めたい。問い詰めたいのだが、それをしてしまうと「正々堂々」としたやり方ではなくなってしまう。夏休み悩みに悩んで出した結論が、

「評議関係の連中は当てにするな」

だった。奴らが立村に頭を下げる理由のひとつに、

「英語の勉強を教えてくれる」

とか

「他の困ったことに手を差し伸べてくれる」

とか、健吾にも話せないいろいろな事情があると聞いた。実際立村は他のネットワークを利用して、かなり面倒を見てやっているらしい。恋愛関係とか教師とのトラブルとか、想像つかないネタをかなり解決しているらしい。いったいどこでそういうことができるもんなのか。健吾は聞

くのもむかつくので仔細を聞いていないのだが。

——とにかくあの軟弱野郎とは、いつか勝負をつけておかねえとな。

健吾は本条委員長のみに頭を下げ教室を出た。視線が落ち合った分、立村にも頭を下げたことになるのが不本意だった。無表情で、猫のようなまなざしで射られた。

今日は練習がないのでまっすぐ、職員室に向かった。

まだ四時半だ。もしかしたら桧山先生がいるかもしれない。一度、空いている時間に来てほしいといわれていた。たぶん話の内容はクラスの男女の仲悪いという問題だろう。いくらでも話してやる。

「どうした、新井林」

三年の女子が質問に来ていたらしく、明るい声が飛び交っていた。桧山先生の専門は英語だった。なんでも子どもの頃から教師になることが夢だったそうだ。なんで自分は小学校の頃から年代的に若い先生に当たることが多いんだろうと、最近になって健吾は思う。六年の時の担任も新任だった。健吾との相性はなぜか合ったが、杉本とはみな嫌悪しあうところが共通していた。

「この前暇だったら来いって言われたから」

「ああそうだな。今暇だぞ。ゆっくり話すか」

「個人面談でもいいっすよ」

思惑ありげに健吾がつぶやくと、にやっと笑って桧山先生も頷いた。

「人に聞かれたらまずいか。やはり」

煉瓦色のジャケットに袖を通し、桧山先生はカーテンで仕切られた椅子とテーブルを眺めた。

「あそこに行くか」

手には何ももたなかった。健吾を先に入れると、カーテンをぴしゃりとしめた。立ったままでいる健吾を頭のとっぺんから足下まで眺め、

「本当にお前、典型的なバスケット部だよなあ」

とため息をついた。

「先生、中学の時なにか部活入ってたのかよ」

「剣道やってたんだが、ものにはならなかったなあ」

照れくさそうに笑った。言われてみれば背が高くてがっちりした体格は剣道向きと言えなくもない。

「ま、座れ。僕も新井林にはいろいろと聞いておきたいと思っていたんだ。一学期のこととか、それとか」

「あの、女のこととかだろ」

さっそく健吾は突っ込んでみた。

「女という言い方はやめろ。杉本のことだな。いろいろ、お前も大変だったらしいなあ」

「無視してればいいけど、佐賀のことが問題だと俺は思う」

「そうか、佐賀か。なんだ、お前赤くなってるぞ」

凶星だ。どうしてもこういう時、健吾は自分が恥を捨てていると感じる。見え見えの態度で

ある。

桧山先生はにやっと笑うと、口元をほころばせてカーテンをもういちどぴっちり閉めた。

「溝口先生からも聞いていたんだが、確かになあ。そうとうなもんだな。今の一Bは。新井林、前から杉本はああいう風に佐賀をなぶっていたのか？」

やっぱり桧山先生にもそう見えているのだ。嬉しい。健吾だけの思い込みではないと分かったのが嬉しい。両腕をかわるがわるさすりながら健吾は短く答えた。

「小学校一年の時からずっとああだった」

「一年、って」

「あの女と佐賀と、俺とは六年間おんなじクラスだったんで、ずっと見えたし」

「六年間。じゃあ何か。ずっと新井林は佐賀を守ってきたのか？」

守ってきた？ 言葉にぞくっと寒気が走った。素直に「そうだよ」と答えたかったのに、できなかった。

「どうした、お前、あれだけ佐賀を」

「出来なかった、かもしれない」

唇をかみ締めてしまう。健吾の六年間は攻撃を仕掛けてくる杉本と、その周辺の女子たちを追い払い痛めつけることに費やされていたけれど、その間のはるみを引き離したことは一度もなかった。本当だったらすぐにでもはるみを杉本から引き離して縁を切らせてやればよかったのに。そこまで頭が働かなかった。

「今はその分を」

これだけつぶやき、こめかみが熱くなるのをこらえた。

「そうか。でもなあ、なんで佐賀を杉本があれだけいじめるところなあ。女子たちもあれがおかしいと誰も思わないのかな。溝口先生が最後まで心配していたのは、クラスの女子たちがみな杉本の言い分を飲み込んでいて、自分たちのしていることに気付いていないって事実なんだ。みな、杉本の言い方を受け入れているのは、いじめに加担してるのと一緒だ。新井林、男子がわからなくてどう思う」

「このクラスの女子、頭が狂ってるからどうしようもねえ」

吐き捨てるようにつぶやいた。本当だったらクラスの女子連中にみな蛆虫を振りかけてやりたかった。はるみを一緒に「ぶりっこ女」だとか「男にくっついてる女」だとか「杉本さんに悪口言っている女」だとか言っている姿を見るとなおさらだった。でも最近になり、女子たちの様子も変わってきている印象がなきにしもあらずだった。少なくとも健吾の経験だと。

「新井林、狂っているという言い方はやめた方がいい。狂っているということは免罪符を与えているようなものだからな。みなまともなまま、こういうことをしているのが問題なんだ。要は、杉本がクラスの女子たちをまとめて、佐賀いじめをさせていると、そういうわけだな」

「俺はそう思う。けど、人によってはそうでないみたいだ」

「人によって？」

「だからうちのクラスの女子ども。あの女がいい奴だとみな思い込んでる。佐賀が苦しい思いし

ても全然平気って顔してやがるから」

「長いものには巻かれろ、か」

言い当てた言葉だ。健吾は頷いた。

「でもな、新井林。たぶん女子たちは、杉本に同じことをされたくないからああしているんじゃないのか？ いつ自分がいじめの犠牲者になるとも限らないんだからなあ。正しいことを正しい、間違っていることを間違っていると言えるクラスでないと、佐賀も、いや杉本も救われないうらう」

「あんな女を救っていいと思ってるのかよ、先生」

「そうにらむな、新井林。つまりだなあ」

膝を広げ、桧山先生は声を潜めた。顔と顔を突き合わせた。たばこくさい。

「世の中には、自分がいじめをしているとか、悪いことをしているとか、自覚できないかわいそうな奴がたくさんいるんだ。新井林ならわかるだろ。佐賀が苦しんでいるから、守ってやろうって思うだろ。佐賀が毎日どんな思いで学校に通っているか、想像つくからだろ。そういう想像力を持っているんだ」

「想像じゃねえよ。目の前でやってるんだから誰だってわかる」

意味がわからず健吾は言い返した。違うとばかりに軽くテーブルを叩く桧山先生。視線が物言いたげだった。

「ところが、同じことをしていても相手がどういう感じをもつか、想像つかない人もたくさんいる。相手のことを思いやれないで、みな同じことを考えていると決め付ける、かわいそうな人がな。そういう人たちには、どうすればいいと思う、新井林」

「俺は何度もあの女に、教え込もうとしたぜ、けどできなかつたんだ」

「小学校の時か？」

「ずっとだぜ。あの女が佐賀にああしろこうしろと命令している時、何度もやめさせようとしたさ。けど、あの女全然気付かないでやんの。佐賀が嫌がっているのを全然、無視してやるの。頭来るだろ、それに下手なやり方しようもんならあの女、親に告げ口するんだぜ。あのうちの親、裏で手を回してさ、相手の親にひでえことするんだ。仕事首にして青瀧から追い出したりさ。だからあの女のうち、近所ではきらわれもんなんだぜ。青大附属くらいだ。あの女を普通に扱ってるのは。あんなやり方する奴を、いいかげんのさばらしておきたくねえから俺は何度も」

急に胸が熱く、むかむかしてきた。驚いた顔をしているのは桧山先生。どうした、と覗き込む。

「なんでもねえよ。ただ、俺、もういやなんだ。友だちがあんこのせいで、青瀧を追い出されたりしたことがあるから、なおさらなんだ。もう、佐賀まで取られるのはたくさんなんだ。あのままだったら佐賀が青大附属をやめると言い出すんでないかって、まさか、と思うけどさ、けど」

なんたる醜態か。健吾は自分の涙腺がめちゃくちゃゆるくなっているのが情けなかった。いつもそうだった。杉本の告げ口により親の仕事を奪われ町を出て行った友達ふたりのことを思い出すたび、一晩中泣きつづけた自分が戻ってきてしまう。親にくっついてかかった自分が、真剣に署名運動をしようとして親に止められ三日間ハンガーストライキをした自分が、思い出されてしまう

。

「そんなことがあったのか」

テーブルに突っ伏した。ガラスのテーブルにはレースの敷物が乗っかっていた。鼻水がじゅるじゅるいうのを押し付けて。

——もう、佐賀までいなくなるのはいやだ。

「よくわかった。新井林、よく話してくれたな。僕もこれから一年B組の問題が片付くようにしていくから、一緒に頑張ろうな」

頭をぽんぽんと叩かれた。顔を上げると、桧山先生がにこやかな表情で見下ろしてくれていた

。

「それに、お前は偉いよ。この前男子のひとりから聞いたよ。新井林、杉本に非合法な手を使うのではなく、正々堂々とした態度で対決しようと、クラス男子に命令してるそうだな」

どこでもれたんだか。健吾も鼻をすすり上げながら頷いた。

「俺は、あの女と同じ汚い奴になんてなりたくない。ただそれだけだ」

その後は、過去の杉本梨南に関する悪行の数々を洗いざらい述べ立て、ところどころ佐賀はるみへの熱い思いについて語り、結局五時半まで残ってしまった。どうして桧山先生はここまで話をすべて聞いてくれるのだろうか。やはり「男子」だからだろうか。杉本に手を焼いていた溝口先生ですらここまで杉本をあしざまにいうことはなかった。杉本も悪いがいじめの男子たちも、と言う態度を取っていた。

——なのに、なぜ桧山先生は。

健吾は疑問を覚えつつもまずは満足することにした。今まではなかなか頼りになる大人がいなかった。いつも自分だけが悪いと言われつづけていた。でも、今日の会見で確かに桧山先生が味方であることを確認した。

——まあいいさ。次だ次。クラスは桧山先生の連合軍で勝負するとして、次は。

正々堂々、正しいものが受け入れられる、ごくごく普通のことを求めているだけなのに、なんでこんなに苦労しなくちゃいけないのだろう。

杉本のような弱いものいじめをしている女を追い出すのに健吾がこれだけ涙を流さねばならないのだろうか。納得いかなかった。

——不条理だ。けど、俺はやる。

その3 戦う理由

いつも思うのだが、二年D組の羽飛貴史先輩はどうしてバスケット部に入らなかったのだろう。顧問が何度も説得したとかしなかったとか噂は聞いている。もし、羽飛先輩が入っていればもう少しバスケット部のレベルも上がっていたのではないかと健吾は常々思っている。

——委員会にも入っていないのに。もったいねえよなあ。

はるみを側において健吾は、自転車置き場の方でふたり語らっている羽飛先輩ともうひとりの女子を眺めていた。職員室前廊下の窓。まだ部活に出かけるまで十分くらい余裕がある。

「健吾、まだ行かなくていいの」

「お前が学校出るまではいる」

一言つぶやき健吾はさらに観察を続けた。片手をはるみの指先に触れさせて。温もりを感じると自然に気持ちが落ち着くものだった。他の連中からすると、「女を見ているとむらむらして押し倒したくなる」とか「夜眠れなくてどうのこうの」とか、いろいろあるらしいけれど、健吾に限ってそういうのはなかった。

——すべて、起きてる間に済ませてるっての。

はるみとはだいぶ、進んだ。

一学期悪夢の全校集会クイズ大会もどきのファッションショーで、はじめてはるみの手の甲にくちづけした時からもう、半年近く経つのだから。夏休み前、冗談めかしてはるみが、

「健吾、何がしたいの？」

と尋ねた時、思わずふらふらっと、

「言葉なんかじゃねえよ」

と、胸に手を伸ばしてしまったこともある。あれって俗にいうBって奴だろうか。でも意識はしなかった。まだはるみに触れた時の柔らかさはそれほどでもなかった。はるみも黙って健吾のしたいままにさせてくれた。抱きしめる時にはもっとやわらかくしなくてはならないんだ、そう思ったのもあの時だったろう。

——さっき梨南ちゃんが、私たちのこと、見てた。

思う存分触らせてもらった後、はるみがはにかみつつつぶやいたのを聞いた。あの女のことで、告げ口するんでないかと焦ったけれども、

——うらやましそうな顔してたわ。きっと二年の先輩のところに行ったのよ。

もし告げ口されてはるみと引き離されるようなことがあれば、健吾は切り札を使おうと決めた。健吾がなぜはるみとくっついているのかその理由と、あの女がしてきた悪行の数々をすべて。

そのためには、隠しておきたい気持ちをさらけ出すしかない。

ずっと秘めておきたかった想いを。

「健吾、何を見ているの」

「羽飛先輩が帰るとこ」

気のないふりして健吾は答えた。指ははるみの手から離さずに。

やがてひとり、やたらと分厚いコートを羽織った男が現われた。顔をじっくり見なくても分かっている。シャーロック・ホームズがきているようなコート。青大附属で着ている奴は健吾の知る限りひとりしかいない。

——目障りな奴だぜ。

羽飛先輩の側にいる女子と話をした後、自分の自転車らしきものの側にしゃがみこみ鍵を外している。かばんを後ろにくくりつけ、羽飛先輩と頷きあって自転車を引き出し、校門の方へ向かっていった。

——あんな奴がなんで。しかも羽飛先輩とだ。何か裏があるに違いねえよな。

「見たくもないものって誰」

「あの、軟弱野郎に決まってるだろ」

吐き捨てるように健吾はつぶやいた。はるみも覗き込み、自転車の姿を見送った後、
「梨南ちゃんが片想いしてふられた人なのね」

こういう話をしている時、はるみの表情は崩れない。軽蔑するでもなく、物笑いにするでもない。ただたんたと、つぶやくのみだ。幼稚園の頃「お姫様役」をあてがわれ健吾の側で甘えていた頃と同じ顔をしていた。

——この顔を取り戻すのに、六年もかかったんだ。

人通りが多いからこれ以上健吾も、恥ずかしいことをしないですんだ。

「じゃあ、玄関まで行くぞ。急いで帰れ。俺も家に帰ったら電話するからな」

「大丈夫。私、ひとりでも大丈夫」

健吾は聞いてない振りをしていっしょに玄関に向かった。二人隣り合えば、まだ指先が触れていても怪しまれないですんだ。

対抗試合の練習に向けて六時まで走りまわった後、健吾は大急ぎで着替えを済ませた。昨日手書きでしたためた手紙五通を配るため、まずは男子更衣室に向かった。上級生にばれないように、一年の運動部在籍者に。

——六通で間に合うってことが根本的な間違いだよな。

テニス部、卓球部、陸上部、剣道部、サッカー部、そしてバスケ部。いかに少ないか。情けなさ。健吾はそれぞれの部室の様子をうかがいつつ、顔見知りの一年男子を見つけてはひっぱりだした。

「なんだよ、健吾」

「これをとりあえず読んでくれ。それから話だ」

それぞれの部室で同じ言葉を五回繰り返す、最後にバスケ部の連中7人を呼び出した。ちょうど着替えがすんで帰るところだった。まだいるがほとんど幽霊化しているのも否めない。委員会のせいだ。

「俺の書いたもんをみんな、回し読みしてくれ。これから三十分後にグラウンドに集合だ」

「ひええ、これからかよ。腹減ったってのに」

「ばかやろう。部活なくなるかもしれねって時によく言えるよな」

一喝し、健吾は集合場所のグラウンド奥を指示した。

文面は以下の通りである。

青大附属中学運動部所属の一年男子へ

これから青大附属中学の運動部（バスケット部・テニス部・陸上部・サッカー部・卓球部・剣道部）の価値を高めていきたいと思う人は、ぜひ今日の夜六時、体育館裏のグラウンド裏にて集合してほしい。

真剣にこれからの青大附属運動部のことを考えたい。

青大附属の運動部は、現在どの部も二年の部員が少なく、存亡の危機に立たされているところが多いと聞いている。理由は委員会活動が最優先されているからだそうだ。そのため部活の練習がおなざりになりがちで、試合ではいつもぼろ負け。この繰り返しだ。

でも、それはまずいと僕、新井林健吾は考える。

これからの青大附属運動部のレベルを上げ、今の委員会最優先主義を変えていきたいと思う人は、ぜひ集まってほしい。

文責 新井林健吾（1 B）

——どうせ俺は作文嫌いだったの。

自分でも下手な文章だということは自覚している。意味さえ通じればそれでよい。汗が冷えてきて風邪を引きそうだった。少し走って体を温めたかった。グラウンドにはサッカー部の練習も終わったようで人がいない。真っ暗い闇の中を健吾は一周、ウォーミングアップ気分で走った。

健吾が前から温めてきた案をここで発表する時がきた。

夏休みから、この状況をどう変えていくか、評議委員会最優先主義から部活動最優先主義へどうシフトしていくべきか、健吾はずっと考えつづけてきた。

もちろんきっかけは、一学期六月の、評議委員会でのごたごただった。

自分が器の小さい奴だと思い知らされた。

てっきり健吾は自分が次期評議委員長に指名されるもんだと信じ込んでいたのだが、ふたをあけてみれば本条委員長は次期委員長に立村を指名した。立ち直れないくらいの衝撃を受けた。

次期委員長が杉本でなかっただけまだいい。あとで自分を慰めた

立村は最初から異様なほど杉本を可愛がっていた。ちゃんと彼女がいるというのに、ふたりっきりで喫茶店に連れて行くとかしたりしていた。かばいたてする行動は、健吾以外の連中からも

、「立村先輩はきっと杉本さんのことが好きなんだ」

という的を射た意見が出たりするくらいだった。

——なんで、清坂先輩を選んだんだか。きっとあれだな。あいつは自分の身を守るため、人気のある清坂先輩にくっついて周りを懐柔しようとしたらんだってわけだ。はは、肝っ玉の小さい奴だぜ。まあな、あの女とくっついたら、俺たち一年男子連中からは総すかん食うと、あの軟弱野郎も想像ついていたんだろう。

現在立村の恋人とされる清坂美里先輩。あの人はもし同級生ではるみがいなかったとしたら、健吾もふらっとしていたかもしれない「女子」のイメージそのものだ。杉本にひっついてるうざい連中とは違う、さわやかに気持ちよくしてくれる女子だ。ああいうのがなぜ、一年にははるみしかいないのか、健吾には謎過ぎるくらい謎だ。もちろん男子からも人気が高く、しょっちゅう他の男子たちからつきあいをかけられているという噂もある。

なのになぜだろう。

——なんで清坂先輩がだ、あの男でがまんしてるかだ。

——ちゃんと羽飛先輩がいるってのにだ。

——なにか、まずいことでもあったのかもしれないな。

二年の恋愛事情なんて知ったことじゃない。健吾が知りたいのは、「なんで立村は自分の保身のために命を賭けるのか」

一点にすぎない。

気に入っているなら堂々と杉本を彼女にするなりして、いっしょに嫌われる覚悟を決めればいいのだ。そうすれば、健吾も奴を見直すだろう。最初の印象を覆すだけのものをもっていれば素直に頭を下げる。自分を折って反省するだけの度量を持ちたい。

しかし、立村の過去を聞くにどう考えても納得いかないところが多すぎる。

——まず、清坂先輩を口説く前にあの男、別の女子にしつこく言い寄ったらしいじゃねえか。この前先輩たちから聞いたぞ。確か杉浦さんだったか、そういう女子に二回くらい告白かまして、振られたらしつこく追いかけていたらしいってな。可愛い感じの子だって聞いたけれども、あまりにもしつこすぎて相手の子がノイローゼになって、結局先生たちに怒鳴られて一件落着いたらしいってな。別に好きなら好きでいいけど、振られたらぶつう、きるだろ。しつこく追われたらいやだったのが、想像つかねえのかよ。まるであの女と一緒にだな。

あの女。

一周し終わると息が黒い幕の中で白く浮かんでいた。急いでグラウンド奥の陰に向かうと、すでにいらいらしながら八人ほどの連中がうごめいていた。ジャージ姿が三人、あとはブレザーにスタジャンを着た連中だった。汗くさい。

「健吾、わるいがなんか食うもんだけ買って来ていいか」

突然切り出されて健吾は顔を眺めた。サッカー一部の男だ。

「どうせ長くなるだろうってことでさ。コロッケ九つ、一個五十円。どうだ」

みんなやる気らしい。健吾はすぐにポケットから財布を出し、千円札を取り出した。

「わかった。今日は俺が呼び出したから俺のおごりだ。もちろんつり銭、返せよ」

健吾が来る前に奴らも考えてくれたのかもしれない。あと三人が後で加わり、六時半開始

予定の集まりは十分ほど早まった。揚げたてのコロッケをみなでくわえながら地べたに座り込み、健吾はまず、大体の説明を行った。

「俺が一応、B組の評議委員であることが今のところネックになってるってわけだ。本当だったら毎日俺もバスケット部の練習に打ち込みたいし、もっと他の学校の練習試合に出たいんだ。けどなあ、評議があるだろ。十月はほとんど使い物にならない状態だったしな」

「ああ、健吾の立場は複雑だもんなあ」

みなが頷いた。

「けど、委員会活動しないと怒られるだろ。先輩たちに」

「先輩にはな。けど先生にはなんも言われねえよ」

「はあ？」

意外だ。健吾はてっきりみな、青大附属の委員会活動優先主義がゆらいできていることに気付いていると思ったのだが。みな、あきらめの境地に達していたのかもしれない。これはまずい。健吾は慌てて続けることにした。

「いいか、良く聞け。今日俺が集まりかけたのはな。今、学校側がだんだん代わってきてるってことを伝えたかったんだ。俺たちが入学した時、先に部活を決めて、それから委員会を決める、そういうやり方だったろ？」

みなが頷く。

「どうも今の二年は先に委員会を決めて、それから部活に入れるかどうかチェックしたってやり方だったらしいぜ。冗談じゃねえよ。まさか俺だって、評議委員がこんな怪しいファッションショーやったり演劇やらされたりするとは思わなかったもんな。俺は絶対止めてたぜ。わかってればな」

みな同情めいた笑いを漏らす。みな知っているのだろう。六月の全校集会での、はるみへの手の甲キス事件を。恥ずかしいと思うのはもうあきらめた。

「だから今の二年たちは委員会ばかり最優先して、部活のことなんて全然考えようとしないんだ。まあしゃあねえよ。忙しいことはしゃあねえよ。けどな、それで対抗試合が減っちゃうとか、練習を休まれるとか、そういうことが続くと俺だってたまったもんじゃねえよ」

「じゃあどうしたい、健吾」

闇の中から声が聞こえる。たぶん剣道部の奴だ。

「二年に逆らおうってのか。それは悪いが御免こうむりたいぜ」

「ほほう、なんでだ」

反発。感じて健吾は尋ねた。

「剣道部の先輩たちはみんないい人ばかりだからなあ。俺はあまり波風立てたくねえ」

噂に聞くところによるとそうらしい。剣道部もかなり先輩後輩の面倒見がよく、弱小ながらも頑張っているらしい。

「そうか、他に先輩がたと喧嘩したくねえって奴はいるか」

「俺も」

今度声があがった。サッカー一部だった。

他の部からも似たように手が上がった。

「なんでだよ」

「なんかわからんけど、二年の先輩たちってみな親切だと思うぜ。俺も公立に行った奴の話聞けどさ、先輩達って結構怖いらしいだろ。やきいれたり、殴ったりするって。俺のともそうだけど大抵の部活、そういうのないらしいってな」

——要は、二年に骨抜きにされてるんかよ。評議委員会と同じだぜ。

健吾はため息を気付かれぬようについた。

「よくわかった。けど俺は決して、二年に喧嘩を売りたいとかそう思ってるわけじゃねえ。今回あえて一年連中に集まってもらったのはだな」

脂臭い匂いが漂った。みなコロッケを食った後の口臭だ。

「俺たちにとって運動部ってのがどれだけ大切なものなのかを、他の連中に知ってもらう必要があるってことだ。委員会よりも運動部の練習を優先してどこが悪いって、俺は思う。もちろん学校祭とかそういう行事がある時は別だけど、それ以外のどうでもいい行事についてくっついていく必要があるのかどうかってことだ。どうせ弱小部、試合に出てもすぐにぼろ負け、もしくはコールド負け。情けねえ連中と思われてるかもしれねえ」

「だって本当だもんなあ」

脳天気だというかこいつらは。健吾は一発ぶんなぐりたいのをこらえてさらに話を続けた。

「だが、試合に出ている時の俺たちは、委員会で居眠りこいている時の自分とは違う。本気で戦ってる。それをまずは、大人である先生たちに見せ付けてやろうと俺は思ってるんだ」

「は、先生？」

まだわかっていない。意味が不明といわんばかりのざわめきがコロッケ臭い息とともにもれる

「お前ら知ってる奴も多いと思うけど、今の先生たちは、青大附属の委員会最優先主義をあまり良く思っていないらしい。もちろん勉強しろしろってうるせえけど、それ以上に部活のレベルが下がってることを嘆いてるみたいだ。だから、俺たちが結果を出せばそれなりに納得してくれると思う。そして、委員会に現抜かして遊び呆けている連中よりも、俺たち運動部の方を大切にしてくれるんじゃないかって思うんだ」

「そうかあ、問題は結果が出ないと」

気弱な奴らだ。だからこいつらはいつもなめられるのだ。健吾は怒鳴りたいのをかろうじてこらえた。

「先生たちが変われば、あとは影響されて他の生徒連中も変わる。俺もできる限りバスケ部と評議を両立させたいが、できれば比重を八対二の割合でやりたいんだ。そのためにはもっと、実力のある存在であることを見せたいんだ。わかるだろ」

みな黙りこくった。空気のコロッケが消えていく。寒さで指がかじかみ、なんどかさすった。手の皮が少し破けていて、健吾は何度かそこをなめた。はるみが二人っきりの時に同じことをし

てくれた。

「健吾、わかった。要するに俺たちは何をすればいいんだ」

「青大附属の運動部はがんばってるんだってことを、結果で見せることだ。とりあえず俺は来週の対抗試合でシュートを最低五つは決める。相手は水鳥中学で結構強敵だが、やるっきゃねえだろ」

健吾はもうひとり、陸上部の奴に話を振った。

「お前も来週、長距離走るんだろ」

「ああ。けど見込みねえよ」

「最初っから気弱なこと言うんじゃない。いいかお前。そりゃあ負けるかもしれない。それは俺も正直なところ勝つ自信なんてねえよ。先月の試合ぼろ負けでさんざん物笑いになったからな。けどな、俺としては絶対、手抜きしたところは見せたくないと思ってやった。いくらやってもシュートは決まらねえし、足は重くなる。けど、汚い手は一度も使わなかったぜ。正々堂々と勝負しつつければいつかは通じるもんがかならずあるはずだって、俺は絶対思うんだ」

「そうかなあ」

みな、わかっているのかいないのかわからない反応を返すだけだった。

「じゃあ言い方替えるぜ。負けたっていい。負けるなら負けたで、堂々と言い返せるだけの勝負をした証明をしようぜ。手抜きはしてない。堂々とした勝負でもって、玉砕してるってな。俺はそれぞれの運動部の結果を集めて、毎週朝の会で評議の特権を使って報告する。俺の文字は汚いから、誰かに書かせて学級新聞みたく張り出してもいい。とにかく運動部はこれだけ頑張っているんだってことを、学校の連中に知らしめることが最初なんだ」

健吾の剣幕にだんだん飲まれたのだろう。円陣がだんだん狭まってきたような気がする。ふたたび肉の匂いや油のかすかな息が漂い始めた。

「健吾、そうだな。精一杯やったことをまずは」

「わかったか、お前ら」

片手を差し出し、健吾は冷たい手がだんだん重なってくるのを待った。「ファイトー！ オー！」と試合前に気合を入れる儀式に似ている。重なるごとにだんだん暖かくなる指先。

「よし、じゃあ気合一発いくか！ 青大附中運動部復権に向けて、ファイトー！」

「オー！」

空気がコロツケの息そのもので一杯だ。満足だ。健吾はその息を胸いっぱい吸い込み直した。

宣言はしたものの試合はやっぱりぼろ負けだった。中体連常勝チームの水鳥中学から勝ちを期待する方が無謀だといわれていたが、それなりに健吾もシュートチャンスをつかんだ。もっともその倍、相手側にボールを奪われてしまったら立場がない。なにせ二年が主流の水鳥中学チームに比べ、青大附中は二年が全く使えない。本当だったら健吾が司令塔になりたかったのだが、一応は先輩を敬わなくてはならないのでそこんところもうまくいかない。

——そうなんだよな、先輩たちがいい奴過ぎるからなおさらうまく切り捨てられないってんだ

よな。

運動部の一年たちが集まり、「結局は先輩に反抗できない理由」としてあげられるのが、現二年生たちの穏やかな性格だった。本当に運動部に入りたかったのか？と尋ねたくなるような、競争心の薄い連中ばかりで、非常にやさしい。女子の方が勝気と言われている。非常に面倒見がいい。食い物の奢りは先生たちに見つからないよう、毎回行われている。もちろんしごきいじめなんてあるわけがない。みなにこやかに「お前ら、早く帰れよ、風邪引くなよ」と、暖かい気遣いのあるお言葉を賜る。そりゃあ性格の不一致は多少あるかもしれないが、とにかく親切な奴らばかりだ。

——実はそれがネックになってるんだな、うちの学校の運動部は。

闘争心溢れるプレイがモットーの健吾としては、頭の痛いところでもある。むしろ一年同士の間でぶつかり合うことが多いような気がする。大抵は二年に割って入られて、結局なあなあで終わる。やるときは鉄拳の一発二発食らわせてもいいと思うのだが、過剰に暴力を避ける人々だ。

——なんだかなあ、いい奴が多いとやり方も難しいぜ。

月曜の朝、健吾はまず学校に到着後、それぞれの一年運動部連中から、部活の最新情報および試合の結果について全部聞き取り調査をした。明るい情報は一切ない。みなぼろ負け情報ばかり。気がめいるが言い出しっぺの健吾だしかたない。ひとつひとつメモをしつつも、どういう試合だったか、どういう見せ場があったのか、相手チームはどのくらい強かったのか、を克明に記した。スポーツ関係の記事を書く記者になった気分だった。

「健吾、お前のところはどうだったんだよ。バスケ部は」

「シュートは決めたぜ。しっかりとな」

「それ以上の突っ込みを求めないのはどういうわけだ？」

お互い様だ。ということで教室に戻り、はるみを呼び寄せてまずは模造紙を広げた。

「お前、このまま俺の書いたとおりに書け。色はなんでもいい」

「え？ 私が？」

「佐賀の文字の方が読みやすいだろ。上に『青大附中運動部最新情報速報』って書け。あとはお前の好きな書き方で全部写していけばいい」

「いいけど、私で本当にいいの」

「だからそう、びくびくした言い方するな！ 怒るぞ！」

健吾が怒鳴りそうになるのではるみもおとなしく赤マジックと橙色マジック、そして黒マジックを使い分け丁寧に文字を埋め始めた。紙から下に映らない様に二枚模造紙を重ねている。健吾の机とはるみの机をくっつけるのは当然だった。健吾が紙を押しえてずれないようにしてやった。

からかう奴がいたら殴られるのをみな知っているのだろう。ちろちろ女子たちが見つつむ、無言で席に着く。一度はるみの髪型について「媚びてるよね」という悪口を言った女子がいたので、きちんと筋を通した話をしてやった。素直に納得してその場は収まったのだが、後で杉本梨南がロングホームルーム時に持ち出して大騒ぎになった。当時はまだ溝口先生だったから手におえ

なかった。今なら桧山先生にあっさり、「失礼なことを言われたら抗議するのが君の主義じゃなかったのかな。杉本さん」といやみをこめた一発を食らっておしまいだろうが。たぶん溝口先生が身体を壊した原因のひとつは杉本にあると、健吾は思う。

くだんの杉本梨南も、クラスの不良女・花森なつめ嬢と一緒に教室に入ってきた。げんまなざしを投げたけれども、そ知らぬ顔を決め込んだ。会話を成立させない、クラスのことについては健吾が仕切り、委員会関係は杉本が担当するという約束を交わしているので、こういうことについてはよけいな口をはさまれないですんだ。ポニーテールにして長い髪の毛を束ねていた。一学期の頃は女子たちからうらやましがられていた長髪だったが、最近は特別そういう話題もない。はるみが中華風娘の髪型、二つ分けした髪を丸めて耳の上で留めるという器用なことをしてきてから、そちらに目がいくようになったらしい。

「健吾、これでいい？」

「上出来だ。よし、俺と来い」

すばやく健吾は廊下にはるみと共に飛び出した。画鋏と椅子を一脚抱えた。

「いいか、押さえてろよ」

廊下前の掲示板に手を伸ばして貼り付けた。どうも斜めっているような気がするが、その辺はご愛嬌だ。とにかく健吾の目的はひとつ。

一年の連中に、運動部がきっちりと活動していることを知らしめる。

それも一年たちが、負けているとはいえ努力していることを伝えることだ。

「ね、健吾」

「なんだ。うるさいな」

「もし、また作るんだったらもっときれいな作りたい」

「はあ？」

なんとか画鋏で貼り付けた後、健吾は聞き返した。

「だって、文字だけでつまらないもの」

——じゃあ作ってみろよ。どうせ俺は。

むっときたのをはるみはやわらかな笑顔で遮った。

「健吾怒らないで。私、うちでもっときれいに作りたかったの」

椅子を抱え直し画鋏の箱を渡し、健吾ははるみの耳に息を吹きかけた。

桧山先生が入ってきて開口一番。

「いやあ、すごいなあ。どうした新井林。朝の会始まる前に青大附中スポーツニュース最新情報が入るのは嬉しいぞ。おい、バスケ部どうだった？」

起立・礼・着席の前にいきなり話を振られてしまった。鼻水をすすりつつ健吾は答える。

「はあ、やっぱり朝の会だけだとB組の連中しか知らないことになるだろうからってことで、やってみました」

「新井林の意見か」

「書いたのは佐賀です」

真ん中にでうつむいているはるみに視線をやり、健吾は靴の紐を結び直した。上靴をスニーカーにしているのはクラスだと健吾くらいなものだ。

「ほお、きれいな文字書くんだなあとは思っていたが。そうかそうか。新井林の手伝いか」

「いや、来週からは佐賀に一通り任せる予定です。俺が情報を集めて、夜のうちに佐賀に作らせて、朝貼るって形にします」

壁新聞。

小学校の頃にやらされたことがある。大抵、近所の火事情報とか、お祭りとか、ニュースめいたものとかを載せて、各クラスにポスターとして貼り付けるのがメインだった。あの頃はいやいやだったが、あらためて思うのは経験のありがたみだった。

——青大附中スポーツ新聞を壁新聞形式でつくりゃあいいじゃねえか。

行き当たりばったりとはいえ、形は整った。

はるみまで、いきなり手伝いを申し出てくれたではないか。

もっときれいなのを作ってくれる、と言ってくれたではないか。

健吾は後ろに張り出してある、四角張った文字の、面白みのない文字の羅列、評議委員会関係の張り紙を眺めてみた。全部、一学期のうちに杉本がひとりで定規を使ってこしらえたものだった。見た目きちんとしてはいるが、遊びがない。すべてが四角い枠の中に押し込められて、やたらとかちかちしている。はるみの柔らかい文字に比べて息苦しい。

「そうだな、佐賀、そろそろ時間割とかも汚くなってきたしな、佐賀がそういうデザイン関係が得意なことだったら、時間ある時に書き直してもらいたいなあ」

——こうきたか。

ぴんときたのは健吾だけではない。はるみの真後ろにいる女の顔も、すっと上がり、真っ正面の桧山先生を見つめていた。さすがにつっかかりはしない。

——そういう動物的本能は鋭いよな。

全く揺らがない桧山先生の表情が心地よい。さっそく健吾は起立・礼の号令をかけた。

特別、桧山先生が何をしたわけでもない。はるみについては健吾が毎朝つききりだ。女子だけの授業ではかなり、他の女子から嫌がらせをされているらしいが決して愚痴をこぼさないはるみ。杉本が操っているらしいのだが、本人が手を下さないで周りからも誤解されているようだ。

「杉本さんと仲良しだったのに、いきなり男を選んだ佐賀さん」という誤解だ。その「男」である健吾としてはなんともいえない部分がある。

しかし、クラスの女子たちは知らないのだ。

はるみに杉本が何をしてきたのかを。

——あんな男と一緒にいると馬鹿になるから離れなさい。はるみ。あんたにプライドってもんはないの？

——男はみな馬鹿ばかり。死ねばいいのよ。

——こんなピンク色のノートを使うのはやめなさい。はるみ。こんなのを使うのは頭のレベルが低い印なのよ。そういうのではなく、全く何もついていない上品な便箋を使うべきなのよ。私

のように。

小学生の言葉じゃない。どっかのおばさんたちが「おほほ」と言っているのではないかと思う。しかし、口にしていたのは小学校一年から六年にかけての杉本 梨南だった。ノートの色くらいでレベルが低いというところに、何か勘違いしたものを思う。そういうお前は今、「上品」なノートを使って、ねとっとした顔つきで背を伸ばし、一点を見つめている。ひそかに他の連中、最近は女子たちからも、

「ひとつのものしか見てないみたいで、怖い。霊能者みたい」

とささやかれていることに気付いてもいないようだ。

たぶん、杉本の見ているものはひとつなのだろう。

健吾や桧山先生、はるみには理解できない生命体を見つけているのだろう。怖い怖い。

——桧山先生はいつ勝負をかけるつもりなんだろうなあ。

健吾が涙ながらに訴えた二者対談。あれから桧山先生の行動をかなり観察していたのだが、特段変わったことはなかったようすだった。早くつぶすならつぶしてほしいし、ロングホームルームでまた、はるみに対する女子のいじめ問題についてやるのならば早くしてほしい。それなりの資料を集めるべく、健吾は毎日 はるみの側に目を光らせていた。

「佐賀、今日は体育の時間、女どもになにかされなかったのか」

「大丈夫、私、ひとりで大丈夫だから」

「いいか、あの女なんかにくつつくんじゃねえぞ。いいか」

「梨南ちゃんは私を嫌ってしまったみたいなもの」

「あの女が土下座してあやまってきても、決して許すんじゃねえぞ。佐賀。お前があの女にされてきたことは、とことん蹴りを入れてもかまわないことばかりなんだからな」

健吾が繰り返しはるみに言い聞かせてきたこと。

はるみは素直に受け入れてくれているのだろうか。

どうもそこが不安だった。いくら杉本のあくどさを説明しても、

「でも、梨南ちゃんがかわいそうだから」

とくる。かわいそうという言葉はまだ、杉本に対していい感情を残していることなのかもしれない。六年間洗脳されつづけてきたのだ、元に戻すのに時間がかかるのは覚悟の上だけど、健吾は日々いらいらする。むかむかした拳句、帰り道にいつも肩へ手を伸ばす。両手を合わせ、はるみのひたい一点に唇を近づける。本能だ。黙ったまもうつむくはるみを見て、また衝動が走り同じことを繰り返す。幸い、まだ第三者に見られたことはない。

あまり学内でくつつきすぎていると、上級生たちに冷たい視線を注がれる恐れがあるので、はるみと仲のいい他クラスの連中のところに連れて行った。杉本から離れてだいぶたち、はるみもそれなりの友だちを外で作っているようだった。

それがいい。それができるだけの力を持つ女だ。佐賀はるみは。

健吾は給食後の腹ごなしに体育館へ向かった。

空いていればバレーボールかドッチボールかのうちどちらかをできるのだが、大抵は二、三年が占領している。さすがに上級生を敬うしかないのですごすと帰る。今日も同じ状況だった。ブレザー、ネクタイともに脱ぎ捨てボールにかじりついているのは、二年D組の羽飛貴史先輩だった。幻のバスケ部エースになるべき人だったはずだ。なんで帰宅部なのか、健吾には理解できない。

二年D組というと、あの軟弱次期評議委員長も混じっている。仲間内で遊んでいるのだろう。三対三に分かれてシュートを決めるべく飛び回っている。

「羽飛、よーし、その調子！」

上から女子の嬌声が聞こえるのも毎度のこと。やはり二年D組の清坂美里先輩と他の女子たちが二階から見下ろしているいろいろ批評している。

「ほおら、立村、ほらちゃんとボール狙えってば、全くあんたってガキなんだから」

目立たなかったのが気付かなかったのだが、ちゃんとかの次期評議委員長様もボールの奪い合いをしているらしい。目を凝らすと確かに、羽飛先輩と反対側の組で、ボールを奪ってはドリブルで進んでいる。しかしシュートチャンスを生かそうとせず、他の奴に回してしまう。結局は羽飛先輩がすぐに奪い返してロングシュートを決めるパターンだ。まさに、委員会時と同じ。ヒーローは羽飛先輩で十分って奴だ。

——やっぱ、バスケの試合は人間関係を写す鏡だっていうけどほんとだな。

今後の委員会研究に参考になる事例だと思いつつ、健吾は体育館から出た。

立村が小学校時代、死ぬほど泣き虫だったから嫌いになったわけではない。

意味不明の女子おっかけ事件を起こして騒ぎになったという女狂い伝説を聞かされて軽蔑したわけでもない。

自分に関係なければ勝手にしろってことだ。その噂を事細かに教えてくれた先輩も、さほど立村に対しては嫌悪意識を持っていないようすだった。

「ま、あいつも悪い奴じゃないんだけどな」

と大抵前置きがついていた。

最初その他中学交流試合についていった時だったろうか。

本品山中学に遠征で出かけた時、たまたま青大附属中学の話となり、

「そういえばなあ、品山で三年ぶりに合格した奴がいたんだけど、あいつ元気かなあ」という脳天気な話題に進み、

「そういえば立村っていたけど、あいつ相変わらず授業中しくしく泣いてるのかなあ」

「ちょっと肩を叩いて、驚かせただけで泣き出すしなあ」

「人が近づくだけでもだめみたいだったぞ、あいつは」

「まあでも、ああいうのって切れると怖かったよなあ。何されるかわからねえしなあ」

しかじか。しかじか。健吾が盗み聞きした範囲によると、品山小学校三年ぶりの合格者たる立村上総は、信じられないささいなことで大泣きしてしまう困ったガキだったということだった。

もともと軟弱な男は無視するつもりでいたが、さらに理由が深まった程度に過ぎない。

しかし何でだろう。

もっといいかげんで馬鹿であっても、いい奴、尊敬できる奴、そう思えばためらうことなく健吾は頭を下げるだろう。そのくらいの礼儀は持っている。九九はいえなくても知らない国の言葉があっという間にマスターしてしまうという能力は、すごい。曲がりなりにもあそこまで男子連中の信頼を集める手段は相当なものだろう。

あれさえなければ健吾は素直に立村を先輩として呼んでやれるのだ。

——あの女なんかをひいきしなければな。

入学当時から、どうも立村は杉本梨南をすっかりお気に入りしているらしかった。あの全校集会ファッションショーでも杉本のことを絶賛し、やたらと呼び寄せ近所の喫茶店に連れ込んだりする始末だ。ちゃんと立村には清坂先輩というもったいない彼女がいるというのにな。

まがりなりにも彼女がいるなら一筋に生きろと健吾は叫びたい。

それともなにか。杉本の気持ち悪いくらいぶらさがった胸が好みなのか。

単なる巨乳好きなのか。

なにかあると「杉本は頭がいいよ。本当にすごいよ。よくやった」と繰り返している。そのくせ杉本には「あの不細工な顔」と誇られているのを知ってか知らずか。自分を可愛がってくれる先輩にすら、あの女は平気で失礼極まりない言葉を投げるのだ。お天気な奴だ。きっと杉本にのぼせ上がっているから、何も回りが見えないのだろう。

健吾はどうしても許せない。

最低女に狂っている馬鹿男。

どっちもどっちだ。

その4 嘲笑する理由

健吾は口笛を吹きながら教室に戻った。すれ違いざまに職員室にて受話器を握り締めている松山先生を見かけた。真面目な顔をしてだ。珍しい。ふだんはおちゃらけてるっていうのに。借金の申し込みだろうか。人間、生きているといろいろ後ろめたいこともあるんだろう。二十四歳か。

——同い年だ。

吉久菊乃（よしひさきくの）先生。

ふわふわパーマをかけたままの、お人形さんのような感じだった先生。

六年時の担任だった。結婚退職して赤ん坊が腹から出てくるのを待っている。膨らんでいく腹の大きさを見せ付けられてかなり退いた。小学校の頃はよく泣かしたけれども、いつも笑顔で返してくれた。卒業の頃にはみな……ひとりを除いて……中学に行きたくないと泣いてしまう奴らが育っていた。

そう、あの女を除いて。

——そうだ。佐賀を連れて会いに行こうか。ひさびさに。

健吾は職員室前の赤電話を取った。珍しく人がいない。適当にメモしたところに書いてあったものだった。三回コールしたらすぐに繋がった。

「はい、吉久です」

結婚していても吉久姓のまま。混乱しない。

「先生、お久しぶりっす。新井林だけど」

「あら、健吾くん。どこからかけてるの？ 今、学校じゃないの？」

甘い声だった。

「学校です。あの、今日、放課後、佐賀連れて遊びに行っていていいですか」

「え？ いきなりねえ。びっくり。でもいいよ。はるみちゃんと一緒に？」

「ちょっと先生の知恵を借りたいんだけどさあ。いいか」

「わかった。学校終わるのは三時半以降ね。青大附中から来るの？」

「うん。今日は部活がないから」

一年実力試験三日前から部活が休みになる。一応、青大附属はエリート校らしくその辺はきっちりしていた。どこがといたいのが利用できるものは利用する。

「じゃあ今から、部屋の掃除しなくっちゃね。じゃあ待ってるからね」

めずらしいことではない。他の女子連中も、公立に行った連中も悩みを抱えた時はみなしたとだった。杉本梨南以外、菊乃先生はみんなから慕われていたのだから。あの女とその親がつるんで、菊乃先生をつぶしにかかったことを知っている健吾としては、はるみ同様悪から守らねばならない「女子」のひとりだった。いや、今度はおなかの赤ん坊入れてふたり分か。

夏休み前、まだまだ青かった自分をなだめてくれたのが菊乃先生だった。

はるみも一緒に座っていた。季節はずれのみかんをほおぼりながら、ゴールデンウィークの一日、ずっと健吾の話を聞いてくれた。

——健吾くん、なんで杉本さんがあんなにはるみちゃんをいじめるか知ってる？

——佐賀のことを嫌ってるからだろ。

——ううん、違うのよ。健吾くんのことを杉本さんが好きだからなのよ。でも健吾くんははるみちゃんのことを好きでしょ。だから、悔しくてならないの。

健吾も他の連中からうんざりするほど聞かされていたし、見え見えだった。

——健吾くん、どうする？

——冗談じゃねえ。俺には佐賀がいる。

——おお、断言しちゃったねえ。そうよね。迷惑よね。でもはるみちゃんは悩んでいると思うのよ。健吾くん。男としてできることをきちんとするのよ。お姉さんとしてのアドバイス。

——男としてできることってなんだよ。

——はるみちゃんを守ってあげることよ。女の子の嫉妬は怖いんだから。女の子の友だちなんて軽い軽い。健吾くんがしっかりしていれば、はるみちゃんはめげないですむの。

——菊乃先生もやっぱり、杉本が嫌いなのか？

少し考え込んだ顔をしていたが、

——ううん、とってもかわいそうな子だと思うの。誰にも好きになってもらえないで、ばかにされてることに気付かなくて、自分が偉いと思ってるなんてね。だから健吾くん、はやく大人になっちゃいなさい。杉本さんを見下してやりなさい。赤ちゃんだと思えるようになりなさい。おんなじ年だと思うから腹が立つのよ。

大人になるって大変だ。

どうすれば菊乃先生やはるみと同じように、

「杉本梨南はしょせん赤ちゃんなのよ。かわいそう」

と思えるのだろうか。健吾にはまだ、激しい嫌悪の対象でしかない。どんなに正々堂々きれいなやり方で戦おうと決意しても、泥を浴びせるような言葉をぶつけられ、自分が崩されそうになる。

——どうすれば、俺は大人になれるんだろう。

やたらとピンク色のじゅうたんとカーテンが目立つ部屋だった。非常に居心地悪いものがある。女の部屋っていうのは誰もそうなのだろうか。まだはるみの部屋には入れてもらっていないのでその辺は想像なのだが。アパートは六畳二部屋だった。赤ん坊が生まれたら別の部屋に寝かせなくてはならないからだそう。

「健吾くん、はるみちゃん、さあ、食べてね」

おなかぱんぱん、動くたびにだぼっとしたエプロンみたいなスカートが揺れた。あと一ヶ月くらいで生まれるらしい。菊乃先生もこんなに身体を動かしているのだろうか。寝てなくて

はいけないのではないだろうか。気になったので聞いてみたところ、

「大丈夫なのよ。あとは赤ちゃんがでてくるのを待つだけだからね。栄養つけておかなくちゃ」
全く問題ないらしかった。よくわからない。

旦那さんはいつも夜九時くらいにならないと帰ってこない。とりあえず健吾たちは夜七時くらいまで遊んでいてもいいとお許しがした。髪をふんわり広げた感じのまま、吉久先生は両足を開いてべたりと座った。こたつの上にはシュークリームとハート型のクッキー。たぶん菊乃先生の手作りだ。

「先生食っていいか」

「いいよ。どんどん食べなくっちゃ」

菊乃先生の側でお運びさんをしていたはるみの側にくっつき、健吾はまずシュークリームを先に取った。口にほおぼるのを見届けてからはるみが自分の分をつまんだ。ちょっと砂糖が入りすぎている感じで甘すぎた。

「健吾くん、甘い嫌いなの？」

「嫌いじゃねえよ。けどさあ」

「だめなら、はるみちゃんにあげれば？」

いたずらっぽく菊乃先生がはるみに目で合図をしていた。

「いや、食う。冗談じゃねえ」

完全に菊乃先生は、健吾とはるみに対して「教師」の顔を捨てている。十二歳年上のお姉さんという身軽な身体。うっかり変なことを言って、

「健吾くん、だめでしょ。学校でそんなことしちゃ」

と怒られることもない。だからいつも、クラス会は盛り上がる。杉本梨南が混じらないようにするのも健吾の計画どおりだ。文句を言われたら……たぶんそんなことはないと思うが……「クラス会ではなくて、有志の集まりにすぎないのになぜ、顔を出したがるのか」

と冷たく言い返してやればいい。

「でもねえ、健吾くんも、よりによってなんであの子と同じクラスになっちゃったんだろうね」

すでに菊乃先生は杉本のことを「あの子」と冷たく呼び習わしている。第一回春のクラス会からそうだった。杉本梨南をこの先生は、女子なのにめずらしく嫌っていた。

——まあな、あんなひでえことされたら当然だな。

「絶対、あれは青大附中の陰謀だ」

「そうよね。なに考えてるんだろうね。でも健吾くんもはるみちゃんも偉いね。しっかり恋人になっちゃったんだもんね。きっとあの子、悔し涙流してるよ」

「先生、あのそれは」

はるみがクッキーに手を伸ばしている。でも健吾の目に気づいてまず、皿にひとかけらおいてくれた。いつもそうだ。はるみは何を置いても先に健吾を優先してくれた。

「いいのよここでは言いたいこと、言っちゃいなさい。ああ、私だって先生じゃなくなったからもうすっきりしたわよ。ほんっとああいう子、大人になったらいやってほどしっぺ返しされるんだから。あ、でもはるみちゃんにとってはそれどころじゃないか。あと二年も一緒なんだよね。」

どうにかしないと、ね」

「俺がなんとかする」

健吾はもうひとつシュークリームをほおぼった。

菊乃先生が六年の秋、杉本梨南の親につるされるような形で校長に叱られたことを、健吾は母から聞いていた。有名な事件だった授業が脱線しすぎて進度が遅すぎるという、杉本梨南本人の訴えを真面目に受け取った両親の直訴らしい。もともと杉本の家は気位が高すぎて付き合いづらいいとわかれていた。クラス父母の団結力が猛烈に高まったのは言うまでもない。

——菊乃先生をやめさせるな運動起こったもんな。

タイミングも悪かった。その前後、杉本の青大附属受験に際して、「もう少し人との付き合い方を勉強しなくては」というニュアンスのことを菊乃先生は話したらしい。決して、怒鳴ったわけでもなく、冷静沈着に、先生の顔して話ただけだったという。

しかしながら「うちの梨南ちゃんに失礼な」と激怒した杉本の両親は、まず校長へ、次に教育委員会へ話を持っていったという。

授業が低レベルだったとか、いつも授業をほったらかして遊んでいたとか、多少はめを外しすぎたきらいはあるクラスだった。みんなで一緒におしゃべりしたいと、授業中いつのまにか雑談になったりとかがしょっちゅうだった。しかしそれが気にいらなかったらしい。杉本の成績が群を抜いていたのは自分で勉強したからであって、学校は役に立たないところだ。他の児童はかわいそうだ。などなど並べ立てたという。

教育委員会が動いたにもかかわらず、父母が一生懸命に菊乃先生を守るよう運動し、何事もなくおさまった。これにより杉本一家は学区内で嫌われ度が高まった。杉本梨南本人は全く無視状態だったが、一応担任らしい顔をして菊乃先生は話し掛けていたはずだった。

「杉本さん、みんなと仲良くしましょうね」と。

——でも、すげえよな。本音だよな。これって。

蛆虫を詰め込んだシュークリームを口に突っ込んでも文句は言えないことを、あの女、あの女の両親はしてきている。健吾としては当然だ。

「でもね、健吾くん。他の人も言っているけど、ああいう子はほっといた方がいいのよ。どうせ大人になったらいやってほど、嫌われるんだから。本当に好きになってほしい人に振り向いてもらえなくて泣いちゃうのは、ああいう子なのよ」

「はあ？」

よくわからず、健吾は紅茶を入れてくれた菊乃先生にカップを差し出した。

「もうふたりとも、おとな、だから教えてあげるけどね」

はるみが顔を赤らめる。どうやら健吾に内緒で、ふたりの付き合いについて報告しているらしい。これはまずい。あとで問い詰めよう。もしそうだったら罰としてあれを。健吾はにらみつけた。またはるみが膝に手を置いてうつむいた。

「あとで、何話したか言えよ。でなかったら、お仕置きだ」

「あれのこと？」

目で会話ができる。はるみの髪がちょっとだけ崩れていた。

「なあにふたりでいちゃいちゃしてるのよ。もう、ほんっと妬けちゃう」

足を広げたまま、菊乃先生は背をぴんとのばした。

「どうして健吾くんにあんなにあの子がつかかかってきたのかっていうとね。小さい頃から健吾くんははるみちゃんのことを守ってきたでしょ。それが気に入らなかったのよ。他の先生たちも言ってたわよ。健吾くんとはるみちゃんが一緒にいると気に入らなくて、いきなり物を落としたり、ノートを破ったり、いろいろしてたって。はるみちゃんを無理やり引き離したりしてたって。でも、大人はねなかなか、いえないのよ」

てっきり誰も気付かないでいると思っていた。なんで手伝ってくれなかったんだろう。かなり健吾としては怒りを覚えた。守ってやれといたかった。

「だからあれは全部、妬きもちなの。どんなに健吾くんの気を惹こうとしているとしても、全然相手にしてもらえないどころか、とことん嫌われてくでしょ。ね、はるみちゃんだったらきつと、友だちになってもらうために一生懸命、ご機嫌とっていたでしょ？」

「うん、梨南ちゃんと仲良くしたかったからそうしてきたつもり」

小さい声でつぶやくはるみ。だからそういう言い方はやめろ、と怒鳴りたかった。

「でしょ。はるみちゃんは偉いなあといつも思ってたの。杉本さんがさんざんわがまま一杯に振舞っている間、はるみちゃんは友だちがいい気持ちになるようなことをしていたのよ。あの子は赤ちゃんだったから、こっちを向いて好きになってもらう方法は、おしめしたままわんわん泣くかものをぶつけるかして、ガラガラを振り回してもらうしかないって思ってたわけよ」

「赤ちゃんだと、思えばよかったんですね」

——あの女のしていることが、そんな簡単に許せることかよ。

ふたりがくすりと笑っている間、健吾は煮え繰り返りそうな気持ちを甘いクッキーをかみ締め押さえていた。

「健吾くんが杉本さんのタイプだったからなの。私だけの意見じゃないのよ。他の子たちも、他の先生たちも同じこと言ってたんだから」

菊乃先生はもう「先生」じゃない。

だから言いたいことがいえるのだ。

——言いてえだろうなあ、桧山先生も。

何かをたくらんでいる桧山先生の顔を思い出した。同年代だ。

「けどなあ、あの女、いまだに佐賀に手出そうとしてるんだぜ。むかつくだろそりゃあ」

紅茶のおかわり三杯目。口に物をほおぼりつぶやいた。

「女の嫉妬ってやつね。しかも気付いてないから厄介なのよね。こういうおばさん、世の中にはたくさんいるからねえ。赤ちゃんから今度はいきなり、おばさんになっちゃったのかしらねえ。杉本さん」

「おばさん、なんて」

くすくす笑い始めるふたり。こちらの意見の方が健吾には納得がいく。

「健吾くんが色男だから、もう離れられないのよ。なんとしてもこっちを見てほしい、もしかしたら自分のことを好きになってもらえるかもしれないから、と思ってつかつかってくるのよ。

でも、健吾くん。はっきり言って、全然、でしょ」

「当たり前だ。あんな奴、男でもむかつく」

「女だからなおさらむかつくでしょ。本音は」

鋭い。健吾は答える代わりにカーテンを眺めた。まだ外の太陽が薄く揺らいでいる。薄暗くなっている。立ち上がって灯りをつけた。

「カーテン閉める」

ついでにピンクのカーテンも閉めた。中途半端な明るさだが、はるみも菊乃先生も、顔がずっと艶やかに見えた。

「ねえ、健吾くん。杉本さんにまさかと思うけど、彼氏なんていないよね」

難しい質問だ。

「いるわけねえだろ。ただなあ」

はるみが続けた。

「振られた人はいるのよ。二年の先輩に」

——あ、あの馬鹿男だ。

こういう話題ははるみの方が詳しいだろう。

「佐賀、それはお前が話せ」

「うん」

健吾にもうひとかけら、クッキーをつまんで皿に置き、はるみは頷いた。

「二年に立村さんっていう、評議委員の先輩がいるんだけど梨南ちゃんのことをすごく大切にしていたの。梨南ちゃんもいつも側にくっついてたんだけど、その人が別の先輩とお付き合いしてしまったの。だから、梨南ちゃんはショックでまた健吾に八つ当たりみたいなことをしたみたい」

「あれは別問題だ。けどそれも当たってるかもしれねえ」

吐き出すように答えた。単に評議委員長ポスト争いでむかついて喧嘩を売ったのかと思っていたが、立村のことが絡んでいるとなると納得だ。

——まさかな、清坂先輩とあの馬鹿立村がくっついているとはな。あの女も読めなかったんだな。

「ふうん。ちなみにその二年の男の子ってどんな顔？」

「小柄だけど、王子さまって感じ」

「おいあいつのどこがだ。あの馬鹿面でろくにももの食ってねえような顔のどこが！」

はるみを怒鳴りつけたが、本人は全然どこ吹く風だ。

「だって、他の人が『小公子様みたい』って。ほら、セドリックが大きくなったような感じだって話してたわ。梨南ちゃんは健吾のような顔が本当は好きなので、いつも『不細工で馬鹿で頭が悪い』とか言ってたけど」

「その通りだ、奴についてはそのとおりだ」

はるみの口から立村のいいところを誉められるとむかついてくる。よりによって、健吾と正反対の男を誉められるっていうのは気持ちよくない。

「うわあ、そうなんだ。王子様みたいな感じなのね。顔でぼおとした感じじゃなくて」

菊乃先生の言葉を遮った。

「ばかやろう。あの男が今まで何してきたか、知らないだろ。俺は知ってるんだ、いいかよっく聞け」

以下、次期評議委員長・立村上総にまつわる事実を、約十分の間しゃべらせていただいた。はるみと菊乃先生はときおり顔を見合わせて、特に何も言わずに聞いていた。健吾のことをやっぱりわかっていらっしやる。

「小学校六年の時だったらしい。やたらと人の顔色ばかり見ておどおどしていたらしいが、そういうのはしょうがないわな。性格だ。まわりの連中もそういうあいつの性格に手を焼いて、いろいろ誘ったり仲間に入れようとかしていたらしい。やり方が荒っぽすぎたっていうけど、そのくらいふつうは耐えられるよな。人間なんだから。ところが卒業式数日前、あいつが青大附属に合格した直後。いきなりクラスの浜野さんっていうサッカー部の同級生に決闘を申し込んだそうなんだ。それもわかる。むかつく奴がいたら正々堂々と勝負をかける、これもいいことだ」

はるみを見つめて、肩をぽんぽんと叩く菊乃先生。わかっていらっしやる。

「浜野さんって人はすげえよく出来た人らしくって、ある程度負けをあの手鹿男に譲ろうと思っただけなんだ。話によると、あえてわざと負けてやって、気持ちよく青大附属に送り出してやろうと、覚悟を決めたらしい。からかいすぎたし、かわいそうだしというあつかい心からきたものらしい。浜野さんから聞いたわけじゃねえよ。一学期に俺が本品山中学の練習試合に行った時、聞かされた話だ」

「ふうん、その浜野さんって子は、男の子って感じでかっこいいわ。なんか健吾くんに似てる」

「知らねえよ。ふつうだったらここで気付くだろ？ 奴の得意とする自転車のぶつけ合いに決闘内容を選んでやったくらいだから。ところがだ。あの男は全くそういうところに気付かないで、馬鹿正直に土手から突き飛ばして、浜野さんにひでえ怪我をさせたらしい。信じられねえよな。しかも本人はそれが終わったことだと思ってさっさと帰っていったらしい。ここで勝負がついたなら、俺ならためらうことなく握手するぜ。勝ったことは認める。けどな。相手をたたえろよフェアプレーを誉めろよって俺は言いたい。そんなこともしないでおびえて逃げて、あとは親同士で話し合いさせて、本人は出てこねえ。最低だよな」

「ふつう、学校側の問題にならないのかしら。その、立村先輩って子、青大附属に入学したんでしょ。あの学校、そういうところで合格取り消しにしたりしないのかしら」

「するよなするよな。その辺があんな女ともおんなじなんだ。たぶん何かしたんだろうな。とにかく浜野さんは相手に情けをかけたがために、一学期サッカー部を棒に振ったというわけだ。これがまず第一段」

複数の本品山中学バスケ部の二年生から聞き出したことだった。

ただ健吾の言葉には脚色が入っていることも否定できない。

なんとなくだが、本品山二年の人たちが話す口調には、カバーがかかっている感じがしたし、立村に対する恨みのようなものもさほど感じられなかったからだ。もう過去なんだろう。浜野さんという対決相手もかなり出来た人で、多少つっぱってはいるものの兄貴分みたいな存在らしい。浜野さんと対に話せる奴だったら、健吾も立村を多少は尊敬できたかもしれない。立村は結局ヒステリックにぶつかっておびえて逃げ出した大馬鹿野郎なのだ。尊敬する先輩ランキングから思いっきり下げたのは言うまでもない。

健吾は第二段を続けた。

「まあ、小学校のことはご破算にしたっていい。奴が青大附属に入学して先にしたことというのが、クラスの人気あるふたりに近づいたってことだ。まあ、気があうならそれでもいいわな。そのふたりってというのが、佐賀、知ってるだろ」

「羽飛先輩と、清坂先輩ね」

頷いた。その辺ははるみもよく見ている。

「菊乃先生知らねえかもしれないけどな、今言ったふたりってのが、めちゃくちゃ人気ある先輩たちなんだ。あの、おどおどした馬鹿男なんかには鼻もかけないようなタイプなんだ。ところがあいつは自分を守るためにそのふたりにさっさと近づき、お友達になろうと計画したらしい。ひとりは親友に、ひとりは自分の彼女にしちまった」

「ただ仲良しになっただけじゃないの？」

菊乃先生がぎょとんとして首をかしげた。

「考えてみるよ菊乃先生。もしだ、俺のところに、ほら、三組にいただろ。少し頭がぼーっとした感じの、やたらとあの女にくっついて嫌がられてた奴」

妙に納得するふたりの顔。

「ああいう奴がいきなり、俺のところにきて、友だちになろうとべたべたしてきたところ想像してみろよ。俺ならぞっとするぜ。保護してほしいのかどうかわからねえけど、俺は俺と相性の合う奴と付き合いたいと思うよな。いじめはしねえけどな。あいつは何を考えたか、化けの皮をかぶって羽飛先輩と清坂先輩に近づき、完全なお友だちの顔をしていったってわけだ。自分の同じレベルの連中とつるむのがいやだったんだらうな」

これはほとんど、二年の女子たちから聞かされたことだった。

二年D組関係ではなかった。たまたま、女子バスケ部の連中が噂していた時のことを思い出したのと、職員室に行った時に偶然、他の先生たちが立村についてぐちっていたことを耳にした程度である。

「彼もかわいそうな子なんですが」という前置き付で、現在二年D組担任の菱本先生が誰かに話していたのを耳にした。地獄耳である。

いったいどこがかわいそうなのかはよくわからない。父子家庭で、家族の愛に飢えているとで

もいうんだろうか。数学能力が欠加していて将来苦勞するのが目に見えているからっていうんだろうか……ならなぜ青大附属に合格したのかが健吾としては謎である……とにかく、嫌われるよりは「哀れまれている」といった方が近い。あの女と同じ扱いをされているのに気付いていない。ってわけだ。

「まあそれだっただうだっただいいぜ。俺には関係ねえ。さて第三幕。あの野郎は清坂先輩に手を出しながら、何を考えたか別の女子にちょっかいだしやがったってわけだ」

「杉浦先輩のこと？」

「そうだ。杉浦先輩がなんと、本品山中学に進んだ浜野さんの彼女だということも気付かずちょっかい出したりさらには、しつこく追い掛け回したりしたらしい。その辺は俺も見えていねえからどうでもいいんだ。だが、あまりのうるささに根を上げた杉浦先輩は、先生に助けを求めたというわけだ。ふつう、するか？　そこまで？　相手に嫌がられていると感じたら、俺ならすっぱりあきらめる」

はるみを見て、向こうが首を振るのを確かめた。

「最終的に絞られて手を引いたらしいが、その時なんと、清坂先輩と羽飛先輩を利用してクラスを黙らせたそうじゃねえか。ここまでやるかよ。最低だな」

こちらのニュースソースは別ルートからだ。やはり二年の女子たちが流してくれたことなのだが、今までの連中がわりと立村びいきの発言中心だったのとは全く違う。仮想敵として立村の存在を受け止めている。手を出されたという杉浦先輩は、何度か見かけたことがあるがかなり可愛い部類に入った。はるみに似ていると思う。彼女と仲良しの女子たちが取り巻いて、いろいろ噂を蒔いているようすだった。顔がどうか性格がどうか、そういう問題ではなく、

「立村くんがしつこくて、杉浦さんが苦しんでいる。なんとかして」

と声を大にして訴えたかったようだ。

もちろん好きな子がいて付き合いたいと思うのは自然だろう。健吾が人のことをとやかく言うことは絶対にできない。証拠ははるみ、そこにおり。

健吾が許せないのは、立村が振られたにも関わらず最後の最後まで追い掛け回したことにある。もしはるみを取られたら健吾はどんなことがあっても取り返すだろう。でも、はるみ本人が健吾をほしくないというのだったらあきらめるしかない。いや、あきらめはしないがゆっくりとチャンスをうかがっていくだろう。

しかし立村の場合は周りの眼を気にせずにしつこく寄って言ったという。

相手が自分の天敵・浜野の彼女であることも知っててか。

——勝ち目のねえ戦いをよくもまあしたもんだよな。

第一、周りの取り巻きが担任に通報するという事態が尋常ならざることではないか。

一応、評議のくせしてそんなこともわからないのか。

ここまで健吾は言いたいところだったが、あえて伏せたのは自分の墓穴を掘る恐れがあるから。あきらめて第四段に続いた。

「まあそれだっていいさ、さて次の年。杉浦さんから手をひいたあいつは、とうとう大本命単勝一・〇倍の清坂先輩にアプローチしたそうだ。勝ち目ねえよとは思っていたらうな。その一方で抑えに杉本まで手を出すという始末。まあこっちの方で決まってくれば一番話は丸く収まったろうな。惚れている相手だったらたとえ蛆虫であろうとも、あばたもえくぼって奴でな。ところが何かの間違いで清坂先輩を口説き落としてしまった。まぐれだぜあれは。そりゃあな、美人で人気者の清坂先輩を落とせば奴の立場も安泰だ。本条先輩にもおべっか使っているわけだしな。自分の保身にはどんな手でも使うってことだ。そして、奴はためらうことなくあの女を切り捨てた」

健吾がぶち切れたのはこの点だった。

他人の恋路なんてどうでもいい。その一、その二、その三における出来事は健吾にとって入学前のことだし、「尊敬できない頭の軽い先輩」として無視すればいいことだ。しかし、いくら女狂いとはいえあの杉本梨南に手を出そうとしたり、運良く清坂先輩にOKをもらうやいなやべたべたとくっついて自分の身を守ろうとすると。要は、節操がなさ過ぎるのだ。もし杉本梨南を覚悟の上で選んで、毎日一年B組の教室に杉本を迎えに来るなり、健吾のような態度の相手にけんかを買って出たりでもしたら、自分の立村観はかなり変わったような気がする。あの馬鹿女を選んだ馬鹿野郎と思いつつも、「ずいぶん根性ある奴じゃねえか」と一目置いて、評議委員長としても受け入れられたような気がする。趣味が悪い女狂いの点はさておいて。

しかし、立村は結局、自分の保身のために杉本を切り捨てた。

自分がふつうだと思っているのなら、男としては当然のやり方だろう。

しかし立村は本音で杉本梨南のことを気に入っていたはずだ。

好きな女はひとりで十分だろう。

たまたま高級品の女子が振り向いてくれたからといって、自分の惚れた女を見捨てるなんてことができるだろうか。健吾だったら絶対にできない。はるみが仮に嫌われつづけていていじめられていたとしても。たとえはるみを選んで全校からシカトされたとしても。

——そのくらいのことをしないで、なあにが。

「俺だったら、たとえ嫌われ者に惚れたってかまわしねえ。絶対に守ってやる」

はるみの瞳をまっすぐとらえ、つぶやいた。そばでぱちぱちと小さな拍手。菊乃先生がにこにこしながらおなかの上で手を叩いていた。

「よっくわかったわ。しょせん、杉本さんの好きになる男の子って感じなのね」

「健吾の言うことは大げさです。だって、そんな人かどうかわかんないし」

「俺の言うことが間違ってるというのかよ」

「ううん、違うの。健吾。だって立村先輩は梨南ちゃんを振ったんだもの」

「だから言っただろ、自分の立場を危うくしたくないからだって」

「梨南ちゃんはそれに気付かないでまだ思っているのよ」

知るか、そんなこと。あの女が誰に惚れていようが健吾には関係ない。立村に熱を上げてもら

っている方が好都合だ。

「馬鹿は馬鹿どうしでくっついてもらってればいいんだ」

菊乃先生はふんふんと頷きながら考え込んでいた。シュークリームをもうひとつつまみ、
「健吾くんは大変だったもんね。私もわかる。大嫌いな相手に好かれるってストレスたまるもんね。よく言うじゃない？ 相手を好きになると大抵好きになり返してくれるって。大嘘よね。どんなに好いてくれても、絶対にいやなものはいやよね。しつこくされたらもっといやよね」

どこかひっかかるものがあった、健吾は答えずに紅茶をすすった。音を立てて一気に飲んだのでむせた。背中に暖かいものが乗ったのを感じた。上下に温もりが動いた。

「あらあらはるみちゃん、いきなりさすっちゃだめよ。健吾くん、息の根止まっちゃう」

「そんなことねえよ」

心臓がどくどくしたのを、どうやら菊乃先生に聞き取られてしまったようだった。

夕方ではなく夜に近い時刻、ふたりは菊乃先生の部屋を出た。

「またふたりで来てね。もう私は、先生じゃないんだから。お姉さん、って呼んでね」

「お姉さんじゃねえだろ、おばさんだろ」

「こら、失礼なっ！」

ごちそうさまと答えたはるみを無理やり先に外へ出し、健吾はもういちど菊乃先生に向い尋ねた。

「菊乃先生」

「ん？ なあに？」

「さっき言ったことだけどさあ」

口籠もった。咽の小骨をとりたかった。

「嫌いな相手に好かれても、絶対にいやなものはいやだって、さっき言っただろ。そう思っても絶対変じゃねえよな、俺」

「杉本さんをどうしても好きになれないってこと？」

菊乃先生はそっと健吾の耳にささやいた。

「嫌いなものは嫌いでもいいのよ。当然。でもね、健吾くんやはるみちゃんがあんな子のことで、叱られるなんて損よ。大丈夫、私も協力するから」

「協力？」

おなかを撫でながら、もういちど菊乃先生は微笑んだ。

「私、もう先生じゃないのよ」

その5 鬼になる理由

いきなり桧山先生から電話がかかってきた時は焦った。なにかまずいことやらかしたかと冷や汗ものだった。ちなみに英語の試験問題を横流ししてくれたわけではない。

「新井林、試験が終わってから悪いが生徒指導室に来てもらえないか」

軽い挨拶の後、雰囲気壊さぬままに頼まれた。

「へえ、なんか俺、悪いことしたっすか」

実力試験終了後すぐバスケット部の練習が再開だというのに面倒なことだ。

思いっきりいやそうに答えてやった。

「本当にお前もいやだろうなあとは思うんだが、どうしてもやってもらわないと先に進めないんだ。唯一頼りになる評議なんだからな、お前」

言い方に何かどろっとしたものがある。ぴんときた。学校で話さずに、わざわざ家に電話をかけてきたということは、クラスの連中にばれたらまずいことなんだろう

「あの女がらみかよ」

「あの、女か。鋭いな」

否定しないということは、きっとそうだ。風呂に入ったばかりなのに一気に湯冷めしそうだった。健吾はタオルで髪をこすりながら受話器にため息をついてやった。

「で、何やれっていうんだよ、先生」

「お前が杉本に対して言いたいことのすべてと、佐賀に対して彼女がしてきたことを、思う存分彼女を目の前にして言い放ってもらいたいんだ。しんどいだろうが」

——やっぱりな。

やるべきことをすぐに悟った。

「いくらでもやってやるぜ。手加減した方がいいのか？」

「いや、思う存分遠慮なく。その辺はお前に任せる。かなりきつい言い方しないと理解できないらしいからな。彼女はふつうの人とは違う理解力の持ち主だからな」

鼻で笑う声。仮にもあんた教師だと突っ込みを入れたい。いくら健吾あの女……杉本梨南…をゴキブリ扱いしているとはいえ、ちょっとまずいんじゃないだろうか。もっとも杉本に言いたい放題ぶつけて土下座させられればそれにこしたことはない。ざまあみろと思うだけだ。ただし一切許す気はない。正々堂々、桧山先生とはるみの目の前できちんとした制裁を与えて三年間、地獄を見させてやるのが健吾の願いだ。いじめなしでも、クラス全員からの堂々とした冷笑と軽蔑、濃縮して浴びせることは決して間違っていない。

——佐賀の傷ついた六年間は戻ってきやしねえんだ。

「俺、一度、評議の席であの女とタイマン張ったんだけどなあ。またやるのかよ」

「頼む、新井林」

おかげで試験勉強よりも対決計画を立てる方に力が入ってしまった。

——しくじった。次の日の試験はぼろぼろだぜ。

桧山先生の電話が終わってからすぐバスケット部のキャプテンへ「諸般の事情で練習遅れる」旨連絡を入れた。二年の先輩たちは温厚な方々だから、いやみひとつ言われることなく受理してもらえた。「青大附属スポーツ速報」の効果もあるのだろう。いつもぼろ負けの運動部だけれども、健吾とはるみがこしらえた壁新聞の力で、少しずつ生徒たちの関心が高まっているようだ。一年B組前廊下で指差しながらじっくり読んでいる女子たちを、最近良く見かける。

——でもまずはゴキブリを退治か。

健吾は小学時代のアルバムを取り出した。

小学校時代の写真はみな青い表紙のやたら重たいアルバムに挟み込んでいる。中からはるみがアップになって写っているものを十枚はがした。左隣をおどおどしながら見つめている写真ばかりだった。選んだわけではなかった。なぜか同じ感じのものばかりだった。

次に手元の簡易アルバムブックを取り出した。現像しに行くところの安っぽいものだった。ぺらぺらした表紙を開くと、そこには健吾の映したはるみの笑顔が続いていた。ふたりで出かけた時、学校でふたりっきりになった時のものばかりだった。笑えと命令したわけではない。いつも、健吾を見つめる時の顔がそれだった。

一枚、髪が乱れていたものがある。

帰り道、街路樹の陰で髪の毛をほどかせた時、思わずシャッターを切ったものだった。

——違いが分かるよな、ふつうはな。

小学校時代の陰気なはるみ写真を、もう一冊の簡易アルバムブックにしまいこみ、健吾はかばんに入れた。戦いの前の緊張か、ぶると震えが走った。

ひとつの賭けだ。

健吾は今まで、たくさんの女子たちと接してきた。むかつく女、いやなタイプ、苦手な女子、たくさんいた。一応男である以上何度かは、「好きです」の言葉を聞かされてきた。もちろんはるみのことがあったから一度も頷いたりはしなかった。でも、どんなにむかつくタイプの女子であっても、その気持ちを踏みにじてやろうと思ったことはなかった。

そう、あの女以外は。

——俺のことを気に入ってくれるのがどうしてだかわからねえよ。でも、他の女子にだったら、どうもありがとくらいは言う。言ってから断る。それが男の礼儀だ。あとは普通に話すだけだ。それだけだ。

菊乃先生もはるみも、口々に言う。

「杉本さんは健吾くんのことが好きだったのよ」

「梨南ちゃんは健吾のことがきつと好きだったの」

——だから佐賀や菊乃先生を踏んづけて許してもらえると勘違いしてるのか。あの女は。徹底して憎んでももらえればそれにこしたことはない。叩くのめすのに遠慮はいらない。

でも、健吾のアンテナでも、杉本梨南の隠れた電波をキャッチすることがないとは言えなか

った。吐き気がするほど認めたくない事実だったし、杉本の行動はまず、好きな男子にするようなことではなかった。怒涛のごとく罵るあの態度に「好意」を認めることはできなかった。ただはっきりしていたのは、はるみや菊乃先生を大切にしたい健吾の気持ちを、杉本は蛇蝎のごとく嫌っていた、そのところだった。

もし、周りの人がいうように、杉本の本心が健吾への想いにあるとしたならば。
健吾はためらうことなく、はるみのため、菊乃先生のために、鬼になる。
正義の戦いでなかったとしても、血みどろになって杉本梨南を殺す。息の根を止める。
泥水をたっぷり被ってやる。

次の日の試験は瞬く間に終わった。もともと健吾は学年十番以内をキープしている。一度も杉本以上の点を稼いだことがないのがむかつくが、こればかりは当日の調子なのでしかたない。学年一番を続けている杉本のことを一切誉めない担任たちっていうのも妙な話だが、きっと天狗の鼻をへし折ろうとする目的なのだろう。いつも健吾の時だけ頭をぐりぐりされ褒めちぎってくれた。しくじりはなかったが、それなりにいつもの順位は稼げるだろう。

——まあまあってとこか。

女子側を見ると、はるみがおとなしく帰りの準備をしていた。薄めの茶色いコートを羽織、耳に手を当ててお団子髪を整えている。例に寄ってクラスの女子たちははるみに一言も声をかけない。杉本の指示か、それとも個人的不快感か。その辺は追求しない。

「なにぶりっ子してるのよ」

と聞こえがしにつぶやく女もいる。健吾としてはあとで締めてやりたいところだが、はるみに止められているので今日のところはがまんした。

はるみを手まねきした。

はるみの近くに寄るといやおうなしに、ポニーテールの女と顔を合わせる羽目となる。やるならタイマン勝負の時だけで十分だ。

「健吾、これからバスケット部？」

「いや、もう一発勝負がある。帰ったら電話するからな。変なところいくなよ」

はるみはこくっと頷いた。耳もとの後れ毛をいじりながら、桃色の唇を薄く開けた。

「それと土曜日、練習終わったらお前のうちに迎えに行くからな、その時に、この前菊乃先生にばらした落とし前、つけるから覚悟しとけよ」

菊乃先生に「いやあねえ、妬けちゃう」といわしめた、あれのことだ。

わかっているのかほのかにはにかむはるみ。知らん顔して健吾はつぶやいた。

「じゃあ、行け。あの女に絡まれる前に」

「私、何も怖くないのに」

今度は健吾が全身硬直する番だった。

「怖いのは、健吾のおしおきよ」

お仕置きをひそかな楽しみを取っておいて、健吾は三階の生徒指導室へ向かった。ここはかな

り奥まったところにあるのだが、あまりいいことで使われたことがない。成績の悪い奴が呼び出しを食らうとか、自殺寸前の追い詰められた奴が先生に相談するとか、健吾には全く縁のないことばかりだった。完全に防音されているそうなので、多少ぶっちゃけた話をしてもばれないらしい。

今回はハエたたきとしての入室だ。

「新井林です。入ります」

「よし、入れ」

まだハエもゴキブリもいなかった。扉を開けてまっすぐの窓からは、裸の木々がやせ細っているのが見えた。外は曇りでへたしたら夕方雪が降るかもしれないとは天気予報より。細長いガラスのテーブルが低い位置なので、腹の部分まで丸見えだ。足をおっぴろげて悠々とひとりがけのソファに腰かけている。桧山先生はまだくつろぎ態勢だった。テーブルの上には、黒い綴じ紐で硬い表紙のついた、出席簿のようなファイルが載っていた。表書きに英語の筆記体でなにやら書いてあったが気にしなかった。英語はどうせ嫌いだ。

「俺、どこに座ればいいっすか」

「隣りに来いよ。やはり味方が側にいないとな」

含み笑いをした後、桧山先生は両腕を組んで背中をのけぞらせた。健吾が長いソファの端、桧山先生の向かって左隣りに身を沈めると、いきなり膝を叩かれた。敏感な部分でくすぐったかった。

「今日は思う存分本音を言ってしまえ。担任として、俺が許す。傷つくかどうかなんて考えるな。お前の考えていることをすべて言い尽くせばいいんだ。暴れられたらその時俺がなんとかする。まあこれでもし杉本が反省しないようだったら」

「あの女が反省するわけねえよ。六年間俺がどれだけ」

「ふつうの女子ならともかく、あの杉本だからなあ」

「あの杉本」という部分をゆっくりと、余韻残すようつぶやいた。

「仮に彼女が土下座して謝ったらどうする？」

「するわけねえだろ。しても俺は許せねえよ。俺よりも佐賀の立場が問題だ」

「そうだな。簡単にはいかないよな」

健吾は時計を覗き込んだ。一応二年のキャプテンには連絡してあるとはいっても、早く体育館に行きたいのもまた事実。三日からだを動かしていないと足がなまりそうだ。数回足を踏み鳴らし、健吾はひょこっと尋ねてみた。

「先生、あのな」

「どうした新井林」

「先生、どうしてあの女を嫌うんだ？ 俺と同じ理由かよ」

「俺は担任だぞ、そんなことするか」

「だってさ、目がそう言ってるぜ。ゴキブリを叩き潰したいって」

物言わず、肯定の意。桧山先生の唇が一瞬への字を描き、すぐに戻った。うまい。

「ゴキブリは、苦手だな、確かにな」

ミニアルバムを取り出した。健吾だけが知っているはるみ表情が満載だった。自慢したい気持ちと、よその誰かに取られるんでないかというおののきも感じていたりする。自分でもそれが女々しくてうざったい。

だから明日、おしおきを敢行するってわけである。はるみの、無意識にかもし出すふわふわした空気が、よその馬鹿なハエを近づけてしまいそうだから。

ノックが響いた。

「入りたまえ」

健吾への言葉とは全く違っていた。ゴキブリ相手専用の言葉遣いで桧山先生が答える。

ねじまき人形のように四十五度、ぴくと頭を下げた制服姿の女子がひとり、姿を見せた。直角に振り返り扉を閉めた。音は立てない。

ポニーテールのぶっとい髪の毛がむかむかしそうだった。隣の桧山先生は、まさにゴキブリを叩き潰す寸前の気迫でもって、杉本梨南を迎えていた。

「戸口の椅子に座りたまえ」

野郎ふたりの視線にむかつきを隠せない様子だったが、おとなしく杉本は腰掛けた。桧山先生の向かいで、一対一。健吾の方を見下すようににらみ、すぐに逸らした。目と目が合うだけでも気持ち悪いので一切無視していた。桧山先生も一瞥後、わざとなのか健吾の方のみに顔を向けて言葉を続けていた。両手を膝に置いたままの杉本は、相変わらず感情のない瞳を向けていた。。「今日来てもらったのは、杉本、君がどこまで今のクラスについて理解できているかを知りたかったんだ」

ちらっと見てはすぐそらし、話す時は仕方なく顔を見る。いかにもゴキブリ用のまなざしだ。大人としてはまずいんでないかと健吾は心配になったくらいだった。

「決して君を責めたいと思っているわけではない。理解できているかどうか、それだけだよ」
——理解、できてる？

よくわけがわからない。杉本も言葉の意味が理解できないようすで黙ったまま座っていた。「俺の言っていることが、わかるかな。わからないなら素直に言っていんだよ」

馬鹿丁寧だった。近所の幼稚園児を捕まえて、「あのね、わかるかな？」と赤ちゃん言葉を使っているのと似た空気が漂った。正直、こっちも気持ち悪い。

「わかるんだよね、どうかな」

針金の声で杉本は答えた。一切視線を逸らさない。これも怖い。

「わからないのでしたらとっくに口にしています」

「そうか。それならまず、新井林からすべての説明をしてもらおうか。新井林はよく一年B組の実情を知っているから、君にもわかりやすく話してもらえと思うんだが」

「なんで新井林なんかとまた話をしなくてはならないのですか。六月に三年の本条先輩を仲介役にしてけりをつけました。委員会を私が、クラスを新井林が担当するということですからすべて終わったはずですよ」

鼻でせせら笑う桧山先生。隠そうともしない。これは露骨だ。

——おいおいどうするんだよ、先生。この女何するかわからねえぞ。

「いや、状況を理解できれば、君も考え直してくれるのではないかと期待しているのだが」

「いまさらくだらないことで時間をつぶされるのは迷惑です」

「いや、ちょっと待て。もうひとり、話を一緒に聞いてもらわなくてはならない人がいる。新井林だけでは君も落ち着かないだろう？ 一番君が、信頼している人だよ」

以上ここまでの、保父さん感覚の語りかけは終わったらしい。ほっと一息つき健吾も椅子にのけぞった。誰が来るんだかわからないが、杉本の信頼している相手とならあまり健吾とも相性が合わないだろう。

桧山先生は時計を見た。

「先生誰だよ、それ」

好奇心には勝てず、桧山先生のブレザー袖口を引っ張りながら尋ねてみた。

「もうじき来るよ」

二十四歳の大人声で桧山先生は答えた。

返事をしかけた時に杉本が割り込み、一気に言葉が変わる。

「私は何も悪いことをしていませんし、ここで新井林を相手に話をする必要はありません」

「君が理解できなくても、一年B組のためには君が理解してもらわなくては困るんだよ。わかったかな、杉本さん」

「命令される筋合いはありません」

頑なに言葉を返す杉本をあしらっている。全く桧山先生は動じなかった。最初から覚悟を決めて「杉本幼児扱い作戦」を実行しているのだろうか。健吾が桧山先生を認めている理由は、健吾とその他まともな男子連中の持つ「正義」を正面から評価してくれることだろう。正々堂々と対決すること。汚い手を使わないこと。クラスのいじめを打破すること。そのために杉本梨南と戦っていること。桧山先生はそれを「正義」として受け取ってくれている。ミーハー受けする一面を持ちながら、女子の陰湿なやり口を許しがたいとばかりにぶち壊している。決して杉本のやってきたことを許さない。反省するまで徹底して拷問しようという覚悟を決めている。いろいろ悪口を言われているのかもしれないが、健吾としてはその姿勢が潔く思えた。

言い合いがエスカレートする前に、再び扉を叩く音が聞こえた。

「先生、誰か来てるぜ」

ちょうどいいところで合いの手だ。健吾は杉本の顔を見ないようにして扉が開くのを待った。

「よし、入りたまえ」

——見たくねえ奴だぜ。なんであの男が来るんだよ。

片腕に焦げ茶のコートを抱えるようにして、恐る恐る部屋の中を見渡し、桧山先生、健吾、最後に杉本の顔を見つめて、

「桧山先生、この前お話で伺ったものをいただきに参りました」

気持ち悪いくらい敬語を使いやがった。立村上総の登場だ。次期評議委員長で、杉本梨南の全

面的味方。もっとも信頼されている相手、ときたらこいつしかいないとどうして気付かなかったのだろう。自分のあんぽんたんぶりに腹がたった。もちろん視線を投げただけであとは無視した。

「ああ、ちょうどいいところに来てくれたね、立村くん。悪いんだけどな、ちょうど君の後輩ふたりの意見を聞いてもらう時間があるかな。俺の卒論はここにあるよ。時間あるだろ？ 君は部活に入っていなかったはずだよな」

畳み掛けられ、困ったように立村は首をかしげていた。ガラスのテーブルに載っていた出席簿みたいなものは、どうやら立村に渡すべきものだったらしい。次に杉本の顔をまじまじと見つめた後、扉側のソファに腰を下ろした。健吾と同じソファだが、端と端。埋まったという感じだった。膝にコートを畳んだまま抱えていた。

「僕がいていいんですか。真面目な話し合いをされているんじゃ」

「杉本、立村くんがいた方がいいだろ？」

答えず黙って桧山先生をにらんでいる杉本の顔。少しだけ陰しくなったようだった。健吾としては素直に本音を言うに限る。

「俺はやだね」

「新井林、日本語がわかる人がある程度いないとまずいだろ」

落ち着いた風に立村は杉本とささやきあっている。いかにも女のご機嫌を取る太鼓持ちといった風情だ。気持ち悪い男だ。そんなに杉本のことを気に入っていたらなんで清坂先輩と付き合っているんだか。こういう優柔不断さがうざったい。だからこいつのことが大嫌いなのだ。

健吾の言い分についてはいまさら繰り返す気もなかった。あの女だって過去の戦いで使った言葉には免疫もあるだろう。

桧山先生は過去の悪行三昧についてとことん追及せよと言うけれど、なんの意味があるというのだろう。根本的に言葉が杉本には通じないのだ。日本語の通じない外国人と同じだ。どんなに「佐賀はるみをいじめるのをやめろ。無視するのを止めろ」と訴えたところで杉本はどこ吹く風といった顔で無視したのだから。

今、杉本がはるみに無視以上のことをしないのは、健吾がにらみを聞かせているからに他ならない。

——あまり俺も汚いやり方をしたくはねえよ。ただな、俺は佐賀を守りたいだけだ。

ずたずたになるであろう杉本がかわいそうだとは思わない。惚れた弱みを突いて八つ裂きにしてやろうとすると、きっと自分が汚れるだろう。はるみを守るため、正義を捨てる。でもその一方ではるみに「健吾はやり方が汚いのね」と軽蔑されるリスクも負っている。

健吾は迷っていた。

手元のアルバムを開くことをためらっていた。

杉本以外の女子には将来も絶対しないだろう。打ち明けられた思いは、きちんと誠意を持って返したい。男として、人間として。でも杉本だけは別だった。女ではない。「想い」でもって健

吾の大切な相手をずたずたにした奴だ。ひとりは六年間おびえた顔を写真に残しつつけた。ひとりは教師として学校を追い出され そうになり、結局傷のいえぬまま退職した。

六年間どれだけ、この女の放射するエネルギーによってはるみと菊乃先生、そして健吾が苦しめられてきたかを思い知らせる番がきている。はるみを健吾から取り上げ、いやというほどどろどろの感情を健吾に湧き起こさせ、存在を忘れられないくらい押し付けてきたあの女を。

健吾は立ち上がり、杉本を見下ろした。

全く表情の変わらないふたり。特に立村は状況を把握していないのか、きょとんと敵意なしの顔で見上げていた。健吾の怒りを冷静に受け止めるとは、いい度胸である。いつまで続くのか。

「これを見ろ」

二冊、アルバムブックをテーブルに投げ出した。近づくと感染しそうだった。

テーブルから片手で立村の前に滑らせたが。立村がそのまま杉本に手渡した。杉本がぱらぱらとめくりすぐに閉じた。

「新井林が撮った写真を見るのに何の意味があるのですか」

「よく見比べてみる。一冊目は小学校時代、二冊目は中学時代。中学のものはみな、俺が撮ったものだ」

「変態、悪趣味だわ」

「ああ、惚れた女の写真を撮るのが変態のすることならそう言えばいいさ。だがな、小学校の時と中学の時とどのくらい差があるかを見てみる。表情ひとつひとつをよっく眺めてみるよ」

杉本が言い返そうとしたのを無視して、桧山先生が入った。

「悪いが、先に俺が見ていいか。愛のカメラマン新井林の腕をとくと拝見したい」

「別に、いいっすよ」

杉本が見るのもうんざりといった風に立村へ返した。そこから斜めに、できるだけ健吾の方を見ないようにして桧山先生へ手渡す立村。数度黒い出席簿もどきに手を伸ばしていたが、度胸がないのだろう。そのまま引っ込めた。こういう気の利き過ぎるところがうっとおしい。だから本条先輩を相手に「ホモ説」をささやかれるのだ。

ゆっくりとページをめくり、一枚に目を留めては健吾の顔を見上げる。何度も規則正しく顔を上げては見、見ては上げる。うさんくさい感じがして健吾は目をそらした。決してまずいところでなんて撮っていなかった。

修道院の前、家の前、公園、美術館前。ポーズは取らせていない。素顔で十分である。

「佐賀もこういう顔、するんだなあ」

「幼稚園の頃、ずっとそうだった」

吐き捨てるようにつぶやいた。人になんか見せたくない。独り占めしたいものばかりだ。

「愛が詰まっている第一冊目を置いて、さて二冊目か。うーん、雰囲気のがらっと変わるな」

当たり前だ。健吾は答えなかった。桧山先生には健吾の思惑が見事に通じたい。満足だ。正常な男の機能があれば、気付くものばかりだろう。気がかりなのか杉本に小さな声で話し掛けているだれかさんとは大違いだった。

「どう思う、先生」

「暗いなあ。雰囲気がかわばっているというか」

一緒に映っている写真はすべて、はるみのかわばった頬と目の寄れた感じが目立っている。とにかく一緒にくっついていたい、いやくっつかないと何されるかわからない。ほとんどしゃちほこばって、笑み一つこぼしていなかった。石像の仏様に似ている。

「先生も、そう思うか」

聞こえるか聞こえないか程度にささやいてみると、

「この差はいったいなんだってことだな、新井林」

「そういうことだ。じゃあ続けるぜ」

健吾は立ち上がりもう一度二冊のアルバムを広げた。曖昧な顔のふたりによく見えるよう突きつけた。

「この写真の違いはどこだ、答えられるかよ」

「違う写真に決まってるじゃないの」

全く動じない。杉本の口調は棒読みで上下がない。側ではらはらしながら見つめている立村。杉本の手を覗き込み、もう一枚にふれてみてはすぐに話す。一応見比べてはいるらしい。男だったらきちんと手にとってじっくり見ろと言いたかった。

「両方とも佐賀の写真だ」

「下品ね、男の本能丸出しで品がないわ」

「ああ、俺はもともと下品だ。どこかの誰かとは違って、上品ぶってにこりもしない写真ばかり残したりはしないんだ。ちゃんと見るべきものを見て、力の抜けた写真だけ、この中には入ってるんだ。良く見ろ」

はるみのおびえた顔を健吾は上から指差した。

「たぶんそばにはお前がいるんだろうな。杉本、いつも言ってたな。佐賀に向かって『写真を撮る時笑うと下品な人間になってしまうから、きちんと口を閉じて、正面を見なさい』ってな。菊乃先生あとで大笑いしてたぜ。写真は笑顔で撮ったものが最高なのに、お前みたいなのは非常に損してるってな」

「結婚するまえに子どもを作った人に言われたくないわ」

かなりぎくりときた。女のくせにここまで言うとは杉本梨南、下品もいいところだ。

同じように野郎ふたりも息を呑んでいた。特に立村、あまりなれていないんだろう。清坂先輩、させてくれないだろう。当たり前だ。ここで突きつけるのが健吾の答えだった。

「じゃあ聞くが杉本、お前これだけ人に好きになってもらったことあるのかよ」

杉本以外の女子には決して使わないだろう手。

「佐賀や菊乃先生のように、自分が好きな相手に好きだって言われたこと、本当にあるのかよ。親以外に、惚れられたこと、あるのかよ」

この女を憎むからこそ使う切り札。健吾は立ち上がりぐっと杉本を見下ろした。ついでに不安定な顔で全員の顔を覗き込む立村にも。

「ばかじゃないの。よく恥ずかしくもなく言えるものね。下品な人間と話すと口が汚れるわ」

「かわいそうに、誰にも好きになってもらわないで、お前は生きていけるってわけか。佐賀のように笑顔でいられるってわけか。言っとくがな、他の女子はお前のことを好きでもなんでもないんだぞ。ただ変わった動物を見てよろこんでいるだけだって、菊乃先生も言ってたぞ」

桧山先生に習って柔らかく、幼児相手の言葉で責めた。全く落ち着きを失わない杉本は、眉間に力をこめて言い返してきた。上等だ。

「恥を知らない人間と話す必要はないわ。先生、こんなくだらないことで呼び出したわけですか」

「新井林、続けろ」

やめろといわれても続けるに決まっている。健吾は鼻の下をこすり、もう一度凝視した。立村だけが首をきよときよとさせている。杉本を覗き込み、健吾を見上げ、繰り返した。こいつの言葉が怖いとは全く思わないけれども、波が上げ潮になりそうな予感がした。

「いいか、佐賀はな小学校時代、いつもこんな顔をしてたんだ。俺は何かがおかしいと思ってた。まあ何もしなかった俺が悪いとはわかってるさ。お前が佐賀を守ってやっていたふりをして、こき使っていたことを見逃していたさ。傍観していた俺も犯罪者だ。卒業してお前から離れるようになって初めて、佐賀は俺を見て笑うようになったんだ。お前と話をしなくなったとたんのだ」

「あんたがはるみにのめりこんでいるのはわかったわ。でもそれと私と関係ないわ」

杉本は動かない。変わらない。ぶち壊すことにためらいはなかった。こなごなにしたい。

「俺はただ、佐賀の笑顔を守りたい、それだけだ。佐賀がおびえる何者かをおっぱらいたい、それだけだ。だから他の女子連中については許してやった。お前が佐賀を傷つけさえしなければ、俺は何一つ手出しはしねえ。勝手に来年評議委員長になっていただいてけっこうだ。だがな、一年B組現在の状況はなんだ？ 佐賀はクラスの馬鹿女子たちからシカトされ、馬鹿女子たちはお前の言いなりだ。あそこは魔女の巣窟だ」

「私は何もしていない。新井林が勝手に捏造してるだけよ」

「ああ、そうさ。俺が佐賀にべたべたしすぎるからだって言うな。だがな、もし俺が他の奴みたく、遠くから見ているだけだったらお前が何しでかすかは想像がつく。また佐賀を自分の手下のようにこき使って、写真を撮る時は口をゆがめて人をにらみつけるような顔をさせる。下品だ、馬鹿だ、馬鹿男子と付き合うなんて最低だ、とさんざんわめき散らされる。冗談じゃねえ」

「はるみが私を裏切ったから無視しているだけなのに、何か文句があるの」

とうとうこの女の本音を引っ張り出した。結局、はるみに裏切られたと勘違いしているだけなのだろう。本当ははるみが健吾によって救い出されただけなのに。ここで健吾は人差し指を杉本の顔正面に突き出した。指先のレーザー光線ですべて消えてなくなるように。

「裏切った、かよ。たまったもんじゃねえな。俺はただ、佐賀と付き合いただけだ。しゃべりただけだ。それだけであればあとは十分だ。お前には関係ないだろ。クラスの女子たちに無視させることはないだろ」

「無視させてなんていないわ。みな私に賛成してくれているだけよ。あれだけかばってあげたのに最後の最後に私を裏切って、傷つけて、失礼なことをしたはるみに対しては当然じゃないの」
「かばってあげた、かよ。かばうなんて言葉は大嘘だ。佐賀はずっとおびえていたってことがこの写真で判明しただろ。お前は親を使って菊乃先生をつぶそうとしたり、俺の友だちをふたり、街から追い出したりやりたい放題してたよな。ああ、死んだ猫を三匹お前の家に投げ込んだのは確かに悪かったさ。けどな猫と人間の家とどちらが大切なんだよ。仕事取り上げて追い出すってほど許しがたいことか」

「当然の報いよ。馬鹿な人間に対する正義の鉄拳よ。気付かないでいる人たちがばかなのよ。鵜呑みにしている新井林、あんたが一番馬鹿なのよ」

「そういう馬鹿な相手をどうしてお前は追い掛け回してたんだ？」。

さっと引き抜いた切り札。見事に決まった。言葉が止まったのが何よりもの証拠。

そして、隣の立村がぽかんと口を開けて杉本を向いたことも。

——まさかこいつも見抜いていたのかよ。

自分だけのうぬぼれではない。誰もが認める事実だと、健吾が納得した瞬間だった。

たとえ杉本の顔色が変わらなかったとしても、健吾の感情センサーがすべてを見抜いている。傷つかないはずのない言葉を、習うともなしに知っていた。鬼が取り付き、悪魔の言葉を唱えさせていく。自分でない、怒りの言葉が勝手に口から飛び出していく。指を力いっぱい鼻の頭に向かって差しつづけた。

「周りは言うな、俺にお前がほれていたから、くっついている佐賀を引き離そうとしたとかなんとか。悪いが俺は、女の振り方は十分マスターしてるぜ。佐賀以外の女子からつきあいかけられたらきちんと、俺なりの礼儀でもってごめんっていうな。ああ、それが普通だ。つきあえねえけど人間嫌いじゃねえってことだ。だがな杉本、お前のことだけは顔を見た時からへどが出るほど嫌いだった。いいか、お前みたいな女に好かれるとしたら、俺は気が狂うほど気持ち悪かったんだ！ うわさが立つだけでも耐えられねえんだ。まあそういうことはありえないと思うがな。それだけでも俺は神経がそそり立っていたんだ！」

健吾が知っている直感の事実。

それが、という風に、

「ちょっと顔が人間らしい造型しているからといって何を勘違いしているのかわからない。立村先輩よりもましなことがそんなに自慢したいことなのかしら」

——やはり、そうか。

はるみから聞いていた。七年間、気が付いていたけれど思い出すのもいやだった。

——顔、かよ。こいつ顔以外で男を判断できない奴なんだってな。

好きになってもらえればそりゃあうれしい。今、杉本にも話した通り、健吾は小学校の頃から何度も告白をかまされてきた。はるみのことしか考えられなかったからきちんと断ってきた。でも嫌いな女子だとは思わなかった。

でも、杉本だけは別だった。

あの女に好意をもたれることだけはいやだった。

好きの裏返しの意地悪なんて、そんないやらしい言葉を聞くだけで吐き気がした。

——菊乃先生、わかるだろ。あの女に俺は殺されるとこだったんだ。だから今復讐してやるんだ。

おなかの大きな菊乃先生、はるみの笑顔、守りたかった。

「ああ、お前の好みの顔らしいな。だが俺はお前がこの世で一番憎い。殺してやりたいくらい憎い。抹殺してやりたいくらい憎い。佐賀をいじめる女が一番憎い」

お化けが背中におぶさっているようだった。健吾の一番深いところから出ている真実の声。人の片想いを利用するなんて汚いことを絶対にしたくない。他の子にはできない。でも、この女の感情を抹殺するためには手段を選びたくない。

はるみのためになら、健吾は鬼になる。

「一生お前を好きになるようなことは、絶対にないだろう。世の中の男でまともな男は誰一人として」

動かない瞳、答えない口。能面だ。毒を垂らしていく鬼だった。

「新井林、もう止めてくれ！」

いきなり立ち上がったのは立村だった。唇が何度か震えていたのを見ていた。

後ろを振り向くと桧山先生が夢から覚めたように慌てて背筋を伸ばしている。ずっと前かがみになって健吾と杉本の対決を見据えていたに違いない。健吾からも鬼が逃げた。

「なんだよ、あんたには関係ねえだろ」

「頼む、もうやめてくれ」

形を崩さず、立村は真っ正面からじっと健吾を見つめた。見据えたというには敵意が感じられない。ひるんだ。次の言葉が本当に立村から出たものとは思えなかった。

「もう、勝負はついているだろう」

健吾に隙が見えたのだろう。立村は一步步み寄った。

「俺も今まで杉本の話聞いてただけだし、お前らがどういう繋がりでいろいろがみあってきたのか一方的にしか知らない。実際見ていないから判断もできない。だが、新井林が恨みを持つ理由は理解できるつもりだ」

「口先だけでよく言うぜ」

「杉本が佐賀さんに対してしたことは、あきらかに悪いと思う。たぶん杉本は純粋に善意だったと俺は見ている。でもそう思えない人だっているのもわかっている。新井林、そういうことだろう？」

穏やかな口調は変わらなかった。評議委員会で本条先輩を相手にしているのと同じだった。

椅子に座ったまま初めて杉本の表情が揺らいだ風に見えた。かすかに横を向き、立村の背中を冷たく見つめるだけだった。健吾や桧山先生がいくら言葉をぶつけても一切封じ込めていたのに、なぜか立村の言葉には反応する。健吾の呪文から解き放たれたようだった。

鬼を呼び戻したくて健吾はどもりながら続けた。だらしない。情けない。

「善意であろうがなかろうが、佐賀が六年間ひでえ目にあってきたのだけは確かだ。あんた、もしこの女のしてきたことが善意で本当に佐賀を守るためだったとして、許すことができるかよ。なんとかのためだったら許されて当然だと思っているんだろうな。悪いがそんな甘ったれた料簡は通用しねえよ。傷ついたのは佐賀なんだ。この女がどんなに土下座したって佐賀の六年間は戻ってこねえんだ」

「だから杉本は制裁を受けてるだろう」

語尾が強まった。片肩を落とし、背の軸を斜めにし、立村は健吾の顔を覗き込んだ。猫のまなざし。捨てられた子猫の顔。怖気だった。足を踏ん張った。

「小学校時代のことは新井林、君の考えが正しいと思う。だけど、それと今杉本に言ったこととは別だろう。新井林が杉本を好きになれないのはわかった。でも、わかりきっていることをなんで今さらひっぱり出す必要があるんだ」

鬼が逃げる。立村の言葉と一緒に「正義」を唱える声に戻ってくる。耳をふさいでしゃがみこみたい。でも男の意地、できない。あえいだ。

「なあ桧山先生、なんでこいつなんかをつれてきたんだよ。学年違う相手をなんで」

いいかげん立村の言い分に反応するのもおっくうになってきた。言葉が見つからなくなりそうだった。健吾はもう一歩足を引きながら後ろの桧山先生に助け舟を求めた。軟弱でもやはり立村は二年だ。一年の差は健吾が想像していたよりも大きい。怒鳴ったり殴ったりするなら健吾ものせてしまうのだろうが、言葉で必死に食い下がってくる相手を簡単に払いのけることはできなかった。

桧山先生は健吾にも、杉本にも使わない大人の言葉で答えた。

両手で手すりを掴んで、「うっ」と息を止めた声。スタンバイしたのだろう。

「立村くん、ありがとう。新井林も座れ。やはり君は次期評議委員長だな。きちんと一方の意見だけを取り入れず、公正な立場で判断してくれているな」

「なんでこいつなんかにありがとうだなんて言うんだよ」

「いやな、今日は新井林とふたりで杉本に、一年B組の現状について理解してもらうつもりだったんだがな。たぶん杉本には理解できない言葉の羅列ではないかと思ってなあ。一番杉本が信頼している立村くんと一緒にいたら、きっと杉本も少しは理解しようと努力してくれるんでないかと、期待していたわけだ。本当の目的は立村くんが俺の卒論を読んでもらいたかった、それだけだ」

はは、と話言葉のまま笑った。「理解」言葉のリフレインが健吾の頭にこびりついて離れなかった。どうしてかわからないけど咽に骨がひっかかったまま取れない違和感がある。

「杉本、新井林の言い分は言い過ぎだったかもしれない。小学校時代のことについては今更何も言わない。だが新井林の言うとおりに佐賀が苦しんできたことも事実だ。佐賀が杉本によって『いじめ』られていることも立村くんを始め全ての人認めているのも確かだ。いいかげんここで、自分の非を認めることはできないか？ 自分が何をしてきたか、これだけ話しても理解できないか？」

杉本は軽蔑しきった風に、一切表情を変えなかった。まず立村の顔をまじまじと覗き込み、強くにらみつけた。健吾のことは一切眼中にない。鬼がまだ顔に張り付いているのかもしれない。そして最後に桧山先生と一対一のお見合いをした。

「ばかばかしい。理解するものにも、新井林の一方的な話を聞かされているだけです。こんなくだらないことに付き合わされる暇があったら、家で勉強します」

もういちど、立ち上がったままの立村に向い、

「立村先輩、新井林と私との勝負はまだついてません。勘違いしたと言わないでください」

言い捨てると同時にかばんを抱えた。コートを腕にかけ、ぜんまい人形のお辞儀をした後懇懇に扉を閉めて出て行った。健吾と杉本梨南との対決は五分五分。立村によって水入りとなっしまい現在勝負は預かり。ただし尻尾を丸めて逃げ出したのが杉本梨南の方であるとは、健吾と桧山先生共通の見解ではないだろうか。

立村はしばらくしまった扉の方を向いていた。ぽかんと口を開けたままだったが、すぐに桧山先生の方へ向き直った。座ったままの桧山先生が卒論を手渡そうとするが、立村は首を振った。かなり慌てている。動揺している。

「すみません。明日、先生の卒論直接職員室に取りに行きます。今日は邪魔してすみませんでした」

同じく頭を下げて飛び出していった。女狂いの立村のことだ、杉本を追いかけていったのだろう。また喫茶店に連れ込んで機嫌をとろうとするのだろうか。

一切言葉を発しなかった桧山先生が、戸の閉まる音と同時に笑い出した。たぶんその声は杉本の耳にも聞こえていたことだろう。

「やっぱりなあ、『理解』できなかったみたいだなあ。なあ新井林」

「俺ももうこういうことしたくねえよ」

「まだ杉本が人間として話を理解できるかどうか試しただけだ。悪かったな新井林。しっかしつくづく思うよ」

健吾の肩を叩き、耳もとにささやいた。

「普通の会話が通じない人間と話すのは大変だな。よく新井林もがんばったもんだ。まあ、ジュースでも飲んでけや。俺も少しまともな日本語でふつうの会話をしたいぞ。つきあえ」

健吾はほとんど聞いていなかった。立村が発した縫るような瞳だけが心のどこかにひっかかっていた。

——なんであいつ、『勝負はついているだろう』なんて言ったんだ？

まだ先が長いと分かっているのは健吾の方なのに。

その6 生まれ持った理由

しばらくは静観していた。いくら松山先生のお許しがあったとはいえ、杉本梨南に対してぶつけた言葉には罪悪感がなきにしもあらずだった。「正々堂々」とした行動ではないと思えてならなかった。

——あの女以外には、俺だって絶対にしなかった。

——けど、人間としてやったらまずかったんじゃないか。

杉本本人は全く感じることもなかったようである。健吾の言葉にどこ吹く風といったように。隣りでスタンバイしていた立村だけやたらと慌てていたのが印象的だった。結局杉本を追いかけてどうなったのだろう。

唯一変わったことといえば、次の日以降杉本と立村の間がぎこちなくなっただけか。杉本が一方的に無視しているといったほうが近い。立村がおどおどとした風に「あのさ、杉本、いいか」と話し掛けるのを、短い数語で「結構です」と遮断する。「立村先輩、立村先輩」とひつついていた頃をが長いだけに関係悪化は目立った。

——けど、「もう勝負はついてるだろう」って、なんだよな。

健吾に対しても、下から出た態度を立村は崩さない。やはり顔色うかがっているという感じでむかつく。

本条委員長もおかしいと思っているのか、立村の目を盗むようにして質問を突きつけてきた。

「健ちゃん、どうした。なんか一年、面白いことになってるだろう」

「なってねえっすよ」

詳しい事情を説明するのもなんである。肩を軽く組んで、頭をぐりぐりやられた。

「やめてくださいって。別になにもねえっすよ」

本条先輩が青大附属を中学卒業と共に退校し、公立を受験すると聞いていた。先生たちの配慮ですべりどめに青大附属への切符は残してくれているようだが、学年トップの成績を保っているこの人のことだ。問題なく合格するに違いない。

「いやな。俺の弟分もかなり落ち込んでるみたいだしさあ。杉本のことでまた、健ちゃん大変だったんじゃないかなあと、俺は思ったわけだ」

弟分。やっぱり『本条立村ホモ説』健在なり。

「本条先輩、今更そんなこと言ったってしょうがねえよ。あの女にかまってる暇があったら別のことしてえよ」

「別のことといえば、『週刊青瀧大学附属スポーツ』、あれめっちゃくちゃ人気だなあ」

鼻が高い。てっきり「評議の仕事は無視して何事だ！」と怒鳴られるのを覚悟していたが、懐の広い本条先輩。あっさり認められている。毎週月曜日の朝、健吾が情報を体育系部活の連中から集め原稿を書き、昼までにはるみが記事を清書した後、帰りに張り出す。もう三号目に突入した。他クラスからも記者を志願する奴が増えていて、かなり内容も充実してきているような気がする。松山先生からも、

「壁新聞だけではもったいない。印刷して全校に配るようなものにしような」

と、正々堂々応援の言葉を賜った。もっぱら公認って奴だ。

「三年の間でも、運動部の連中は肩身狭かったみたいだけどもなあ。あれで少しは安心して自分の部活の証ができるってよろこんでたぞ。お前、バスケ部で疲れきってるってのに、パワフルだよなあ。さすがだぜ。俺の見込んだ奴だ」

——だったらなんで評議委員長をあの馬鹿男に指名するんだよ。

毒ついてもしょうがないので、健吾は頷き返した。感謝の意だ。

「本条先輩はなんで運動部入ろうとしなかったんですか。もったいねえなあ」

「またその話かよ、上下関係の厳しいところでしごかれたくねえってだけだったぜ。上に立つのはいいけどな、ペえペえで納得いかないことに頭を下げるほど、俺も人間できちゃいねかったからさ。球技大会だけで十分だ」

「しごきなんて、今の二年にはねえよなあって思うけど」

「ああ、あれな」

わかりきった風に本条先輩は振り返って答えた。

「今の二年たちはとにかく後輩を可愛がろうってモットーで活動してるんだと。立村が話してた。ただでさえ運動部は人がいないし、それは不用な体罰とかしごきが原因かもしれない。いいか悪いか別として、とにかく自分らは後輩をあたたく迎えようじゃないかと意見が一致したらしい」

——そういう馴れ合いがチームを弱くしてるってこと気付かねえのか。馬鹿男。

運動万能、球技大会・体育大会のスターたる本条先輩にはぜひ、バスケ部のキャプテンとして君臨してほしかった。叶うことのない願いだったけれども、健吾はつくづくため息をつきたかった。結局鼻息になってしまったが。

「まあ、もし何かあったら早めに知らせろよ」

「わかりやした」

健吾の答えを安心気味に飲み込んで、背を向けた本条先輩。二年生たちに任せているのだから、受験勉強にも専念できる。一年生をからかうことにも時間を割く。本条先輩だったら純粋に尊敬できるのでどうして、あの馬鹿男を来年から見上げなくてはならないのだろう。

その馬鹿男が何をしているか何うと、無言のまま教室を出て行ったのが見えた。少し落ち込み気味に見えるのは、杉本を間に挟んだ修羅場を知っているからか。懸命にかばうだけかばって、結局何も出来ずに嫌われている情けない奴だ。杉本も気が付かぬうちにいなくなっている。眼中にない。フィルターで杉本の存在を遮断するよう最近は心がけている。人間として認識しないように。

——ここまで殺してやりたいくらい憎むってねえよなあ。

まあ、はるみがないからいいかってことだった。

玄関で清坂先輩ともうひとりの二年女子に待ち構えられていた時はさすがに驚いた。だいぶ肩につくくらいの長さで、いつもこめかみにきらきら光るピン止めをつけている。まさか立村がそういうのをプレゼントするほど甲斐性持ちとは思えない。清坂先輩の趣味だろう。側でポケット

に手を突っ込んでいるちびっこい女子は、耳もとでそいだ感じのショートカットだった。見た目、女子バレー部にいそうなタイプだと思った。好みのタイプではない。

「新井林くん、ちょっといい？」

「なんっすか。おはようございます」

清坂先輩の表情にはからからした笑顔が張り付いていた。何か隠しているのだけれども、それを悟られてはまずいというような。もともと健吾は清坂先輩が嫌いではない。立村を捨てて健吾に告白、なんてパターンを一瞬想像してしまった。

「あのね、ちょっと聞いたかったんだけど、昨日、一年B組の帰りの会で、何かあったか教えてほしいなって思ったの」

可愛い。素直にそう思う。

はるみが健吾の最頂点に位置してなければアクションを起こしていただろう。立村から奪い取っていた可能性ありだ。

「ちょっとあんた聞いているの？」

反対のきいきいした声で突っ込んでくる女子。よく見かける。清坂先輩とは仲のいい友だちらしい。立村ともよく馬鹿ネタかましあっているのを聞いたことがある。失礼な言い草だった。

「帰りの会は帰りの会だったけど」

「その時、また杉本さんのことで一悶着あったんでしょ？」

——ははあ、そのことか。

ようやく話が繋がった。

「清坂先輩知ってるだろ。俺があの女徹底して嫌ってるってこと」

「人間それぞれ好みがあるもん、いいよそんなこと。けど、桧山先生が何か変なこと言ったんだって？ 杉本さんのことじゃなくて、桧山先生が何言ったかだけ知りたいの」

玄関ロビーの柱にもたれ、健吾は簡単に説明することにした。どうせあの女がつっかかっているだけのことだ。たいしたことじゃない。気持ちよく桧山先生があしらってくれたのだからどうでもいい。

「たいしたことじゃねえ。あの女が何を考えたか、いきなり立ち上がって本を叩きつけたんだ」

「本？」

題名まではわからない。ただ杉本が抑揚のない口調で人差し指を差しながら、

「私の母にこの本を渡して読めと言ったのは何か理由でもあるのですか」

と攻め立てた。健吾の命令で何も手を出さない代わりに、せせら笑いが聞こえた。

「君も読んだかな。自分を自覚するためにはきちんと原因を把握するべきなんだよ。お母さんも納得してくれたからな」

さすが桧山先生。負けない勝負の持ち主だ。容赦しない。偉い。

「しかし、全く根拠の無いことをこのような本でもってあらわにするのはおかしいのではないのでしょうか。これを読めば私が頭のおかしい人間であると思うのも無理ないでしょう」

頭のおかしいどうのこうの、というところでざわめきたったのは覚えている。大共感していた

のは男子と、一部の女子。後ろの方で頷いている女子たちがいたが、怖い不良女の花森ににらまれたので黙っていた。

「君には読解力がないのかな。この本にはね、自分の言動を自覚できない子どもたちの原因と対策が述べられているんだよ。杉本さん。どうすれば自分のしていることを客観的に見ることができるかどうか、それを学ぶためにお母さんと話し合っしてほしいと思ったからなんだ。いい本だよ」

「そういう根拠がどこにありますか。さらに、母が言ってましたが」

次の言葉はたぶん杉本の大げさな表現だろう。「頭おかしいってほんとのことだろ」とささやく奴の声もひとりふたりではない。女子たちも顔を見合わせ唇をゆがませている。

「私を精神病院に連れて行けと言ったそうではないですか」

爆笑の渦になったのは、みなが納得しているからだろう。よく言ったとつぶやく奴もいた。でも桧山先生だって一応は教師だ。そんな失礼極まりないことを言わないだろう。当然、桧山先生は冷静に対処していた。

「精神病院という言い方はふさわしくない。厳密には精神科・神経科と言う。きちんと勉強してから文句をつけに来なさい。俺がお母さんに言ったことは、この本をふたりでじっくりと読んで、どういう風にすればお互いクラスに迷惑をかけないで人間関係を作ることができるかを勉強してほしい、もしわからないようだったら詳しく説明してもらえる機関があるから相談してみたほうがいい、自分では理解できないことだからご両親と相談するべきだってことくらいだ。君にはその辺も理解できないみたいだね。残念だよ」

「そういうことを平気でよく、親に向かっていえるものですね。言い方を変えれば私が狂っているといわんばかりですが」

「精神科や神経科に偏見を持ってはいけない。社会的偏見で精神科を失礼な言い方で罵る人がいるらしいが、それは間違いだ。君の方があきらかに偏見を持っているね。君の大好きなあの先輩も、それなりのところに通院していることを教えてもらわなかったのかな。それで少しずつこの学校でやっていけるように努力していることを知らなかったのかな」

——たぶん立村のことだろうな。

健吾も精神病院という言葉に反応したひとりだった。深いこと考えずに悪口の一つとして使ってきたからだった。でも素直に桧山先生の言葉に頷いた。これからは「おかしいぞ、精神病院行け」と悪口言うのはやめよう。そのくらいの反省である。

「よくわかりました。そういうことですね。よくわかりました」

動揺したのか数秒息を止めた後、杉本は皮肉っぽく終わらせた。

「そうかあ、やっぱりね」

清坂先輩はひととおり健吾の話を聞いて納得顔に頷いた。

「個人名は出さなかったのね」

「けど、あの女が大好きな先輩ったら、ひとりしかいねえし」

真向かいで派手にくしゃみをするちびっこ先輩。

「別に精神科とか神経科とかそういう話はどうでもいいけど、なんでそういう言い方、するかねえ。杉本さんを知ってる人はすぐに立村のことだって気付くよね。ね、美里、あんた立村がそういうとこ通ってるって知ってたの？」

「そんなのどうでもいいでしょ」

否定しないところみると、ある程度は事実らしい。

「別にねえ、あいつも隠さなくたっていいのにねえ。あ、でもそっか。桧山先生が知ってるくらいだからうちの菱本先生も余裕で気付いてるってことよね」

「やめなよこずえ」

たしなめるようにして清坂先輩はもういちど、健吾に両手を合わせた。

「ごめんね、ありがと。やはりこういうことって、評議の新井林くんに聞くに限るね。ちゃんと公平な目で見えてくれるんだもん。あ、そうそう。いつも見にいってるよ。『週刊青潟大学附属スポーツ』あれいいよねえ。私も応援してるからね！」

恐るべし。次期評議委員長の彼女にまでお墨付きをいただいてしまった。

「は、はあ、ありがとうございます」

情けないことだが呆けてしまった。二階の階段を上がっていくふたりが

「だから、あいつには前科があるからうちらが動いたほうがいいのよ」

「そんな前科だなんて言わないでよ！ こずえったら！」

大声で話をしているのを聞くとともにしに聞いていた。

関係ないことが関係あると気がつくには、まだまだ寒気を吸い込む必要がある。健吾が練習を終えて体育館を出たとたん、いきなり二年の先輩に腕を掴まれた。

「おい、大変だぞ、新井林」

三年の先輩だ。もちろんしごかれもなにもしない、いい関係の人だ。

「なにっすか」

「今な、職員会議が延々で行われててな、お前の担任が吊るし上げられてるんだ」

「担任って、桧山さんっすか」

「四時からいままでずうっと怒鳴り合いが続いてるんだぜ。まだいるぜ」

担任の吊るし上げは小学校時代にも経験済みだ。健吾はいつも先生を守る側だった。今回もそうなるのだろうか。正々堂々と男子たちの言い分を認めてくれた桧山先生がなぜ、そういうことになっているんだろう？ この先生、嫌いじゃない。

「わかりました。どこでやってるっすか」

「三階の会議室だ」

もう真っ暗闇。非常口の赤いランプだけが目立つ程度。健吾はバスケットシューズのまま階段を駆け上がった。猫目で、黒い中でも足を踏み外さずにすんだ。

会議室の前では、別の一年B組連中がたむろっていた。たぶん職員会議の異様な雰囲気をかぎつけたのだろう。全員、男子だった。図書局、放送局、その他運動部で居残っていた連中だった

。中には他の連中もいないわけではなかったが。

「健吾、来たか」

「何やってるんだよ」

図書館員の肩を引っつかんで状況を説明させた。扉から聞こえてくる声が丸きこえだ。生徒がこれだけ集まってくるのだから相当なものなのだろう。

「桧山先生が他の先生にすげえ怒鳴られてる」

「つるされてるってのはわかってる。原因はなんだよ」

「この前、杉本のことで桧山先生が何か言っただろ。精神病院に行けて」

「当然のことだろ？　それがどうした」

微妙にニュアンスが異なるが、面倒なのでそのままにしておいた。

「菱本先生がいきなりわめき出して、桧山先生も怒鳴り返して、二時間修羅場だぜ」

「なんで菱本先生が？」

ひとりだけの意見では要領を得ないので、もうひとり助っ人を頼んだ。C組の同じく図書館員。健吾が知ったのは以下の事実である。

菱本先生は二年D組の担任である。二年D組とは知る人ぞ知る、次期評議委員長立村上総を擁したクラスでもある。実際このクラスは学校全体でもかなりまとまりのある運営をされていると聞く。個人的に「清坂先輩のおかげだろ」というつつこみはまず飲み込む。

たまたま菱本先生は、一年B組において杉本梨南の激しい抗議とそれに対する桧山先生の返答を耳にしたらしい。どういうルートかはわからない。なんで帰りの会の情報を上の階にいる菱本先生が仕入れたのかは謎中の謎だ。

桧山先生は別に悪いことをしたわけではないと、堂々と開き直ったという。当然だ。

しかし、菱本先生は杉本の悪行三昧をさておいて、別の言葉でつつこんできたという。

「なんだよその別って」

「ほら、あのさ。有名な話だけどな。二Dの立村先輩のこと」

「ああ、あの馬鹿男か」

「あの人、大学の語学授業を受けてもいってお墨付き受けてるだろ。すげえ語学できるからって。でもその裏には別の理由があったんだって。もともと数学の頭がないから、それを補充するために別の授業を受けてもらって中学の単位をそろえようとかなんとか」

「んなことできるのか？」

「だから、頭がふつうとは違うんだってことを、病院で診断書書いてもらって証明してもらってとかなんとか言ってたぜ」

——そういうことか。

桧山先生の言ったことがやっと飲み込めてきた。繋がりも。

「けど、それはトップシークレットだったんだってさ。でも桧山先生がたまたま帰りの会でそれっぽいことをちらっと言ってしまったことが原因で、菱本先生がとさかに血を昇らせたってことだ」

——別に、何も言ってねえよなあ。

確かに杉本を知っている奴だったら「杉本の大好きな先輩」イコール二Dの立村上総につながる事が難しいことではないだろう。第一九九もろくにいけないまま青大附属に入学してしまったあいつの自業自得なのだ。それなりの努力をしない限りこの学校ではついていけなかっただろう。病院、行ったかも知れない。精神科か神経科か、そこに通っていたかもしれない。けどそれがそんなに恥ずかしいことなんだろうか。それとも評議委員長として君臨する以上、頭の働かない事実を隠しておきたいのだろうか？ たぶんそうだろう。そういう男だ、あいつは。頭が悪いことそのものの事実が決して恥ずかしくもなんともないことだから、桧山先生は堂々と口にしたに過ぎない。隠しておかなくてはならないように、菱本先生も気遣っていたのだろうか？ 健吾の知っている菱本先生とは、やたらと熱血で情熱的。スペインでフラメンコのギター弾いている方がいいんじゃないかと思うタイプである。何がどう勘違いしてそういう話になってしまったのだろうか。

校長、教頭、他の教師たちが憔悴しきった状態で肩を落として現われた。後半の会話はほとんど聞き取れず、健吾も他の連中から話を聞くのが精一杯だった。

六時十五分まで待った。

会議室の扉が開いた。

「桧山先生、なにがあったんだよ」

駆け寄った。目が赤い。泣いていたのだろうか。男が涙を流すのはよっぽどの時でないと思えない。一年B組の野郎どもも桧山先生に張り付いていた。菱本先生が唇を結んだまままっすぐ通り過ぎただけを闇の向こうに感じた。

桧山先生ははっとした顔で、健吾たちを見下ろした。

「お前ら、ここにいたのか」

「先生、間違ったこと言ってねえよなあ。何も悪いことしてねえよなあ。正々堂々としてただけだよなあ」

「ずっと聞いてたのか」

「当たり前だろ、先生。あの馬鹿女の親にまた何かねじ込まれたのか？ あの女にまた文句言われたのか？」

桧山先生は答えなかった。図書局の奴の頭を軽く撫でた。健吾の肩を叩いた。作り笑いとすぐわかる、頬のゆがみ。翳っていた。

「早く、帰れよ。風邪引くぞ」

肩を落としたまま桧山先生は階段に吸い込まれていった。追いかけることもできなかった。目が闇になれた健吾も、息がつまりそうだった。

なんでそこまで突っ込まれる必要があるのだろうか？

夜十時。親の眼を盗んで受話器を取った。はるみへ言葉を届けるために。

「健吾、夜遅かったのね」

待っていることがわかる。ささやきだ。どこかをくすぐる。でも今はのめりこめない。慌てて今日の出来事についてしゃべりつづけた。

「どういうこと？」

「だからなあ。なんでだよ。あの女だぜ。自分が狂ってるかもしれないってばにくって、結局はまた菱本先生に告げ口して、親を利用してつぶそうってたくらんでいるんだ。菊乃先生の時とおんなじだ」

一通り話を聞いてくれた後、はるみはささやき声で息のこもった事実を告げた。

「違うわ。健吾。私知ってるの」

「なんだよ」

「梨南ちゃんのお母さんは松山先生に恨みなんて持ってないわ。菊乃先生と違うの。だって」
体の中に霜が立った。

「だって、梨南ちゃんのお母さん、昨日うちに来てお菓子持ってきたの。うちのお母さんと私になって」

「それがなんだよ。つきかえさねなかったのかよ」

「『うちの娘は生まれつき病んでいるのだと初めて気付きました。はるみちゃんにこんなご迷惑をおかけしていたなんて』って土下座して謝ったの。本当に玄関先で」

「土下座だと？」

鼻をつんと突き上げたような、どこぞの金持ちを気取った態度。見るからにあの女の親という感じだったことを覚えている。

「そう。この寒いのに、正座して」

「でお前の母さん、けりいれて追い返したのかよ」

「うんそんなこと、お母さんも私もしない。お母さん言ったの。『うちのはるみはもともと、梨南ちゃんがそういうお子さんだということを知ってお付き合いしてきましたから安心してくださいな。そういうお子さんだとわかっていたから、腹も立ちませんわ』って」

嗚呼、我がいとしのはるみ。

健吾が万歳三唱したくなかったのはこの瞬間だった。

親が土下座して頭を下げるなんてことをするくらいだ。松山先生が何を言ったかは杉本の言葉を辿るしかないが、そうとうきついことだったに違いない。さらにあの本の内容にもよる。杉本は自分が狂っていると決め付けられたと言い放ったが、家族からしたら凶星のものだったんじゃないだろうか。

健吾は自分のごくごく普通だと思っている。普通の人間が感じるものを感じて怒り喜び泣いているだけだと思っている。しかし杉本はその「ふつう」たる概念が全く理解できないらしい。

どの先生も杉本を「おかしい」とは言わなかった。おかしいものはおかしい、狂っているものは狂っている、異常なものは異常、ごくふつうにそう言うことが許されないと思っていたらしい。だから健吾ははるみを守るために鬼にならざるを得なかった。大嫌いなやり方だけど、寄せられた想いをどぎつくつき返すやり方しか選べなかった。

でも、桧山先生はついに一角をつぶすことができたというわけだ。

ごく「普通」の感じ方を「正義」だと。

従わないことは「異常」だと。

杉本梨南の存在は「異常」であることを。

——もしこの世界に杉本が存在していいとするならば、俺たちの「普通」に土下座して初めて許されるってことだよな。桧山先生。

ごくごくあたりまえのことを言い放ち、土下座させるだけのことに、七年もかかるとは。受話器を置いた後、健吾は母から甘酒を要求した。乾杯したかった。

あれから一週間近く経つ。

桧山先生はしばらく学校にこなくなった。

「体調を崩されて休んでいらっしゃる」とのことだった。本当かどうかわからない。また臨時の先生たちが交代で教室をうろつくようになった。ただ担任を外されているわけではないので、三人目の先生登場はないようすだった。ある程度の噂は広まっているけれども杉本が怖くて誰も口にしないようだった。あえて健吾も聞かれる時以外、無言を保った。

「健吾が信じているなら、きっと桧山先生は帰ってくるよな」

男子たちの動揺も収まった。大丈夫。正しいことをした人間が裁かれるわけがない。と。

評議委員の義務として健吾は桧山先生へ電話をかけることにした。クラスの仕切りは健吾の担当で、杉本には一切手を触れさせない。桧山先生へのホットラインは健吾の言葉のみでないと受け付けないだろう。

「先生、大丈夫かよ」

「新井林か、ありがとうな」

自宅からかけるので、思う存分本音を聞かせてほしかった。

「あんとき、お前たちが並んでいるのを見た時は、嬉しかった。たった三ヶ月しか担任じゃなかったのにな。ごめんな」

「まだ担任じゃねえかよ。溝口先生の復活がなされたらともかく、今は桧山先生の一Bじゃねえかよ」

男としての規律、完璧な男の勝負ができる奴。たったひとりだけだ。

「本当になあ。お前たちには本当に世話になったよな。新井林、お前といつか、ふたりで酒が飲みたいな」

「今からでもいいじゃねえか。未成年アルコールやばかったら、甘酒って手もあるぜ」

「ありがとよ。たく、十歳も離れた相手に慰められるなんて先生として失格だ」

——お互い様だぜ。

しけた話ばかりするのもなんなので、健吾はクラスの様子を簡単に説明した後、付け加えた。

「けど、先生のお蔭でいいこともそれなりにあるんだぜ。あの女のことでさ」

「ひどい目にあったよ。やはりお前らが苦しむのがよくわかった」

曖昧だけれども、相当絞られたということは伝わってくる。ご愁傷様だ。

「おとといあたりからな、小学校時代の連中のうちに、あの女の親がさ、食べ物もって土下座して回ってるんだぜ」

「土下座？」

声が変わった。健吾としてはためらうことなくビールを一本電話線通して流してやりたいところである。親たちからも聞かされている。近所で物笑いにされていることも気付かずにいるのかあの女の家族は。

「あの女が『生まれつき』狂っているのは親のせいです。申しわけございませんって。デパートで売ってるすげえうまいクッキー置いて帰ってくらいなんだ。けど安易だろ。謝って許されるんだったら警察いらねえよな。ざまあみろってほとんどのうちは玄関越しに追い返すらしいんだ。でしかたなく食いものだけ置いてく。いなくなったところでそれをもらってくと。食べ物には罪がないから全部平らげると。そういうわけだ」

「おい、新井林、それはちょっと」

「大丈夫だって、先生」

慌てた様子の桧山先生。そりゃあ驚くだろう。健吾もはるみから最初聞かされた時は耳を疑った。てっきりはるみの家だけかと思っていた。しかし、六年の時 同じクラスだった連中の家、かつて猫事件で追い出した家まで回っているというところまで知って、かなり絶句したもんだった。ある家では「ちょっと待っててくださいね」と台所へ戻り、調味料入れから食塩を頭からずぼっとかけて追い出してやったという。おとといいきゃあがれ、である。

もともと無視をかまされている杉本梨南の家だ。馬鹿娘の弱みをさらけ出してしまった以上、日ごとの恨み容赦はしない。償いは、当然してもらわなくてはならない。卒業クラスの親たちはみな、意見を一致させたという。妙に団結力のあるクラスである。

「親でやられたことは親でやり返したっていいじゃねえか。ま、あの女はぜんぜん傷ついた顔もしてねえし、親に土下座させていることにも罪悪感感じてねえみたいだぜ。そんなのは『生まれつき』感じないみたいだから仕方ねえよな。俺は無視するだけだ。けどな、もし桧山先生がまたあの女がらみで学校辞めさせられるなんてことになったら安心しろよ。俺たちが親を使ってたっぷりし返ししてやるからな。先生はちっとも悪いことしてねえよ。普通の奴が普通なんだってことを、ちゃんと言っただけなんだからな。おかしい奴はおかしい奴同士、見えないところで勝手にくすぶってるってことを言っただけなんだからな」

「ありがとうな」

短く答えが聞こえた。くぐもっていた。動かない声。まるで試合に自分のシュートミスで負けて、周りから責めの視線を受けている時と同じものだった。

杉本梨南は一切、感情を動かさなかった。

背を伸ばし、髪の毛を一切乱さず、授業を受けていた。はるみも健吾も杉本の親が土下座している事実を一切口にしていない。しかし、噂はあっという間に広まったらしい。クラスの女子た

ちが杉本のいなくなった後に「ねえねえ知ってる？」と情報交換しているところを見かけた。他クラスでも似たようなものだろう。だからといっってはるみにすぐ話し掛けるような奴はいなかった。まだ曖昧な情報だからへたに杉本を敵に回したらまずいと思っているのだろう。健吾の聞く限り、すべて正しい話なのにだ。素直にこういう情報は信じろよ、そうっっこみたかった。

しかし、杉本も相当厚い面の皮だ。仮にも親が謝って歩いていることを知らないわけではないだろう。健吾だったらとてもだが正気ではいられない。泣くか謝るか、それとも本当に土下座するか、そのどちらかをしてほしいもんだと思う。許す気なんてさらさらないけれども、この教室で女子たちからの支持をすっぱり失ってくればはるみが楽になる。はるみの笑顔が教室でも出てくるようになれば、健吾は満足だ。あとは勝手にいじめられっ子グループとつるんでいじけてもらえればいい。ふつうの感情を持って生きている人々の迷惑にならないように。そう、いわば記念写真に載り損ねた、角に貼り付けられた顔写真のような存在としておさまっていればいいのだ。

——俺は、あの女が眼中に入らなければ、それ以上のことは望まねえよ。

ふと思い出した。

——あの女の親、菊乃先生のところにもざんげにいったのかな。

その7 黙らせる理由

巷ではかなり大げさな情報が流れているくらいがなきにしもあらず。杉本梨南の家庭が崩壊寸前らしいとのことだった。健吾の知る限り、同情する声はほとんど聞こえてこない。誰も犯罪を犯したわけではなく、ただ「当然」の行為をしているにすぎない。近所の井戸端会議でも、せせら笑いと一緒に語られているらしい。

もちろん詳しい状況は健吾の知る限りではない。なんで杉本の母親がクッキーの詰め合わせを持って謝っているのか、理由もまちまちだった。楡山先生が杉本の親に対して「精神病院に行った方がいいのではないか」という発言をしたらしいということ。そして親が素直に納得して... たぶんあの本に書いてあるのがそうだったんだろう.....娘の身代わりに泥を被りにでかけていった。そう考える方が自然だった。

「やはりね、頭のおかしい子だってみんな話してたものねえ。学校の成績がよいからといって、ねえ」

要するに杉本梨南は「学校の成績では凶れないおかしい部分を持って生まれた子ども」だということが証明されただけのことだ。健吾たちが無意識のうちに嗅ぎ取っていたことを、ようやく親たちも楡山先生のおかげで証明され、堂々と罵る資格を得た。それだけのことだ。

嬉々として電話で杉本一家の悪口をしゃべりまくる母を横目に、健吾はあらためて誓った。

——俺は母ちゃんみたいに、相手の弱みを握ったからって言って、もう二度とそれを武器になんてするもんか。俺は正々堂々と勝負してつぶすんだ。

もう二度と、したくない。

はるみに誓って、汚い奴にはなりたくない。

杉本梨南のように大人を利用する奴は、結局大人たちによってしっぺ返しを食う。

——俺はあの女と同じレベルなんかにはなりたくない、それだけだ。

青大附属が健吾たちの小学校学区に近いこともあり、すでに学校にも噂は流れていた。噂というよりも、真実そのものだ。薄まっていない事実だった。

「一年の杉本さんの親は、小学校時代、担任を変えるよう教育委員会に持ちかけたらしいよ」

「でもそれで顰蹙かって村八分なんだって」

「しかもさ、楡山先生に精神病院行けって言われたらしいよ。当然だよな」

噂は眉唾物というのがお約束だがぴたりと言い当てている。

——当然だよな。ざまあみろだ。

心で毒づくものの、健吾としては汚いことをしてしまった気持ちが残っている。

あの女と同類なんじゃないかという気持ちがしないでもない。うざったい。

——まあ、とにかく、楡山先生が戻ってくるまでってところか。

相変わらずクラスの野郎連中には、杉本を無視する以外の報復を行わないよう申し合わせてある。全く顔色を変えずに教室で同じ空気を吸い、休み時間も不良女の花森なつめとふたりで語り合っている様子。少しずつだが一年B組の女子たちも、遠巻きに眺める気配ありだった。健吾

の方にだんだん風が向いてきているのもまた確かなこと。あとははるみにもう少し、居心地のいい場所ができるといいのだが。

桧山先生の代行は、まだ決まっていらないらしい。一週間が経つ。十一月も終りに近づく。

もやつく気持ちを切り替えるため、健吾は毎日体育館でシュート練習に打ち込んだ。なんとしても、「週刊青大附属スポーツ新聞」を軌道に乗せねば。少しでも、委員会中心体制から部活動最優先主義への変革を掲げねば。

給食のコッペパンをかじりながら健吾は体育館に向かった。教室のストーブにあたりながら縮こまっているよりもバスケットボールを追っかけている方が気もせいせいする。すでに二年の連中が固まってじゃれついているけれども、知り合いの先輩が混じっている時は健吾もチームに入れてもらったりする。運がよければ、だが。

十一月の下旬になると、今度は期末テストの準備で忙しくなる。そのくせ二年生評議連中は、冬休みに製作する予定の演劇ビデオ「奇岩城」準備で忙しいらしく、図書室でたむろっていることが多い。仲のよろしいことだ。立村次期委員長の命で、今回は二年生オンリーの作品にするらしい。一年生としては楽だ。肉体労働でこき使われる程度だろう。そのくらいだったら義務として手伝おうとも思うが、恥ずかしい演技をさせられるのだけはごめんだった。一学期の全校集会でもう懲りた。

率いるのが立村次期評議委員長だ。杉本をおだてて何か手伝わせる可能性もある。また付き合わされるのもたまったもんじゃない。

「新井林、ちょっといいか」

呼び止められるのは体育館に入る前が一番多かった。

新井林健吾捕獲にはもっとも適した場所だと思われているのだろう。

声の主が主だったので無視して敷居をまたぐと、声も一緒に追いかけてきた。

「悪い、少しだけつきあってくれないか」

——じゃあねえなあ、馬鹿男が。

肩をすくめながら健吾は振り返った。予想通り、ネクタイとブレザーを隙なくきっちりと身に付けた立村上総が立っていた。片手をズボンのポケットにつっこんでいる。体育館の中ではすでに、二年生連中がバスケットボールと共に燃えていた。

次期評議委員長様はお仲間と混じるつもりがなさそうだった。無視しようとする健吾の後ろを二歩ほど離れてついてきた。バスケのコート真っ正面に向かって、壁にもたれた。奴も真似しやがった。

手が冷たい。軽く息を吐きかけた。

「なんか用かよ」

「うん、少しだけ、時間もらえるか」

「話したいことあるならさっさとしゃべれよ。俺だって忙しいんだ」

こいつについては一切先輩と崇めるつもりなし。当然敬語も使わない。他の二年生には、男女問わず一応は、ですます体を使うけれども、立村に対してはそんな白々しいことをしたくなかった。

腰の低い立村は怒らなかった。かすかに微笑みすら浮かべている。素直な口調で、「あの、この前のことなんだけどさ」

いきなり切り出した。

「あれそれこれどれなんて使うんじゃねえよ。女々しいぜ」

鼻を思いっきりすすった。たんが出そうだ。風邪引いている。

「あの、桧山先生とのことなんだけど」

「なんでてめえなんぞが一年B組の問題に顔出すんだよ。関係ねえだろ」

給食で食ったカレーうどんを吐きそうだ。立村、こいつがいなければ、桧山先生も自宅謹慎みたいなことにはならないですんだのだ。こいつが不必要に杉本をかばおうとしたことが、なによりもの発端だろう。しかも今だに杉本からは露骨に避けられている。哀れな奴だ。

「俺もまずかったと思うんだ。あやまる。で、言い忘れてたんだけどさ」

「あの女にあやまれてか。冗談じゃねえぜ。てめえもそのくらいのことわかるだろ」

「あやまれなんて言わない。新井林、お前の言いたいことは、俺もよくわかるつもりなんだ。だから、その点については杉本が悪いと思うんだ」

扉脇の木目にもたれて、健吾はけっとつぶやいた。

——この男、だから優柔不断だっていうんだ。

隣りあい、健吾に寄り添おうとするのを払いのけたかった。なで肩で髪の毛もどこぞのぼっちゃん風だ。目がどうしてこうもきょときょとしているんだろう。まるで猫だ。

「あのなあ、俺は別にあんたが杉本をかばいたいのを止めやしねえよ。ただな、なんで俺にそうも無理やりかまってくるんだ？」「かばうってわけじゃないんだ。頼む、聞いてくれ」

言葉と同時に、シュートミスでボールが健吾の真上を直撃した。幸い、外れた。だから二年はどへただというのだ。

「立村、入るか？」

声をかけたのは羽飛先輩だ。

さっさと行っちまえ、と健吾としては言いたい。

立村は片手でいやいやをして、拾ったボールを投げ入れている。しつこく健吾に付きまといたらしい。やっぱりこいつ、「ホモ説」誰でもオッケーって奴じゃないだろうか。別の意味でちょっと怖くなった。健吾にはその気がない。顎を下げて見下した。

一応上級生でありながら、自分の鼻くらいのところまでしか背がないのは中学二年の男子として、かなり不利だろう。

「じゃあなんか俺に用あるのかよ」

「例の、そのことなんだ。ちょっと外出ないか」

立村はもう一方の手もブレザーのポケットに突っ込み健吾の前を横切った。軽く肩を上げて、誘うように。態度だけは先輩面している。体育館を出て、外で話したい、そう言いたいのだろう

。右反対側のグラウンドへ続く出入り口へと足を向けた。

中靴のまま、健吾は立村の後ろをついていくしかなかった。

体育館真向かい青銅色の扉はグラウンドに繋がっている。指先で掛け金はずし、立村は振り返った。横顔が異様に白かった。

——気持ち悪い顔だぜ。まったく男か女かわからねえよな。

杉本に似た表情だった。

雪虫が飛び交っていた。今年一番の寒さだった。紫色の目がついた白い綿がまとわりついている。雪虫というけれど単なるアブラムシの一種だと聞いたことがある。健吾は払いのけながら、唇を尖らせた。

「寒いから早くしろよな」

「ああ、わかってる」

コンクリートの踏み台に、立村は目を落とし、健吾に頷いてみせた。よくわからないことをする男だ。

「この前は邪魔して悪かった」

「だからなんであんた謝るんだよ。あんたには関係ねえだろ」

——関係なくないか。

桧山先生をどつぽに落としたのは、こいつのネタがきっかけだったのだから。目の前にふるふると雪虫が落ちてくるのを払いのけながら健吾は見据えた。

話をするのも恐る恐る、健吾を怒らせないようにと様子を伺うまぬけ面。

「桧山先生のこととは別として、新井林、佐賀さんと、杉本との間に何が起こったのかはだいたい調べてわかっている。お前を責める気はない。頼みたいことがあるだけなんだ」

「頼みたい？ やっぱあの女を許せてか」

ゆるく、首を振った。

「違う。お前が杉本を許せないのは当然だ」

フェイントかけられた。びくっと退いている自分がいた。

——この男何考えてるんだ？

健吾はしばらくまじまじと立村の目をにらみつけてみた。目をそらさなかったのが意外だった。立村がゆっくりと呼吸を整えながら言葉を続けた。

「杉本は決して悪意があったわけじゃないと思う。でも受け取る側としてはむかついて当然のことをされたんだから、嫌って当然だと俺は思う。許せだなんてことは、絶対に言わないよ」

片方の耳でボールが跳ねる音を、片方の耳で風の吹き付ける音を聴く。

立村の声が、冷たい空気の中びんと響いた。

「新井林、いったい杉本がどうすればお前たちの迷惑にならないかそれを教えてほしいんだ」「はあ？ 迷惑にならないか、だと？」

言っている意味がわからず聴き返した。読めない。

「杉本をできるだけお前たちの迷惑にならないようにするよう説得してみるつもりなんだ。必ず

しも頷いてくれるとは思わないけれど。けど、お前や佐賀さんや、一年B組の連中をこれ以上傷つけない方法を、なんとか探したいって思ってる。一番公正な目で見られる新井林、お前の意見を聞きたいんだ。許せないのにあえて、杉本をいじめさせないように命令している、お前ならきつとわかってくれると思ったんだ」

唇をぎゅっとかみ締めながら。いつのまにか立村はポケットから両手を出して軽く握り締めていた。

目の前で鼻くそをほじって投げつけてやりたい気持ちだった。健吾は黙って立村の言葉を聞いていた。妙に持ち上げる態度が気味悪い。ずっと評議委員会では健吾を冷たい目で見据えて、あえて無視するような態度をとっていたくせにだ。

先日の杉本VS 松山先生、新井林健吾の対決でもそうだった。

ずっと立村はそれぞれの顔を覗き込んでおろおろしていたくせに、いきなり立ち上がって言った言葉がふざけている。なあにが「もう、勝負はついているだろう」だ。

——だからめえはついてるかついてないかわかんないオカマ野郎っていうんだよ。

健吾の目が腐ってなければ、立村は杉本梨南と清坂先輩のふたりを両天秤したくてならないのが見え見えだ。次期評議委員長としての自分を守るために清坂先輩におべっかを使い、男としての本能を丸出しにして杉本のホルスタイン的な胸を触ろうとする。周りの口さがない噂を封じるため、ありとあらゆる手段を使ってみなのご機嫌を取ろうとする。健吾だけだ。騙されてないのは。「ひたむきで一生懸命で、繊細で」誉め言葉を隠れ蓑にして、小学校時代からなる腐った性格を隠そうとしているわけだ。

本当はいじめられたことを口にも出せず、汚い手で相手を突き落とし、しつこく女子を追い掛け回し、自分のことばかり守ろうとしていざとなったら本当に好きな相手の杉本を守ろうという顔をして、健吾にまわりつこうとしている。

いや、もうひとつ。気になることがある。

健吾は片足を軸にして、立村の方へ斜に向いた。威圧する時に、よく使う格好だ。

「俺の方からも聞きたいんだが、なんで菱本先生があんたの頭のどうたらこうたらで、うちの担任を怒鳴り散らしたんだ？ その日な、清坂先輩が俺にその話を聞きに来ただけど、それってめえの魂胆か？」

立村がうつむいた。答えに窮している。当たり前だ。嘘じゃない証拠だ。

「杉本と松山先生のバトル中、たまたま出てきたぜ。確かにな。杉本の大好きな先輩も精神病院かどっかに通ってるとかなんとか。話を聞いてりゃあ、そりゃあ誰のことかは想像つくだろうな。うちのクラスのアホどもがどこまで気がついたか知らねえが。けどな、松山先生こうも言ってたんだぞ。精神科とか神経科とか、そういうところに通うことで人を馬鹿にすることはいいじゃないってな。悪いがあんたが想像しているほど人を馬鹿にしたネタなんかじゃない。あの女のことは別として、何もあんたがびくびくして秘密ばらされたって焦ることねえじゃねえか」

さらにうつむいたまま動かない。身を守ろうとすると、大抵おとなしい野郎は身体を石にして凍りつくもの。でもそういうのは言葉のハンマーでぶち壊せば一発だということも、健吾は経験

上知っている。

「しつこいようだが、あんたがそういう病院に通っているかどうかなんて関係ねえよ。俺の友だちだってたくさん、頭の悪い奴とか、ちょっとねじが緩んでるとか、そういう奴一杯いる。人間性をそんなことで貶すような、くそな人間じゃねえ。ただ、本当のことをばらされてあせって、彼女を利用して桧山先生をぶつぶすそうとした、その魂胆が許せねえんだ。ほおら、嘘だったら言い返してみろ。けっ、てめえなんぞ、所詮杉本とおんなじ人間なんだな」

言い返されたらどうしよう、と思わないわけでもなかった。はったりだったから。

でも立村は自分の身体を凍らせるようにして黙り続けていた。

——結局、言い返せねえでやんの。最低男。

たぶん、健吾の推理が当たっていれば。

——こいつ、杉本から例の発言について告げ口されたんだな。思いっきりネタをゆがめられた感じで聞かされて切れたんだな。そりゃそうだ。次期評議委員長様が実は、そういう病院に通っているとか噂されたらやだなって思ってるんだろう。本当は桧山先生がそういう差別しちゃんねえぞってこと言ったの知らないでだ。自分の悪いところをばらされるんじゃないかかってあせったんだらうなあ。けど、自分で抗議する度胸もなかったから、清坂先輩を通して菱本先生へ報告させたってわけか。それだったら自分は被害者面してられるもんなあ。さすがだぜ。そういう悪知恵は働くぜ。周りは騙されてるに決まってる。けどな。

健吾はつばを飛ばしてやった。最大の侮蔑。

「よその先生や二年、三年連中は騙せたかもしれねえな。けど、俺は騙されねえからな」

一歩、近づいてやった。

「嘘じゃねえんだろ。本当のことだろ、嘘だったらここではっきり言えるはずなのにな」

ぎりぎりまで接近して覗き込む、前髪に隠れていたまなざしは静まっていた。答えが聞こえた。

。

「ああ、本当のことだ。微妙な違いはあるけれど、桧山先生が言ったことは本当だ」

雪虫が頭の上につけ状の塊になり留まっている。つぶしてやりたかった。アブラムシ。

「じゃあ、なんとかしろよな。桧山先生は今、てめえと杉本の汚いやり方によって、学校追い出されそうになってるんだ。本当のことをたまたま口滑らせただけでだ。あの先生くらいだ。男としてふつうのことしてるのは。それを、あんたが自分の身を守ろうとして、自分にみっともないことをばらされたくないからって言って、自分の担任を使ってつぶそうとするんだもんな。やり方、こういうのを最低っていうんだぜ。俺より一年早く生まれてるくせにな、分かってねえのかよ」

健吾は畳み掛けた。立村の瞳が伏せ目のまま揺れるのをしっかりと見据えた。言い訳あるならなんでも言えればいい。正々堂々、言い訳するのだったら健吾は正面から受け止めてやる。きちんと言い返す自信を持っている。

「そのことについては、俺は言い返すつもりはない」

「ふうん、認めるんだ。本当のことって認めるんだ」

「だけど、それは俺のことだけであって、杉本とは関係ないだろ」

すうっと顔を上げ、健吾を見上げた。

「噂された通り俺は生まれつきの馬鹿だから、他の人たちと違って指使わないと計算できないとか、九九を言うのがやっとなとか、そういうところがあるのもわかっている。それは認める。そういう関係で、専門の施設に通ったことがあるのも本当のことだ。だけど、それは俺自身のことであって、杉本とは関係ないはずだ。俺についていろいろ言われるのはもう慣れているからかまわないけれど、それと杉本を重ねるのだけはやめてくれ。杉本をこれ以上、関係ないことに巻き込むのだけはやめてくれ」

「じゃあ自分でかたを付けろよ。桧山先生の言ったことが本当のことだから、意味不明の自宅謹慎処分を解いてやってくれって、あんたの担任使って頼み込めよ」

「それは、もちろんする。それは俺が悪いから」

そこでまたうつむいた。なんで肝心要のところまで瞳を逸らすのだろう。杉本のことに関してはじっと健吾を見つめるというのに、この差がわからない。

——言いたいことあったら、はっきり言えっていうんだ。ぶっころしてやりたいぜ。

再び目を足下に落とす立村に、だんだん健吾の咽がぶっこわれそうになる。まだ一筋、「こんな奴でも先輩なんだ」と押さえているのに耐えられない自分。片手をぐるんと回し威嚇しなおした。ふっと目を上げた立村に吐きかけてやりたかった。

「過去も同じような汚いやり方で、本品山中学の浜野さんをつぶしてきたそうじゃねえかよ。女を追いかけてまわしたり、清坂先輩と羽飛先輩に取り入ったり、本条先輩にごますったりってな。あんたの噂、青大附中内に鳴り響いてるんだけど嘘と言い切れるのか、てめえは。そんな裏で手を回すようなやり方をするのは、人間として最低じゃねえか」

罵りながら、立村のこぶしが握り締められているのに気付き、一步離れた。

思ったとおり立村は、健吾に視線を向けずに、地面を見つめたまま言葉を発した。

「新井林、俺のやらかしたことについては言い訳しない。けど、これだけは言わせてくれ。なんでお前、杉本の気持ちを知っててあんなこと、言ったんだ？ あれは反則だろ」

——反撃かよ。か弱い奴だぜ。

余裕を持ってかますことくらい、健吾にはお茶の子さいさいだった。

立村はまだ目を上げない。

「杉本は必死なんだ。信じられないかもしれないけど、杉本はお前とふつうに必死に話をしたかっただけなんだと思うんだ。ただ、それがどうしてもうまくいかないというか、言葉が通じなかつただけなんだ。許してやれとは言わない。杉本をこれ以上追い詰めないでくれ。お前や佐賀さんに迷惑をかけないですむどんな方法でも考えるから」

「追い詰めてなんていねえよ。あの女が勝手にちょっかいかけてくるだけだ」

「わかってる。その話はよくわかる。でもあのままだと杉本は自分を追い詰めてしまうかもしれない。自分ではどうしようもないって気付いてないんだ。けど、きっとあとで後悔する。どうして自分でそうできなかったのか気付いて泣くしかないんだ。そういうもんなんだ。だから」

——だったら顔上げて土下座しろよ。

同い年だったら急所蹴り上げて悶絶させているはずだ。殴りたいのをがまんする。

「じゃあ、聞くけどな。あんた、小学校の頃にいじめられてきた奴らに同じこと言われて、許してやってくれて言われたら、許せるのか？」

「許せるって、なにを」

ようやく顔を上げた。口半開きで、ふっと気が付いたように健吾の鼻あたりに視線が留まった。

「あんたが言ってるのはそういうことさ。情け、かけられるのかよ」

「新井林、どういうことだ」

「勝手に自分がいじめられたと思い込んで、犠牲者ずらして、結局努力もしねえでかわいそうがっているなんて最低だな。男としてまずみとめられねえよ。いったいあんたのどこが良くて、本条先輩は評議委員長になんか指名したのか、俺には理解できねえよ」

また目を伏せる。小声でつぶやく。

「そうだな、俺も自分でそう思う」

「ふうん、認めるのかよ。俺はな、杉本の頭が生まれつきおかしかったとしても、それはそれで人の個性だと思う。勝手にしてろってんだ。ただ、まともに生きている俺たちに向かって、よいなことをしたりするのだけはやめろって言ってるだけだ。俺や佐賀のように普通のことをして普通に話しをしている奴に対して、異常なやり方でかみついてくるのだけはやめろってだけだ。それぞれでめえみたいな汚い同類同士でたむろってろってんだ」

健吾はゆっくりとつぶやいた。

「だから杉本も必死なんだって」

「必死ならせめて俺たちとかかわらないようにしてもらえればいいだけのことだ。だから俺はいじめもしない、他の男子たちにも手出しさせないように命令させてるってんだ。普通の世界ではそれが常識だ。当然のことだ。本当だったらとことんリンチされても仕方ないことをあの女はしているが、それでも俺たちが手を出さないのは『紳士』でありたいからだ。文句あるか。あの女がいじめている事実を桧山先生は認めてくれたしな」

「ああ、わかるよ新井林。だから佐賀さんに対することについては、俺も納得する」

「あんた、そこまで認めるならな」

健吾は怒鳴った。口から吐き出される息で、一気に雪虫が死滅しそうだった。

「あの女を黙らせて見ろ」

立村の目に明らかな動揺が走った。首が不安定に揺れた。

「黙らせるって、どういうことだ」

「色仕掛けであろうが、殴ろうがそんなの勝手にしろ。それができたら俺はお前のことを先輩として認めてやるぜ。必死にかばおうとして、相手に振られて、それでいて自分の相手におべっかつかうなんていい根性だよな。へこへこ頭下げている暇があったら、あの女を黙らせろ。どうせそんなことできるわけねえのにな」

しばらく立村は黙っていた。ばしんとボールをドリブルする音が足の裏から響いてきた。本当だったら混ぜてもらいたい。へたなチームでも健吾が入ると一気に動きが激しくなるところをこの男に見せ付けてやりたい。いつも足を引っ張るのが、この立村であり杉本なのだ。健吾のやりたいことをすべて邪魔するのが「異常」な連中なのだ。

「わかった。新井林」

立村は頷いた。静かに横目で健吾を見つめた。

「もし、杉本が一年B組の迷惑にならないようになったら、のことだが」

言葉は震えず、平常のままだった。

「放課後、茶室の陰でお前を一発殴らせろ」

火がついたのかもしれない。肩も震えず、ポケットに手をつっこんだまま。ピアノの鍵盤を叩いていてもおかしくない骨ばった指。健吾はいままでけんかで負けたことがない。大抵のすのは余裕だった。背丈の差、筋肉のふくらみ、圧倒的な体力の蓄積。すべてにおいて立村に負けるところはない。一発くらい殴られたところで、たいしたことはあるまい。

かなりびびっているのではと健吾も覗き込む。

「ふうん、一発でいいのかよ。もしも条件みたしたんだったら」

立村の鼻先にゆっくりと、右の拳骨を、親指出した格好で突き出してみせた。

「腕力の差もあるし、俺がぶっ倒れるまで殴ってよしだ。できればな」

「その言葉、忘れるな」

腕時計を覗き込み、立村は唇の端をかすかに緩ませ戸口を指した。

「もう、五時間目が始まって二十分経っている。さぼるなり教室に戻るなり、勝手にしろ」

——やべえ、もう休み時間終わっちゃったのかよ！

体育館でばしばし音が鳴っていたのは、女子バレーの練習だったらしい。慌てて一年の廊下へ駆け込み健吾はもう一度グラウンドの戸口を振り返った。

立村はいなかった。

健吾の言いたい放題の言葉を、九割立村は否定しなかった。

上級生として許しがたいであろう言葉を、すべて立村は受け入れて、飲み込んでいた。

だから健吾は思う存分罵詈雑言を吐いた。ぶちまけた。罵った。

おびえていたのかもしれないし、事実を突きつけられて追い詰められていたのかもしれない。けれど、もうひとつの可能性に気が付いて、健吾の背中に氷の柱が刺さった。

——あの女を黙らせる自信、あるのかよ。あの野郎。

健吾が七年の間四苦八苦してきたことを、立村はやり遂げる自信あるのだろうか。

あの女によってかき回されてきた一年B組を、健吾とはるみの手に取り戻し、杉本は嫌われ者の女として身体を小さくして。でもいじめは決してしない一年B組。桧山先生も戻ってきて、めでたしめでたしになったとしたら、健吾は立村を次期評議委員長として、いや、男として認めな

くではならなくなる。たとえどんな汚いことをしてきたとしても。

かすかに漂った立村の余裕めいた匂い。カフスに一匹張り付いていた雪虫をつぶし、健吾は頭を思いっきり振った。言いたいことを言い放ち天敵立村上総を貶めたはずなのに、なぜか雪虫がまだ身体に引っ付いているかのようだった。

——ああ、あんたがもしあの女を黙らせることができたなら。俺はあんたに徹底して叩きのめされてやるさ。徹底してあんたのしもべになるさ。あんたを男として認めてやるさ。

つぶやいてみて、少し気が楽になった。健吾のモットーは「正々堂々、潔く」なのだから。

その8 殴らせる理由

——ははあ、あの女がないからだ。

まだ桧山先生のお戻りはない。ただし、健吾が連絡を取り合っているところによると、二学期中には必ず復帰できそうな気配だともいう。一週間しか経っていないのにずいぶん動きが芽生えてきている。

「やたら静かだよな、最近のうちのクラス」

はるみと電話で話をする時、つい本音がぼろっとこぼれてしまう。

学校では徹底して、クールに決めたい。はるみ以外のことでは一切無視の姿勢を取っている。評議委員会も試験期間中は一切休みだ。

「そう。健吾がしてくれたんじゃないの？」

「俺がか？」

あいまいにごまかしておく。はるみが健吾のことを、最近少しずつ頼ってくれていることを感じられるってやっぱり嬉しい。

「だって、クラスに梨南ちゃんがいること、少なくなったから」

——佐賀も気が付いてるのか。

鼻息だけで答えることにした。

「休み時間、いつも二年の女子の先輩が廊下で待ってるでしょ。梨南ちゃんを呼び出してどこかに連れて行くでしょ。私、心配してたのよ。もしかしたら女子にもいじめられてるんじゃないかって」

「お前、あんな女のことで気にすることねえだろ。いなくなったらラッキーだ、無視しろ」

「ううん、健吾、違うの」

誰か側にいるのだろうか。声を潜めてささやき声で。心臓が膨れ上がりそうになる。

「なんか最近、花森さんも一緒にいて、二年生の人たちと遊んでいるみたいなのよ。梨南ちゃんを中心に、図書室でおしゃべりしてるみたい。どうしてかな」

二年の女子か。

健吾はカレンダーを確認した。立村との対決から一週間。はたして立村が何を思って「一発殴らせる」と捨て台詞を残したのか。かなり杉本を手なづけることに自信ありげのようだった。

健吾が「一発殴らせてやってもいい」場合の条件としては、

- 一 杉本梨南をクラスの邪魔にならないように黙らせる。
- 二 桧山先生を復帰させる。

一はそれなりに成功しているようだ。はるみの言う通り、杉本を二年生の女子たち……たぶん清坂先輩たちか……に頼み込んで、連れ出してもらったりして、健吾たちの目に入らないようにしてほしい、ってことだろうか。「いいか、佐賀」「なあに？」 あどけない口調のはるみが電話の向こうにいる。本当はもっと早く、あの女から救い出してやりたかったのに、七年もかかっ

てしまった。もう二度と、おびえた表情のはるみを見たくはない。誰よりもお姫様然としていたはるみでいてほしい。

そうしたら健吾も、ふさわしい男でありたいと思うから。

男として、逃げ隠れしない正々堂々たる人間でありたいと思うから。

「なんでもねえよ」

やっぱりうまく言葉が出なくて、ごまかすことにした。ひとつの決意も込めて。

次の日はテスト答案の返却、および答え合わせが中心だった。期末テストが終わるとだいたい授業も落ち着いてくる。公立はどうだか知らないが、青大附中の場合は高校受験対策をする必要がないので、副読本の問題集を解いたり、先生たちの特別授業を受けたりと、のんびりした時間を過ごすことが多かった。国語の授業中、健吾は先生のひとりごとめいたおしゃべりを聞き流しつつ、杉本梨南まわりの動向をうかがっていた。

——やっぱりそういうことか。

朝一番から妙な感じはしていた。いつもさぼりの常連たる花森なつめ嬢と一緒にくっついてくるのはいいとしても、休み時間毎回二年の女子たちが覗き込みにくる。顔ぶれはさまざまだったがけれども、中にはあの清坂先輩と連れ的女子もいた。健吾も顔を知らないわけではないので軽くすれ違いざまに会釈する。全くこだわりなく笑顔で答えてくれるのは清坂先輩だけなので、健吾としてはちょっと得をした気分になる。

「新井林くん、今度の試合、また水鳥中学と練習試合するんでしょ」

「なんで知ってるっすか」

「来年ね、水鳥中学の生徒会の人交流で青大附属に来るらしいんだ。だからちょっと関心ありってことよ。今度情報教えてね」

短いけれどもさらりと流す。

「俺は評議と関係ないっすから」

「そんなこと、言わないで、ね」

ちょっと長めのおかっぱ髪を今日はヘアバンドで留めている。やはり、いい。

——それにしてもな、なんであの男、こんな完璧な彼女を保持しながらあの女なんかに。

いつもながらの疑問を感じつつ、振り返るとはるみが微笑んでいた。ひとりで、軽く首をかしげて。

「なんだよ、何見てるんだ」

「ううん、なんでもない」

——気にしてるんだったら気にしてるって言えよ。

清坂先輩がいなくなった後、もう少しなにかリアクションがあるんでないかとはるみをもう一度伺った。まったくなし。ひとりで本を読んでいた。

こういう時、いつも気持ちを取り残されてあせるのが健吾だった。

休み時間中杉本がいなくてもこんなに違うものだろうか。

健吾は靴の紐を結び直しながらシャープの芯を出したりしまったりしていた。

要は杉本がいなくなっただけで、野郎連中はもとより女子たちのからみが一切なくなっただけというものが、驚くべきことだった。健吾も想像してなかったわけではない。昼休み中のバトルや罵りあい、すれ違った時の罵詈雑言。さまざまな言葉が飛び交う中、教室にいるのが苦痛になりそうな空気が漂う。杉本がいるだけでだった。

それが一切消えていた。

誰もいじめることなく、憎むことなく、それこそ相手にすることなく。

スポーツ飲料を一气飲みした後の、すがすがしさというんだらうか。

杉本を相手にしてうんざりして汗をかき、その後体力を補充しようとする時の身体の働き。

「なんか今日は静かだよなあ」

ある先生の言葉が印象に残った。大人でもわかるのだ。当然だ。

「杉本さん、最近どうしたの？ クラスにいないね」

クラスの女子たちも杉本のいないところでささやいている。一時期の「杉本さんをいじめる馬鹿男子」という意見がここのところ一気に減っている。あの「土下座事件」もさることながら、杉本梨南がクラス女子にかけていた魔法が一気に解けてかぼちゃの馬車になってしまったってことだらう。

杉本が教室から出て行くやいなや、健吾のすぐ脇に女子たちが固まり、

「杉本さんの噂、してる？ あのさあ」

と、嘘のない情報を交換していた。

「一年の中ではハブにされる恐れがあるから、って二年の先輩たちがみんなを守ろうって決めたんだって。そうだよな、ああいうことあったらねえ」

「杉本さん可愛いんだけど男子から嫌われてるからさ」

「そうそう、杉本さんは女子の先輩には人気あるんだけどな」

健吾に気が付いてすぐにひそやかな声に落とす。手遅れだって言いたい。

肝心の杉本梨南に全く変化がないのが、健吾には解せなかった。

親を土下座させて反省させたにも関わらず、本人はつらっとした顔している。

その辺の心理を理解できるのは立村ぐらいだろう。理解できる方がおかしいと健吾は思う。辛いんだったら泣けばいい、恥ずかしいんだったら真っ赤になればいい。反省しているんだっちはるみに手をついて謝ればいいのだ。こちらは許す気などさらさらないが、はるみのために精一杯努力してくれるんだったら、一切見てみぬ振りくらいはしてやろう。しかしながらその努力すらかけらもないとなったら。

——いじめてつぶして追い出すことができれば一番楽なんだがな。

あえて自分に課したルールが重かった。はるみのためなのだ。

授業が一段落し、いつものように号令をかけた。全く姿かたち変わることなく、すっくと背を

伸ばし、正面だけをじっと見つめている杉本の姿がじゃまっけだった。はるみの後ろから首をしめそうな雰囲気をかもし出していた。三角の白い毛糸ストールをブレザーの上から巻きつけている姿はこっけいだった。

帰りの会は大抵他のクラスの先生が入れ替わり立ち代り担当してくれるのが常だった。どうせたいしたこと話すわけではないのだからと、健吾はすぐに体育館へダッシュできる態勢を整えた。なにせ、来週の試合は強豪水鳥中学との練習試合なのだ。

「よお、みんな、お久しぶりだな！」

聞き慣れていたけど懐かしくなりかけの音が扉開くと同時に響いた。

「桧山先生？」

扉が開いたとたん、第一声を耳にしたとたん、誰もの手が止まった。誰もの言葉が消えた。静寂ってこのことかもしれない。思わず立ちあがった。

「先生、あれ、学校帰ってきたのかよ！」

健吾の叫びを合図に、男子連中が次々に立ち上がり桧山先生に走り寄った。健吾が動いたのだから問題ないのだ、と確認するかのよう。

女子たちのひそひそ話もかなりでかでかと響き渡った。取り残された中、はるみはあどけない表情のままだった。杉本梨南は我関せずといった風に、真っ正面の黒板をにらみつけていた。必然的にあの視線は、教壇に立った桧山先生とかち合うことになるだろう。

「ああ。新井林ごめんな、みんな心配かけたな」

意味ある言葉を発しない野郎連中をけん制しながらも言葉が溢れるのと押さえられない。ががっと叫びたかった。

「今日来るって言ってねかったじゃねえかよ。どうしていきなりなんだよ。ちゃんと来るってわかってたら俺に知らせてくれたってよかったです。俺、これでも一年B組の評議なんだぜ」

「ああ、評議はお前だけだってわかってるよ。新井林」

意味ありげに健吾に片目をつぶって見せた。顔がゆがむのはどうしても上手にウインクができないから。でも意味はよくわかる。男前の桧山先生は男子たちだけに笑顔を見せ、最後にちらっと女子連中へと視線を向けた。当然重なるのは、あの女に向かってだろう。

「明日から、一年B組に復帰するからな、みんな、ありがとう！」

ほとんどの男子連中が教壇の上まで集まってきて、

「せんせ、どうしてた？ 二週間大変だったろ」

「なんかさあ、告げ口って頭くるよなあ」

杉本に当てつけるような言葉を真っ正面から口走っているのも丸聞こえだった。そのくらいのことは健吾も大目に見ていた。自分の親が土下座していることがばれても何にも感じない杉本に、そのくらい言っても平気だろう。

「すみません、用がないのでしたら、帰りの会、これで終わりでもいいですか」

冷たい声が飛んだ。思ったとおり、はるみの後ろの生霊だ。

桧山先生は前髪をかき回し、ふっと鼻の穴を膨らませて見せた。気付かないのか、かちんとき

た視線がぶつかりあっていた。

「君には用がないから、帰っていいよ」

見事、一言のみ。

「わかりました。失礼します」

杉本梨南が立ち上がり、なめきったまなざしでもって桧山先生を見返した。それが合図だった。他の女子たちが群れるように立ち上がり大きくあくびした。未練を残しているのもいくばくか。

その中でまっすぐロッカーに向かいコートを羽織り一切振り返ることなく去った杉本を見送りつつ、三人くらいの女子がひそひそささやいていた。

のろのろ桧山先生に近づいてきた。どことなくおどおどしている。

「あの、先生」

意を決したように、ひとりが口を切った。

「何か用か」

女子には実に冷たい桧山先生。クールというよりも冷酷だ。

「あの、桧山先生。私たち、あの」

「はっきり言いたまえ。俺は君たちが反省しない限り、人間としての扱いをしたくない」

「反省っていうと」

「佐賀に対して何をしているかを、自覚してないってことだな」

クラスでも居場所がなかなか見つからない顔をしている連中だった。杉本には逆らえず、かといってはるみを見捨てるのも抵抗がある、結局どっちつかずの偽善者集団。

「どうだ、君たちは反省しているのかしてないのか。してないんだったらこれ以上話すことはない」

「反省、してます」

三人の女子はばらばらにゆっくり頭を下げた。反省のポーズか。

「そういう顔に見えないな。悪いが、君たちにはこれから職員室にきてもらう。そこでゆっくりと話を聞かせてもらう。いいな。この前電話で話したことをよっく、念頭においておくんだな」

冷たく言い捨てた。

いったい三人の女子たちに何が起こったのかは全く健吾も見当がつかない。なによりも、桧山先生が二週間前と同じ自信に満ちた態度であることが驚きだった。健吾にとってはひゃっほうと叫びたいところなのだが、裏表激しいこの先生。

振り返った桧山先生の顔はうって変わってさわやか全開だった。

「じゃあ、お前らも部活に行ってくい。新井林、水鳥中学との試合、がんばれよ」

「まかすとけ！」

健吾は桧山先生の背中を思いっきり叩いた。おどけるように腰をさする桧山先生にもう一度振り返り、廊下を一気に走り抜けた。すれ違う連中の多くが、桧山先生復帰の情報を口にしていた

のも耳にした。いろいろあったとはいえ、桧山先生は杉本に引導を渡したのだろう。

周りの女子たちがだんだん変わっていくのも、杉本が教室からだんだん居場所を失っていくのも。正々堂々たるやり方を褒め称える証に見えた。

雪虫のかわりに本当の雪がちらつき始めたこの頃。冷えた空気がだんだん澄んでいく。

たとえ期末試験の結果がやっぱり杉本梨南のトップぶっちぎりだったとしても。健吾なりにはベストを尽くしたのだから。試合がたとえあいかわらずのぼろ負けを食らったとしても、全くの悔いはなかった。

「新井林、お前、すごいなあ」

桧山先生も全く変わることはなかった。ただ杉本に対しては一切眼中にないという態度を強めただけだった。むしろ変化を遂げていたのは他の女子たちだろう。

——いったい何、命令したんだかな。桧山先生。

例の三人組を職員室に呼び出した後のことを、健吾は知らない。噂にも聞かない。

ただ、妙にはるみに対してその女子たちが声をかけ始めたのだけは気がついた。

「なんでかしら。私もわからないけど、『佐賀さん、おはよう』って、わざとらしく言ってくれるの。無視するのは悪いから、返事するけど、それだけ」

はるみも小首をかしげていた。全く無視されていた頃をかんがみると、それだけでも大きな進歩だ。

「そうか、よかったな」

もうすぐ冬休みだ。健吾は帰り際にもうひとつ額に唇を落とした。

「けどな、もし俺に言えないことなんかしたらな」

「そんなことしないわ」

——してくれたっていいけどな。

唇の中で肌をつつきたがる舌先がはがゆい。

「健吾、今、何したの」

上目遣いにはるみが見つめ返す。

「いや、おしおきの稽古だ」

もし、唇の中からはみ出す舌をはるみの口に入れられたら。完全に触れ合えたら。だんだん自分の中で目覚めていく欲望の一滴。健吾はたまにこらえきれなくなる。

完全に守りきったわけでもないのに、なぜかはるみに対してのみそうしてしまいたくなる。自分のものにしてしまいたいと思う。こんないとおしい相手を傷つける相手をつぶしてやりたい。健吾のエネルギー源だった。

でも、自分は本当にふさわしいのだろうか？

はるみにふさわしい、正々堂々たる態度で杉本をつぶしてやり、あの女をギャフンといわせたかった。けれども、今自分がしていることは、もしかしたら裏の裏なのかもしれない。

——俺は本当に正々堂々としてるんだろうか。

——今までのことって、本当に俺の手で佐賀を守ったってことになるんだろうか。

「冬休みこそ、おしおき、するからな」

思い切ってはるみの額を舌先でぺろっとなめてみた。しょっぱさがちびっと舌の先に残っていた。

——あの女を黙らせることができたなら、一発殴らせろ、かあ。

立村の言葉を思い返しなが、健吾は空を見上げた。

まっ黒い空には、冬のオリオン座がくっきりと残っていた。咽の奥にひっきりな冷たい空気を吸い込んだ。肺いっぱい詰り込んだ。ゆっくりと咽から吐き出した。

——やはり、けじめをつけるしかねえか。

暖房を入れた一年B組の教室で、だんだん健吾の望む展開が繰り広げられているのを感じていた。杉本梨南の立場がだんだん崩れてきて、桧山先生は全くパワーダウンすることなく復帰し、はるみには一部の女子たちが味方の顔をして近づいてきている。

たぶん桧山先生の策略もからんでいるのだろう。

もしかしたら自宅にいる間に、例の女子たちへ電話して反省させるように仕組んだのかもしれない。杉本の親に、土下座させるような言葉をささやく桧山先生のことだ。そのくらいは平気だろう。それを否定はしない。健吾は絶対にやる気ないが。

ただ、下手したら桧山先生は教師として失格のことをしている。と思われても否定できないだろう。いわば特定の生徒を逆ひいきするようなものだ。杉本のことがいくら嫌いだからといって、孤立させたり無視させたりするような態度は……気持ちは非常によくわかるが……正義ではない。そのあたりで健吾もいい方法がないか、かなり頭を痛めていたものだった。いじめではなくて、正々堂々たるやり方で、はるみから杉本を追い払う方法を。

七年間健吾が手を余していたこと。 たった一週間で。

——あいつ、見事やっちまったってことかよ。

両手を握り締め、健吾はもう一度、口から空気を飲み込んだ。

——あんな男か女かわからねえ顔して、女ばかり追いかけていて、頭悪そうな顔してる奴がな。まさかなあ。

——今回ばかりは、俺の負けか。

認めるのが悔しい事実だけど、健吾の腹の中ではとっくの昔に認めている真実。

杉本の味方でいる二年女子たちを利用して、図書館へ保護してやる。

クラスの子どもがだんだん桧山先生サイドに動きつつあるのを見込んでか。

はたして杉本がどう考えているのかはわからないが、先生たちに騒ぎ立てないところを観ると気分いいのだろう。二年の女子たちにちやほやされているのだろう。今まではほとんど学校へ来ることのなかった花森まで引きずり込んでいる。一年同士、コンビを組ませてまとめて面倒を見るというやり方か。孤立もしないし、先輩後輩の麗しき友愛、とでもいう風にも見えるだろう。

他の連中は、なんで二年女子たちがいきなり杉本にかまいたのかわからないだろう。

健吾も、立村とさしで話をしていなかったら想像できなかつたらう。

この状況がどこまで続くかわからないが、このままだと桧山先生は平気のへいざで杉本を攻め立て反省するまで痛めつけるに違いない。大賛成だ。もっというなら、今まで味方でしてくれた女子たちをも一気に引きずり込むつもりだろう。正論だ。はるみに対する無視という名のいじめをやめさせるためなのだ。

しかし、杉本が全く孤立するわけではない。すでに二年女子をはじめとする連中が守ってくれているのだから。という言い訳を用意してあるわけだ。

——あの女がほとんど教室にいなくなっただけで、なんでこうも変わるんだ？

——あの軟弱男、いったいどうしてそこまで読めたんだ？

家まで歩く道のり、天を見上げてオリオン座に手を伸ばした。

——俺は男だ。けじめはつける。

はるみにふさわしい男であるために。

覚悟を決める一夜が明けた。

ほんの少しだけ、道端の雑草につやつやした氷が張っていた。冷え込んだのだろう。

いつものようにバスケット部の朝連に参加した後、着替えもそこそこに健吾は職員室へ向かった。ここにいると必ず、誰かかしらに会う。情報をもらうこともできる。廊下の寒々しい窓ガラスを覗き込んだ。まだ自転車置き場に奴の姿はない。

——まったく、なあにが品山から通ってるってんだよ。ごくろうなこった。

悪態をついてみる。でもいつもの迫力に欠けると、自分でも思った。

「おい、ちょっと逃げんなよ」

どう声をかけるか、予行演習していたけど、やはり一番効果的なのはこれ、だろう。

黒いコートを小脇に抱えた立村が職員室から出てきたのを、健吾は待ち構えた。たぶん廊下にたむろっていたら奴のことだ、逃げるだろうと読んでいた。だから一度背中向けて知らん振りをしていたのだ。でてくるところを捕獲、ってわけだ。

目を見開いて立村は立ちすくんだ。

予想だにしてなかったって奴だろう。いきなり視線を逸らされた。

「新井林、いったいなんだ」

「俺が用あるって言ってるだろ」

「今じゃなくてもいいだろう」

「あんたが言ったんだぜ、『一発殴らせろ』ってな」

立村は黙った。薄い唇に血の気がなかった。ただでさえ生白い肌が透けている。

「ちょっと来いよ」

生活委員の連中が廊下で、遅刻者違反カードチェックの真っ最中だ。邪魔にならないように、というよりも聞かれないようにするため、健吾は顎でしゃくって廊下を歩き出した。片手に社会の副読本らしきものを抱えた立村がついてくるのを確かめた。

「いったい、何を言いたいんだ」

声が冷めている。きっとおびえているんだろうということがわかる。勝ち負けははっきりした一発をかます時はいつもそうだった。相手はがたがた震えているもんだ。立村の顔がもともと青ざめているのかどうかわからんが、健吾が本気でこいつを殴ったとしたら鼻の頭がおもいっきりへしゃげてしまうに違いない。

先生たちが通っていないのを確認し、健吾はポケットに手をつっこんだ。立村の顔を見上げながらぐるぐると相手の周りをまわった。生徒玄関はもう閉まっている。健吾と立村、あと数人の生徒がうろついているだけだった。

「悪いけど、あんたすげえなってまずは、けじめをつけたかったってことだ」

「けじめ？」

繰り返した立村は、また健吾を目で追いながら立ちすくんでいた。

「そうだよ、けじめって奴だ。俺は男として最低の人間になんぞなりたくないからな。あんたがどういう手をつかったかわからねえが、一週間前の公約通り、一年B組は見事に静かになったってわけだ」

敗北宣言、と言われても仕方ない。一晩悩んだことなんだから。立村はまだわからなさそうにきよときよと健吾を見つめていた。

「杉本の、ことか」

「そうだ。お見事、さすが本条先輩の命で評議委員長に推薦されるだけのことはあるって、俺も認めてやるさ。あの桧山先生だって、いきなり教室の状況を見てな、『ずいぶん変わったなあ。静かになったなあ』って言ってたぜ。要は、あの女が教室にいることが少ないと、丸く収まるんだってことが証明されたってことだな」

ようやく勘付いたらしく、立村はプリント類を持ち直したため息をもらした。息が白い。もちろん健吾はまだ様子見している。

「そうか、だいぶ落ち着いたか」

「清坂先輩とか、二年の女子の先輩を利用して、よくもまあやるよなあ。思いっきりむかつくが、けどあんたのやり方がお見事だったことも認めてやるさ。俺が七年間苦労してきたことを、あんたは一週間で片をつけてしまったんだ。ま、本当はあの女の口を封じてくれれば一番いいんだが、それ以上のことを俺はのぞまねえよ。まあ、桧山先生も復活したことだしな」

そこでだ、と健吾は口の中で、自分に聞こえるようにつぶやいた。

「今日の放課後、茶室で落とし前つけさせてやるよ」

「落とし前？」

「あんた、おうむ返ししかできねえのか。ほんっと馬鹿じゃねえか。まあいいさ、あんたは俺を一発殴りたいって言ってたしな。この件に関しては俺が全面的に悪うございましたってことで、一発とは言わず、三発くらい殴ってよしだ」

「新井林、あれは言葉の綾だ」

なあにあせっているんだろう。いきなり言葉が早口になってやがる。

「殴らせろって言うてるんじゃねえぜ。俺は殴らせてやるって言うてるんだ。一騎打ちであんた

の腕力じゃあ俺とは話にならねえだろ」

どうやら言葉の弾みで「一発殴らせろ」と言ってしまったことを、今ごろになって後悔しているらしい。徹底して責めまくってやろう。腹の底でふふふと笑う声が聞こえる。

「落ち着け、よく聞け。新井林。確かにあの時俺は、そう言ったよ。けど、今の一年B組が丸く納まっているんだったら、無理にそんな、殴りつけようだなんてことはしない。暴力で物事がうまくいくなんて、ガキっぽいことを考えてはいないんだ」

「ほお、前言撤回かよ。ったく、やっぱりあんた、度胸ねえんだな。それともなにか？俺が騙そうとしてると疑ってるのか？悪いが世の中、あんたみてえなびくびくした馬鹿男だけじゃないんだ。よっく目の玉おっぴろげて見てみるよ」

自分で蒔いた種が想像以上に成長しているのに驚いているのだろう。立村は完全に硬直していた。唇を血が出そうなほどかみ締め、今にも泣き出しそうな表情を瞬間ちらりと見せた。覗き込む健吾のまなざしを捕らえるのもつらそうだった。

——この、今にもしゃがみこんで泣き出しそうな顔してながら、やることはすげえよな。実はこいつ、噂されているよりもはるかに、頭悪くないんじゃないか？

健吾は自覚している。

どんなに軽蔑していた相手でも、相手の才能や才知が優れていれば、それはそれで素直に尊敬できる性格だと。杉本がらみのごたごたが起こった時期でも、立村が英語のエキスパートであり、よくわからん文学書をすらすら読んでいて、しかも卓球の才能があるらしいということを知っていた。はっきり言って、上記三点において健吾は絶対に勝てないだろう。

誰にでもつかかりたいわけじゃない。今回はきっちりと、立村によって杉本の隔離が行われたから、健吾としては当然、けじめをつけたかっただけのこと。

殴られたら痛いに決まっている。いくら腕力なしの立村だって一応は男だ。力いっぱいやったら健吾の顔にアザができるかもしれない。しかし正々堂々と勝負をかけて、たまたま今回は負けた、だからきちんと反省し受けるものは受ける。

負けた時の落とし前のつけ方すら知らないで、なにが「一発殴らせろ」なのか。

「じゃあな、放課後、茶室の裏で待ってるぜ」

一切言葉を発しない立村に見切りをつけ、健吾は急ぎ一年B組の教室に向かった。全く動かないでいたところみると、立村、たぶん、確実に二年D組の朝の会には間に合わなかっただろう。

教室にて杉本は、一心不乱に教科書を読みふけていた。振り返ったはるみの瞳に、いぶかしげなものを読み取り健吾は、ふいとそっぽを向いた。

——あいつは、俺の考えていること、最近わかるみたいだな。まあいいか。もしばれたらその時こそ、唇に、おしおきだっておどしとけ。

試合前に似た気合が蘇ってくる。健吾は野郎連中に埋もれてしばらく高揚する心臓を落ち着けるよう努力した。

——今から盛り上がってどうするっていうんだ。人殴ったことないんだろうな。なあに怖がってるんだよ。そんな奴とマジで勝負なんてするつもりねえよ。

一発目が降りかかってきたらこう言ってやろう。せせら笑ってやろう。

——あんた、本気で勝負したことねえってことがよっくわかったぜ。そのこぶしの作り方だとな。

その9 大人になる理由

呼び出した方がいいが、はたして奴は来るのだろうか。

——せっかくけじめつけさせてやるってのにな。きっと返り討ちにされるってびびってるんだぜ。あいつ、馬鹿だよなあ。

思い切って練習を休むことにした。テスト後ということもあって、本当だったら気合を入れていかねばならないことだけれども、たまたま風邪気味だったことと、

「試合前だからな、無理するなよ」

という二年生連中の暖かいお言葉に、今回限り甘えさせていただくことにした。

——俺だったら絶対、そんな甘えた態度とらせないがなあ。

都合のいい時だけ利用するのは気が引けたが仕方あるまい。

顔にアザつけて帰ってきたら、かえってお互い、まずいことになるだろう。

立村は次期評議委員長、かくなる健吾は次期バスケット部キャプテン見込み。

お互い、青大附属の花形として生きていくのだから、今の段階で傷をつけたくはない。健吾はかまわなくとも、立村はいやだろう。

まだ三時半を数分過ぎた程度だというのに、茶室の裏手は枯れ木の中に覆われて薄暗くなっていた。わずかに溶けた雪で足下は滑りやすい。石畳の間に垣間見える土が黒々としていた。スニーカーをそのままずぼずぼ入れて歩いた。

茶道の時間に使用する程度の茶室。一年の健吾はまだ、大部屋の和室でみな連なって正座する程度だが、二年になると班ごとに分かれて別棟の茶室にて茶会の練習をするという。和菓子が食える事以外にメリットを感じない健吾としてはどうでもいいことだが。屋根は、足マッサージ用の青竹みたいなのを四角く敷き詰めたものだった。ねずみ小僧ごっこして、よじ登ってみたい衝動に駆られた。

人はいない。決闘するにはいい場所だ。

さすが二年、場所の選定に狂いはない。

——人目につかねえとこで、かつめったに人が通らない場所だもんな。グラウンド近辺だと運動部の連中がたかっているし、学校の中だとどっちにせよ先生どもがわめくだろうしな。かといって学校を出たら近所のうるさい連中にぎゃあぎゃあ言われるしな。自分の保身を得意とする、あの男らしいぜ。

本当だったら一気に叩きのめしてやりたいところだ。残念だ。

健吾は男として、正々堂々を愛する人間なのだから。

掃除当番に当たっていたとしても、だいたい二十分くらい待てばくるだろう。思っていたとおり立村の姿が見えたのは、十五分後だった。茶室近辺に人影はなく、決闘するにはちょうどいい空気が漂っていた。

「待ってたぜ」

「すまない」

やはり腰の低い奴である。健吾はポケットに手を突っ込んだまま、黒いコートを羽織った立村の姿をじっくり眺めた。膝下まである分厚そうなコート。大抵の男子だったら、そんなものを着ようとはしないだろう。ジャンパーが普通だ。

「今なら誰もいねえぜ。さ、好きなように料理しろ」

「新井林、そういうんじゃないんだ。少し話そう」

立村は軽く咳き込みながら、左手を差し出した。

「俺も、あの時感情で口走ったことは悪かったと思っている。でも納まったっていうんだったら、もう遺恨なんてない。これから先は長いんだ。だからもう一度あらためて話をしたいんだ」

「けっ、何いきなり尻尾巻いて逃げる気にいるんだ？ あんた、男だろ。男としての約束を守れないでなあにが」

つばを足下に吐き、健吾は真っ正面から立村を見据えた。まだひくひくとした目だ。

「殴ったっていやな思いするだけだ。それより、これから、新井林と佐賀さんがどうすればいいな思いをしないですむか、それを話し合いたいんだ」

「しつこいぜ。俺たちがすっきりできるのは、あの女が青大附属を出て行くことだ。そうしない限り、どんなことがあったってすっきりさわやかかって気持ちになんてなれねえって、何度も言っただろうが」

無理難題だとはわかっている。でも、健吾はがまんできない。あの汚らしい顔と、ゆがんだ口元、泥水のような髪の毛、どろっとした瞳。杉本梨南の顔形、かもし出す空気すべてが耐えられない。はるみにしたことすべてをチャラにしたとしても、嫌悪感をぬぐうことがどうしてもできない。どうしてかわからないけれど、本能がそう叫ぶ。

「それはできない、けど」

「ははん、あの女を退学させることができなければ、俺はあの女を許すことなんて永遠にねえだろうし、あんたを認めることだってたぶんできねえだろうな。けどな、あんたは俺のできなかったことをあっさりやってくれたんだ。クラスの平和があの子のいないってことだけで保たれるってことを教えてくれたんだ。悪いがあんたと違って俺は、間違っていることは堂々と認めるし頭も下げる。恨みだってあっさり捨てる。評議委員長としてのあんたを認めるぜ。その誠意を見せたくて、今こうして、ほっぺた差し出してやるってんだ。さ、三発くらいさっさとやっどくれ」

一心太助よろしく、地べたにあぐらをかいて両腕を組んだ。

ふくらはぎに染み入るぬれた感触。足首に直接触れるぬれた土。立村は差し出した手をぶらんとぶら下げたまま立ちすくんでいた。言い返せない奴だ。唇をかみ締めるともう一度小さく首を振った。一步だけ足を進めた。

「新井林、俺はお前がどうして杉本を嫌うのか、そこまでは想像がつかない。けれど佐賀さんに杉本がしたことを許せないというのだけは共感できる。どんなに杉本がお前たちと友だちになりたくてしたとしても、許せないことは絶対に許せないだろうし、責められないことだと思うんだ」

」

「つべこべ言うな。繰り返しだぜ」

「頼む聞いてくれ。でも、杉本はどうしてもその気持ちが理解できないんだ。本当はお前や佐賀さんとうまくやりたいと思っているのに、どうすれば喜んでもらえるかが想像つかないんだ。言い訳だと思われるかもしれないけれど、かなりの確率で俺はそうだと踏んでいる。桧山先生が俺のことを引き合いに出して病院に行けって言ったのは、新井林や佐賀さんが杉本のしていることでどれだけ傷ついているか、少しでもいいから理解してくれってことを言いたい、それだけじゃないかって」

「はあ？ なに女々しいこと言ってるんだ？」

また一步、スニーカーの足を踏み出した。少し前かがみに健吾の顔を見下ろすように。

「杉本だってしたくてしてるんじゃないんだ。どうしてもそう思えないから自分のしたいことをするしかないんだ。どうして男子連中がこんなに自分を嫌うのかわからないし、どうすれば嫌がられないですむか想像つかないんだ。俺が今杉本にできるのは、どうすれば周りの人が嫌がらないですむか、そういう言い方を教えたり、佐賀さんが辛い思いをしないで杉本も傷つかないですむにはどうすればいいか、それを考えることくらいだ。俺だって頭が悪いしたぶん、新井林よりはうまくできないかもしれない。でも、せめてお前たちがむかつかないようにするために、杉本をクラスから引き離すことくらいはできる。俺ができるのはそのくらいなんだ。だから」

もう一度、今度はかばんを持ち替えた右手を差し出した。

「頼む、杉本に情けをかけてやってくれ」

健吾はゆっくりと立村のおののき加減な顔をねめつけた。

「情け、かよ」

鼻息で返事した。拒否。当たり前だ。

「御託並べてるんでねえよ。なあにが『杉本だってしたくてしてるんじゃない』んだ？ 『友だちになりたくて』だ？ あのな、ずっと聞いてればあんた、あの女のことを隠れ蓑にして、好き勝手に言いたいことわめきちらしてるだけじゃねえか？」

言葉に詰まった様子、わずかに背中を引いた。

「『杉本』をあんたの名前に置き換えてみるよ。要するにあんたがどうして清坂先輩や羽飛先輩におべっか使っているかを言い訳してるだけだろ。たまたまあの女がいたから、正義の味方面して俺を開いてにべらべら言いまくってるだけでな。けっ、やり方汚ねえな。せめてやるなら、精一杯あの女をかばえばいいじゃねえか。本当は惚れまくってるから、守ってやりたい、守ってやりたいから俺につっかかる。それだけのことじゃねえか」

一息で言い放った。また首をかすかに振ろうとするが目は震えていた。

「俺だって惚れた女がいる。あんたが杉本をたまらないほど惚れぬいているっていうんだったら勝手にしろってんだ。俺とは関係ねえよ。だがな、俺と佐賀はあの女のせいで六年間、ひどい目にあわせられてきた。それも事実だ。だから戦うそれだけだ。あの女のせいで町を追い出された奴だっている、悪口言われて学校辞めさせられそうになった先生だっている。これ以上俺の大切な奴をあの女の餌食になんてされたくないだけだ」

「わかってるだから」

「わかってねえよ。あんたなあ、自分でどんな顔して言ってるのかわかってるのかよ。あんたは自分を清坂先輩の彼氏でいるってことで安全地帯作って、その上でのそのその女を守ろうとしてるってわけだ。たとえ俺がここで、あの女を許すって言えば、ほっとして清坂先輩といちゃつくんだろうな。今あんたが言ったみたいなことを清坂先輩たちに言って、『情けをかけてやってくれ』って訴えて、仲間に納まろうとするってわけだ。けっ、汚ねえな。あんたの顔、今にも泣きそうだけ。こういう顔してたぶん小学校時代もすごしてきたんだろうな。本品山の浜野さんにも同じ顔して訴えてきたんだろうな。俺だったらあんたを息の根止めるほど殴りつけてやっただろうけど、あえて許してくれた浜野さんの恩も忘れてか。最低だなああんた。けどそれとこれとは関係ねえよ。俺はただ、あんたがあの女を迷惑にならないようにしてくれたから殴ってもいぜ、って言うただけだ。あんたが男だったらそのくらいの仁義は持ってるだろ」

じんじん染み入る足首への冷え。動かない立村を早くせかしたい。

「そっか、あんたは殴ることすら怖いのか」　きつと目が合い、健吾は一切逸らすことなく一点凝視した。

勝負は目をそらした方が負ける。

立村が一度、唇を開き何かを口にしようとした、が次の瞬間ぐっと健吾の襟を引き出すようにしてゆっくりと手を伸ばした。

——さ、やってくれてんだ。

恐る恐る、こわごと。

咽仏を触れるようにして、ネクタイだけ引っ張り出した。かがみ込み、目をそらさず。

「本当に殴られるつもりでいるのか」

静かだった。お互い吐く息が白く漂った。

「あんた日本語わからねえのか」

「殴られたら痛いんだ、そんなことされたいのか」

「気持ちいいんだったらマゾだろ」

「新井林、お前」

顎が自然と持ち上がる。ふつうだったら目を閉じるのだろう。でも健吾はさらさらそうす気なしだ。げんこで顎を支えられた格好で、もう一度にやっと笑ってやった。

「そうこなきやうそだな。あんた、いいかげん大人になれよな」

右手でネクタイを取っているんだから、馬鹿もいいところ。利き手を使いたいだろうに。やっぱりまともにタイマン張ったことのない奴なのだ。

——この勝負、完全に俺の勝ちだ。

殴られようが、蹴られようが。健吾は勝利を確信した。

襟から伝わってくるものが、やがて震える感覚に変わっていった。立村の手先から来る振動だとすぐに気付いた。気持ちが揺れているに違いない。アホだ。

——ろくに殴ることもできねいで、なあにが杉本をわかってやれ、だ。

おびえる瞳が揺れている。健吾は一切逃げなかった。立村の目がだんだん迷いに変わり、やがてうるみかけていたように見えた。

「ほおら、やれねえのかよ」

気合をつけてやりたいところだが効果なし。ネクタイを握り締めたまま立村が、片膝ずつ付き、つぶやいた声を拾った。

「ああ、できないさ」

健吾と同じ位置に奴の顔が下りている。前髪が震えるようだった。顔を隠すようにして、ネクタイから指を滑らせ、離れた。

「お前の勝ちだ。新井林」

そのままうつむき、咽の奥で小さな咳をした。

「最初から勝負はついてたのにな」

か細くつぶやいた。鼻で笑いたい。最初から健吾が言いたいことを、こいつはやっと理解したらしい。自分がいかに弱くて懸命であるかを必死に訴えてきたはいいが、度胸がなくして結局男同士の勝負すら放棄してしまう情けない奴。こんな奴を先輩として認めたくはないが、健吾は大人である以上仕方ないとして許してやろうとしたのにな。

——勝負、ついてたか。そういうことかよ。

桧山先生と杉本梨南との三つ巴対決に割り込んだ時、立村が叫んだ言葉を覚えている。

——もう、勝負はついているだろう。あの時はよくわけがわからなかったから流した。でも今、立村がつぶやいた言葉ですべてが通じた。自分がガキだということを、杉本も救いようのないガキだから、許してやってくれたとかばっているに過ぎないということ。

——たまったもんじゃねえよ。ガキがガキだったらガキの溜まり場で遊んでれってことだ。俺たちにかまうんじゃねえ。大人のゾーンに割り込むんじゃねえ。健吾も、桧山先生も言いたかったのはそのことだ。

——よくわかったか。ガキのくせに俺たちにちょっかい出すんじゃねえ。

言葉には出さないで、健吾はもう一度鼻を鳴らした。ふがっと、ブタっぽい音だった。

「よおし、わかったそこまでだ。立村、新井林」

靴下がびっしょりぬれていることに気付いたのは、声が聞こえてからすぐだった。立村が即座に振り返り、腰を浮かせた。

「本条先輩……」

健吾は動かないまま、もう一度口を結び頭を下げた。本条先輩が白いジャンパーを羽織ったまま、茶室をバックにふたりを見つめていた。めがねを外したままだった。完全なる無表情。石をひとつ蹴飛ばした後、立村に近づき平手で頬を張り飛ばした。

バランスを崩したのか立村は片ひじをつく格好で倒れかけた。

そいつを無視してすぐに、本条先輩は健吾の肩を叩いた。打って変わって意味ありげな笑みだった。

「新井林、大丈夫か。しんどかったなあ」

「何でもねえっすよ。たいしたことじゃねえ」

殴られたとでも思っているのだろうか。その辺の誤解は解いてやろう。口を開きかけたが本条先輩は目で軽く合図を送ってきた。黙ってろ、って奴だろ。大人同士の意思疎通だ。

振り返り立村が立ち上がりと同時に、

「いいか立村。お前がこれから何をすべきかは、わかってるんだろうな」

答えなかった。膝にべったりついた泥をぬぐうこともしなかった。見下ろすように本条先輩の顔をにらみつけていた。健吾の方は全く眼中にないと、よくわかった。

「全く、だからお前はガキだっていうんだ。いつまでも甘ったれるんじゃねえ。悔しかったら新井林が納得するように完璧に片をつけてみろ。それができるまで、俺はお前と一切縁を切る。聞いているのか」

——おいおい、ホモ説の相手同士だったのに、そこまで言っているのかよ、本条先輩。

立村の視線は次に健吾へと向いた。涙を雪で凍らせたようなまなざしだった。大泣きするのは時間の問題だろう。

「わかりました。失礼します」

小さく一礼をすると、立村は背を向け全速力で茶室から離れていった。脱兎のごとくとはあのことをいうのだろう。本条先輩と目と目が合い、健吾はようやく立ち上がることができた。

「ま、新井林、少しあったかいところに移るか。ごくろうさんだった。あのくらい言わねえと立村の奴、ちっとも答えねえからな。お前の言う通りだ。ガキはな、自分で自覚するのにどうしようもないくらい時間かかるんだ。ほんっと、腹立つくらいにな」 わざわざかばんまで持ってきてくれた。恐縮だ。

「今の時間だったら、茶室、誰もいねえな。ま、入ろうか」

石畳の色が完全に墨の色と同じ。少し痺れた感覚のある片足を引きずりながら、健吾は本条先輩の後ろを追った。初めて入る本式稽古用の茶室。腰をかがめないと入れないにじり戸を開いて、本条先輩は尻を突き出したまま入った。健吾も続いた。初めて覗き込む茶室は四畳半で、ちょっと埃臭い匂いがした。畳の上に立った時、じわりと足跡が付いたのが分かった。

「ま、座ろうや」

火の気の無い部屋の畳はからからに乾いていた。畳の真ん中に小さな炉、黒い炭を四つばかり四角くく並べたままだった。

「さすがにここじゃあストーブ焚けねえしなあ」

本条先輩は両手をさすりながら腰をおろした。炉を挟んで反対側にあぐらをかいた。

「本条先輩、あのですね、今日のことなんだけどさあ」

どこまで今日の一件について聞き及んでいるのかわからないが、一応は立村の顔も立ててやろう。余裕がある。

「あ、そのことか。だいたい見当はついている。最近立村の様子がおかしかったから、いろいろ見張りつけてたりしたんでな。まあ、お前とだったら奴の勝ち目はないな。と思っていたから様子見してたんだが。ったく、俺も受験生だったのに、まだあいつの面倒みなくちゃなんねえのかって頭痛くなったぜ」

——見張り、かよ。

さすが本条先輩、鋭い。

「けどな、その点新井林、お前は大人だなあ。ほんと、一年だとは思えねえぜ。ちゃんと立村をあしらって、頭を下げさせたんだからな」

口元をやわらかくして笑った。

「いや、先輩。本当は一発二発殴らせてやらないとって思ってたんだ」

「そうか。あいつだったらお前に本気だされたとたん木っ端微塵だもんな」

本条先輩、すべてをお見通しだ。だから健吾はこの人に勝てないと思うのだ。

顔だけ見たら優男だろうし、下手なアイドル歌手よりもずっと上だろうと思う。青大附中開闢以来の女ったらしという異名だけが先走りしているけれども、本当のすごさをたぶん知っているのは、たぶん健吾かあと、あの立村くらいだろう。

「でもまあ、停学騒ぎにならないですんだ。よかったよかった。立村もたぶん、あの顔見てたら何にも言わないだろうし、自分のやるべきことはさっさと片付けるだろうな。新井林、お前もその点は心配しないでいいぞ」「別に心配なんてしてないっすよ」

なんで、立村をここまで貶した発言をするのだろうか。健吾は少し不気味に感じていた。一応は「本条・立村ホモ説」とささやかれた相手だというのに。実はカモフラージュだったのだろうか。もともと本条先輩は健吾をひいきしてくれていたし、杉本を絡めた問題についてもなんとなく、健吾よりの立場を保ってくれていた。しかしながら本当のところはどうなのだろうか。この人の命令には絶対に逆らえないとわかっているからこそ、次の言葉に用心したかった。

「そうだな。お前がいるから次期評議委員会は安泰だ。まあな、杉本のこととかでお前が頭痛くなるのもよおくわかるし、その辺は奴に少し考えるよう言っとく。全くガキを相手にするのはほんと、疲れるなあ」

両膝をV字に立てて両手を乗せた。

「で、本条先輩何を言いたいんっすか」

「さすが、匂いをかんでるな」

健吾が身体を反り返らせるようにして言葉を待つと、本条先輩はうんと頷いた。

「相談なんだが、お前、ああいうガキをうまく扱って青大附属の評議委員会を利用するってのはどうだろう？ 今の果し合いを聞いた感じだと、どうみてもお前の方が上だ。立村を委員長にすることについてはもう決まったことだからひっくり返すことができないが、来年以降はお前が影の委員長と言っても過言じゃない。あのぼおとした立村をうまくあやしなながらやれるのは、新井林、お前しかいない」

「あやす？」

どこまで本気なんだかわからない。まゆつばで聞くしかない。ぐいとにらみつけた。威嚇のポーズだ。

「そうなんだ。新井林、お前も知っての通り、立村は見た目以上に本当にガキなんだ。まあそういうところが俺は嫌いじゃないし、弟分にしてるところでもあるんだが、だがな。あれじゃあまだまだねんねのまんまだ。お前の心配してくれている通り、下手したら杉本あたりを次期評議委

員長につけようとしたり、かなり肩入れしすぎてしくじったりしそうな気がする。ただでさえ青大附属の評議委員会が立場弱い形になっているのに、そんなことでぶっこわしたら大変なことになるってわけだ。まあな、杉本がらみの問題については、俺もあまりかかわりたくない。この辺は、男の本音だ」

にやっと笑う。飲まれないようにしなくては。防御。

「だが、俺なりにあの甘ったれがこれから先ひどい目にあっていくかを考えると、非常に胃の痛い気がするのも確かなんだな。特に杉本あたりに利用されないとも限らない。ということで頼みの綱は、新井林、お前だけなんだ」「冗談じゃねえ、俺はお情けであいつを許してやったんだけど」「いやいや、そういう器を持っているお前だからこそ、あえて頭を下げて頼みたいとこなんだよ。お前は大人だ。ずっと、俺と対はってしゃべることのできる、数少ない後輩だ。あの『青大附属スポーツ新聞』だって、今は全校に配ろうという方向に進んでいると聞かぜ。俺たちの盲点だったとほんと、思う」

——ちくしょう、忘れてたぜ。

いまだに勝ち星を挙げられないバスケット部の実情に思いを馳せた。

「だが、今の段階では委員会最優先主義がまだ続いている。俺が卒業して、立村が仕切り終わるまではたぶんこのままだろう。せっかく委員会が部活の要素を持っているんだったら、どうだ、新井林。お前この状況を利用してやろうって気にはならねえか」

「俺は一からこしらえるのが好きですから、そんなのどうでも」

「もちろん仕切りが新井林ってのは決まりだ。ただ、せっかく写真関係とか、新聞関係とか、得意な委員会が存在してるんだったらそこから逸材を引き抜くとか、記事が得意な奴がいたら利用するとか、そういう風にしていくとだいぶ楽になるぞ。やっぱりチームプレイも大切だ。俺が思うに」

以下、本条先輩の提案。

「来週の終業式前までには立村もそれなりの提案をしてくるだろう。杉本がらみのうざったい問題についてはお前の判断に任せるにしてもだ。とにかくお前のやりたいこと、委員会主義から部活最優先主義にしたいっていうんだったら、どこまで立村から有利な条件を引き出せるかを計ってみたらどうだろう」

「なんすかそれ」

「ねんねでも立村のネットワークはすげえよ。俺も絶句したんだが、あいつは本能的に人を利用するのが得意なんだ。健ちゃん、あんたと女子以外はな」

「女子以外？」

「あいつの弱点は女子受けが悪いってことなんだ。同学年の野郎連中は立村からなんらかの恩義を受けているらしくてさ、あいつの頼みは大抵聞いてもらえるらしい。今回の一件もそうだ。俺が聞き出したところによると、今回の杉本の件、あいつが動く前に清坂が情報を仕入れて、菱本先生に抗議しに行ったらしいんだ。清坂ちゃん、あれでもあいつに惚れ抜いてるからな」

「嘘だろ、ってか、なんすか。清坂先輩が抗議って」

「ほらあったら。立村が病気だとかなんとかっていう話。あいつがガキの頃から生まれつき数学の頭が弱くて、なんかの施設に通ったことがあるっていうことをさ。本人としたら言われたくなかったろうな。でもまあ、その代わりといっちはなんだけど大学の講義を受けられる試験を通ってるから、みなとんとんだと思ってるみたいだが」

すっかり忘れていた。そうだ。きっかけは桧山先生と菱本先生の戦いだ。

「そうっすか」

「雑魚どもが騒ぐほど、内緒ごとってわけじゃあない。けど、あまりおおっぴらに言いたくないことも想像はつくわな。本当に桧山先生が杉本に病院に行け発言をしたかどうかはわからんけれども、そこに自分の彼氏の見られたくないところを引き合いにだされたら、清坂ちゃんのことだ。ぶっちぎれるだろう。お前だって、彼女には、そうだろ」

はるみの顔を思い浮かべる。大きく頷いた。

「そういえば、清坂先輩、俺にそのこと聞きに来てました」

「そうか。じゃあ完璧だ。つまり立村をかばうために彼女たる清坂がひとりで動いたってわけだ。菱本先生も熱血だから燃えまくる。桧山先生をいじめるいじめる、で、ああいうことになったってわけだ」

——清坂先輩がかよ。嘘だろ。

どう考えても、立村にあの清坂先輩が惚れぬいているというのが信じられない。何かの間違いかと思っていた。しかし本条先輩の言葉は絶対だ。動かない。

「さすがにそのことに気が付いた立村は悩んでたなあ。もちろん口には出さねえけどな。さっそく菱本先生のところに行って、『自分のことで桧山先生が迷惑をこうむっているのなら、謝るからなんとかしてくれ』みたいなことを言ったらしい。これも清坂ちゃんが話していたことだがな。あいつと菱本先生、二年来のバトルを繰り広げてたみたいだけど、ひたすら頭を下げて謝って。菱本先生もそれにほだされたかどうか知らんが、まあ桧山先生復活となったのにはその辺にも理由があるらしい。と、俺はある筋から聞いている」

背筋が寒くなったのは、部屋が冷えているからではない。

——まじかよ。あいつ、そこまでしたのかよ。

ひとつならともかく、ふたつも負けた。

健吾の出来なかったことを、立村上総はやってのけているというわけだ。

唇が切れて痛い。健吾はそっと口をぬぐった。

「だから立村は、使いようによってはかなり有能な駒であることも確かなんだ。俺が想像つかないやり方でもって片をつけることも多かったが、なによりも、あいつが動く前に周りの連中が喜んで手伝ってくれるだけのオーラを持ってるんだ。なんでだろうな。どんなにあいつがへまやかしても、周りがうまく治めてくれる、いや、治めないとまずいとして動いてくれるんだ。俺も無意識のうちに使われた、その口だ」

——ははん、ホモ説はそこから来てるのかよ。

「だからな、俺としての提案なんだが、新井林がうまくあいつを操って、評議委員長としての立村を利用したらどうかってことなんだ。残念ながら腕力勝負では役立たずだが、人間関係をうま

く操る腕は俺以上だ。俺もあいつを敵に回したらどうなったか、今でも恐ろしい。第一、小学校時代あれだけやばいことをやらかしておきながらいまだに、復讐されてないってところがあいつの怖さだろう。野郎限定大目に見てもらえてしまう能力は、ありゃあ天性のものだけ。使わない手はない。杉本を片付けることについても、新井林、お前の出方によってはあっさり処理してくれるかもしれない」「はあ、処理だって」

「そうだ。まあもしだ。俺が健ちゃんの立場だとしたら、決闘なんてあっさりけりのつくことはしないわな。まず、うまくあいつから交換条件を引き出す。杉本をおとなしくさせるかクラスの邪魔をさせないかさせてってことか。今回は。そしてそれをやってくれるんだったら、立村に協力するという譲歩をする。駆け引きってやつだな」

「俺そういうの正々堂々としてないから、好きじゃねえっすよ。やるならすっきり力でけりつきたいですよ。負けてもいいから」

「いやいや、それだったら相手を恨ませるだけで、それ以上の進歩がねえだろ。そこんところはな、健ちゃん大人になって、立村の吐き出せるものを全部吐き出させちまえ。うまく機嫌を取っていけばあいつも、何とかしようなんとかうまくやろうと努力してくれる。あいつは保身に回っているように見えるけれども、いざとなったら退学も辞さない性格だ」

——本当かよ。

「あ、健ちゃんお前、嘘だと思ってるだろう？ そうだよな。疑うよなあ。でもな、本当なんだ。あいつの伝説パート2知ってるか？ 今年の夏休み宿泊研修の時、立村は何を考えたか菱本先生とバトルやらかして、大法螺ついてバスを抜け出すという荒業をやらかしたんだ。本人には理由がちゃんとあったし、菱本先生もその辺大人だから流したらしいが」

「それってほんとっすか」

「ああ、本当だ。俺は事件前日に、あいつから電話で相談受けたからな。やめれって置いてたんだが、全く効き目なしだ。いったん決めたら退学だろうがなんであろうがやることはやる。そういう特攻隊的性格を利用しない手はないだろ」

初耳だった。あの昼行灯めいた顔をして、マネキン人形と一緒に混じっていても見分けつきそうにないあの面が、そこまで悪さしていたとは思えない。

単なるたらしかと思っていたが、本条先輩の話聞く限りそうでもないらしい。健吾には想像つかない何かがあるらしい。

「そうなんだよ、立村は怖いんだよ。ガキだから何やらかすか想像つかないんだ。そこでうまくコントロールする大人が必要なんだ。本来だったら清坂ちゃんあたりが適任なんだが、今回の杉本事件のことを考えると第二のコバルト爆弾にならないとも限らない。となると、下級生ながら、新井林、お前しかいないんだ。大人になって、あいつを操れるのは健ちゃんしかいないんだよ。俺の頼み、聞いてもらえないか」

深々と頭を下げる本条先輩。健吾は足の親指をもみながらつぶやいた。

「大人になるって、どういうことっすか」「今日のことだって立村のようなガキには相当の打撃を受けたはずなんだ。死にたいと思ってるだろうな。悔しくて今ごろ泣きじゃくってるだろうな。そういう奴なんだ。けど、そういう時がチャンスだろ？ 健ちゃん、正々堂々だけが勝負じゃ

ないんだ。うまく駆け引きするのもこれからは必要だぞ。特に、立村みたいな奴なガキとやりあっていくにはな、力勝負だけじゃあ話が通じないんだ」

正直なところ、むかついた。本条先輩の言い分には納得するところもあるけれど、でもいわば「立村をそれなりにおだてあげろ」ってことを言いたいだけなんじゃないだろうか。思いっきりけなしまくっているけれども、その裏でなんとかしてやろうと努力している本条先輩の姿が見え隠れする。自分でもおっしゃっている通り、本条先輩は立村の持つオーラのようなものに操られているだけなんではないだろうか。

——冗談じゃねえよ。あんな奴になんて誰が誰が。

健吾がつぶやきつつも、あきらめかけていたのは、むしろ本条先輩のオーラの方だった。

「繰り返すが、俺は杉本のことについては全く口出しする気はない。やっぱりあれは本音として許しがたいことだろうしお前を止める気はない。そっちの問題は立村の出方を待つなり、たたきわるなり好きにしろよ。だが、立村とだけはうまくやった方がいい。機嫌をうまく取っていけばかならずあいつはお前の味方になるだろう。そうだ、健ちゃん。そこまで疑うんだったら、一週間大人の目で、立村がどういうことをしてきたかを洗い出してみたらどうだろう？」

「大人の目？ 俺はずっとそうしてたっすよ。ばかにすんなってんだ」

「いやいや、新井林、意外とそうでないかもしれねえぞ。あいつはうまく昼行灯の顔で通しているが、やってきたことの多くは確かにすげえもんだ。よっく様子を覗いてみろよ。驚くぞ」

「そうすかねえ」

「最初からガキなんだと思って見ていたら、結構やることをやる奴かもしれねえぞ。とりあえず来週以降に立村がどういう提案をするか待ってみて、それからあいつをどう扱うか決断してもいいんじゃないかってことだ。新井林、お前は大人なんだ。大人の目でこの問題进行处理するなら、どうすればいいかってこと、絶対わかるはずなんだ。俺が保証する」

炉の中の白い灰を覗き込み、本条先輩は大きくくしゃみをした。

「ちくしょう、寒すぎ。健ちゃん、場所変えよ。これからバスケか？」

「いや、休むって言ってあります」

「じゃあ食べ物おごるか。俺も暇だ」

——公立の試験勉強しねえのかよ。

頭の中で、「お前は大人なんだ」と繰り返す声がある。本条先輩が先ににじり戸へ身をかがませた後、健吾は前に突き出されている尻をけとばすかどうか迷った。結局黙ってついていき、大学の学食でとんかつ定食をおごってもらうことにしたのは、自分が「大人」であるかどうかを認めなかったからかもしれなかった。全く関係のない馬鹿話に移っている中、健吾はひたすら、「大人」の二文字にこだわりつづけていた。

——俺は「大人」なのか？

——あの馬鹿男なんかよりも大人なんだよな。

——だったら、やっぱり本条先輩の言う通り、正々堂々というやり方だけじゃ、だめなのか？

ネクタイに手のかかったまま、立村が瞳を揺らしながらつぶやいた言葉が重なっていた。

——最初から勝負はついてたってことか。もう俺の勝ちならば、これからどうすればいいかってことかよ。ガキを相手にするには、どうすればいいか、これから考えねばなんねえのかよ。唯一、「大人」だと思える本条先輩の話を聞きながら。

期末テスト後は授業もかなり手抜きになる。国語の授業では、いきなり臨時のビデオ鑑賞会が行われた。視聴覚教室に移動して、日本名作ドラマ特選集を観ることになった。席にはカセットテープとヘッドホンが付いている。気が散らないように隣りの席が仕切られている。健吾は「二年D組立村上総次期評議委員長」に関する考察に専念することにした。

——「大人」として、あの野郎を観察するやいかにつてか。

本条先輩に言われた通り、「大人」の視線で今までのことを捕らえ直すことは必要だ。自分でもなんとなくわかってはいたけれども、どうしてもできないことばかりだった。直感と噂との差がこれだけ激しい奴も珍しい。立村上総という男は。

学校ですれ違う立村は、うつむいたまま健吾に目を合わせようとしなかった。気付かない振りをしているのかそれどころでないってことだろうか。足早に職員室と図書館を往復している。

巷で噂されている立村に関するいくつかの流言。

本条先輩が言うには、ほとんどが大嘘だという。

その一、立村と清坂先輩の関係について。

「第一なあ、あいつがまず自分で女子を口説けると思うのか？ 健ちゃん」

本条先輩は笑い飛ばした。

「あのおどおどした奴が自分から、清坂ちゃんに告白できるかどうか、まず考えてみるよ。いくら保身のためとはいえ、振られたら一生の恥さらしだぜ。そういうリスクの高いこと、奴がするかよ」

ごもっともごもっとも。

「それに、清坂ちゃんとは仲良かったかもしれねえが、自分の親友と大の仲良しって子をだ。あいつが玉砕覚悟でぶつかってしまえる度胸ないだろうよ。清坂ちゃんが母性本能を発揮して立村を口説いたって方が、自然だろ」

言われてみるとそうかもしれないと思う。本条先輩すごい。

その二、立村ははたして杉浦加奈子先輩をしつこくくどき続け追いかけたのか。

健吾のもらった情報を信じるに、どう考えても黒だった。しかし本条先輩はさらに笑い飛ばした。

「ああ、あれもな。女子たち限定のガセネタだってな。あれはすごいぞ。立村に恨みを持った女子がたまたま、何かの理由で『立村に追い掛け回されてる助けてくれ』って噂を流したってだけだ。清坂ちゃんのこともそうだけどな、なんとなくあいつの場合、好きとか嫌いとかそういう感覚が鈍いみたいでさ、そこまで熱く燃えることがないんだよ。男としてそういうことに疎いってうかなあ。そんな立村がだ、いきなり女子を追い掛け回して付き合いを要求するなんて、そんなこたあ、ねえだろ」

ごもっともだ。本条先輩。さすがである。

本条先輩はもう一度にやっと笑って続けた。

「つまりだな、立村の性格が、人の顔色ばかり覗き込んでびくびくしている奴だからこそ、まずありえないネタばかりなんだ。健ちゃんもわかるだろ？ あいつとしゃべった感じから言って素直に出ると思うか？」

健吾もだから、意外だと思った。

「だろだろ。立村はまずどうしようもなくガキなんだ。女子との付き合い方がわからんし、たぶん清坂ちゃんに引きずりまわされてるだけだろう。それに二年連中だって、自分にメリットの無い奴の言うことなんかきかないだろ。新井林、お前、二年連中の男子から、立村についてはどういう話を聞いている？」

——悪い奴じゃないんだけどな、って前置きつきで。

「そうだろそうだろ。立村はな、相手にとにかく安心させて、それから要求を飲ませるのが天才的にうまいんだ」

——けど、やり方が汚ねえんじゃねえの？

「まあな、奴のやらかしてきたことの中には、停学当然ってこともいくつか混じってるし、そりゃあ、あいつだって自分を守りたいからしたことだってあるだろう。そうだ聞いてたか。立村が小学校時代やらかした事件って。あのかわいそうな番長少年なんだが、決闘したところまでは本当らしい。ただ、それについては素直に退いただけっていうのが本当のところだってな。それをあの彼女っていうか、杉浦って子が話を大きくしたっていうのが、事実だと聞いた。うん、二年D組のとある筋から」

——また本条先輩も騙されてるのかよ。

「いいや違う。俺も騙されるのはやだから全部調べた。本人にも聞き出そうとした。でも、しゃべらねえんだよ。あいつ。しゃべらないで、ただ黙ってるんだ。黙ってるってことはどういうことだ？ それってほんと、って意味だろ？ 嘘でも黙っていたいってことだろ？ ひでえ解釈のされかたでもかまわないってことだろ？」

——そうか。今までのことが全部ほんとだと思われてもいいってことか。

一年B組の中もまた、相変わらずだった。

二年の女子たちが杉本と花森のふたりを休み時間狙って連れ出すのもお約束。一年女子たちが妙な態度で見送る姿。さらにいうなら、ふたりの消えた後のすっきりした空気。この差はなんなのだろう。

「佐賀、大丈夫か」 健吾の声にはるみが振り返った。杉本のいない席をちらっと見やって、「私はもう大丈夫だから。健吾、私は平気」 手の込んだ編み込み髪を軽く触れるようにして、微笑んだ。 はるみをめぐる状況もだんだん凪いでいるようだった。桧山先生がが女子連中にどんなことを言い渡したのかは読めない。ただ、連中が杉本に対して少しずつ距離をおいてきているのはあからさまだった。 杉本が何かを発言しようとする、と、桧山先生は即座にシャットアウトする。

「君が礼儀をわきまえるまでは、一切答えることはしない」

見事である。一度は拍手が沸いた。女子たちが静まりかえった。

「杉本、君がきちんと場をわきまえることのできるようになるまではな」

自然と桧山先生に対する女子たちの接し方は、敬語をきちんと使っている。なんか卑屈な態度が目立つ。男子たちとプロレスネタで和み合っているのに比べて、桧山先生は女子たちに対してのみ、礼儀をきっちりと要求している。

「きちんと、目上に礼儀を守る人間であること」　なんで男子は関係ないのか聞いてみると、「男子たちはきちんと礼儀をわきまえている。はめを外しても、きちんと新井林の号令で礼をしている。気持ちがきちんと入った言葉遣いをしている」

のだそうだ。杉本と花森以外の女子たちは、何かわからないがそれに従っていた。桧山先生の言い分については少々、男尊女卑的においがなくもないが、自分に都合よければそれでいい。健吾は一切かまわずに、シャープを弾いて遊んでいた。

「いったい何があったんだろな。佐賀、桧山先生にいったい何言われた」

「他の女子はみな、『このままいじめをするようだったら、学校側で処分の対象になる』みたいなことを、言われたみたいなの」

「そんなことできんのかよ」

はるみは無視した女子たちについては当然のことだと思うが、そんな処分の方法があるだなんて聞いたことがない。

「私も知らなかったけれど、最悪の場合は退学処分なんですって」

——じゃあ杉本なんてさっさと追い出せるってわけかよ。

「でも、退学まではしなくても、罰がこれから増えていくから覚悟しておけって言われたんですって。私に話し掛けてくる子たちがそう言っていたの」

話し掛けてくる子の個人名をはるみは口にしなかった。

友だちとっていないのだろう。

「健吾、退学なんて、させることできるの？　本当に？」　「知るかよ。そったらこと」　はるみは健吾に寄り添い、ふうっとネクタイの襟元へ息を吹きかけた。

「私、いじめられてたのかしら」

「あたりまえだろ！　無視は十分そういうもんだ」

「別に、私、そんなの気にしてないのに」

いらいらしてくる。怒鳴りたくなる。

「私、クラスの人たちのことを、かわいそうだと思っているだけなのにね」

「俺だけは違うよな」

振り返って健吾は尋ねた。答えの代わりにはるみは瞬間、健吾の手首を握り締めすぐに離れた。

休み時間そろそろ終りか。ちょうど再接近した健吾の側を、杉本がひとりで通り過ぎていった。一瞥のみ投げて自分の席に戻った。全く、表情を変えないまま。

二時間目の体育が終り、グラウンドから帰って来た健吾が玄関で靴を履き替えていた時、立

村に呼び止められた。

顔色は相変わらず真っ白け。目の周りにはくま。

相当、消耗しているに違いない。ドリンク剤を飲めといたかった。あえて返事せずに黙って立ち止まった。

「あのさ、新井林」

「なんか用っすか」

避けていたのは向こうさまなのだから、健吾にはなんの引け目もない。

ただ、本条先輩の「大人として」という言葉に敬意を評し、「ですます」体を使うことにした。

「この前は、悪かった」

「別にあやまってもらうようなことはないけど」

「もう一度だけ、頼みたいんだ。図書室に来てもらえないか」

時計を覗き込んだ。デジタルウォッチの蛍光色が緑に光った。

「練習これ以上さぼりたくねえけど」「昼休みでいい」

茶室の裏で泣きそうな目をしてすがったあのまなざしとは違う。

なにか、覚悟の上で切り出した、そんな顔だった。

——本条先輩に縁切られたのがそうとう答えてるのか。こいつ。

——俺は「大人」だ。こいつよりもはるかに。

——だったら、どうする？

咽元から飛び出してきたように感じるガキっぽい本音を飲み込んだ。健吾は五秒数えた後、ゆっくりと答えた。

「わかりました。すぐに図書館で」

「二人がけの椅子で待っているから」

心なしか、お辞儀をした風に見えた。立村はもう一度健吾を見つめ返して、背を向けた。二階の教室に戻っていったのだろう。階段を駆け足で上がる音が聞こえた。

たぶん本条先輩に「もし新井林の納得する案を出せなければ、縁を切る」と言い渡されてしまったのが堪えているのだろう。なにせ「本条・立村ホモ説」を謳われるほどの仲良しだったのだから。一方的に振られたようなものだろう。健吾からすると、単なる痴話げんかにしか見えないが。ただそこらへんが立村のガキたるゆえんで、真っ正直に落ち込んだんだろう。影で本条先輩が、懸命にかばっていたのを知らずに。

——けっ、だからそういうところがこいつガキなんだよ。

健吾はポケットに時計を外してしまいこんだ。どうも腕にかかっていると重たくていららする。ドリブルする時に腕がだめになるんでないかと心配だ。

——俺は大人だ。あんたの言い分、まずは本条先輩の言う通り、「大人」の目と耳で聞いてやるさ。

約束は昼休みだった。給食をさっさと腹に押しこんだ。育ち盛りは腹がすくのだ。はるみにだけ目配せした後、健吾は廊下に出た。「青潟大学附属中学スポーツ新聞」の最新号がすでに公開されている。全部バックナンバーにしようという声も上がっているのだから、とりあえずはるみに持ち帰らせている。

——冬休み、それぞれの部活の予定および合宿関係について。

冬になるとなかなかネタもなくなるので、健吾の案にて冬休み中の合宿日程をずらっと書き並べた。

結構評判がいいらしい。来年こそは、「青大附中バスケ部勝利！」の知らせを書き込みたいものだ。その時は特別バージョンの用紙を使うことにしようと思つた健吾は決めた。

三階の図書館に向かい、すぐに扉を開いた。

図書局員たちがカウンターでなにやらアニメ関係の話題で盛り上がっている。いかにも試験期間終了といった雰囲気だった。あと一週間もしないうちに冬休みだ。入り口からも氷柱が長く長くぶら下がっているのが見える。健吾は氷柱を背負った格好で席に付いている立村に近づいた。背中の書籍棚に並んでいるのは、誰も読まないような古臭い道徳児童書みたいなものばかりだった。暗かった。

「すまない。無理言ったな」

「なんか」

難しい。やはりいきなり立村に対して「敬語」を使うのはしんどい。

目の前の立村は静かな佇まいのまま立ち上がった。相変わらず乱れひとつない格好だった。健吾を見つめる目は、茶室の陰でネクタイを掴んできたあの時よりもおとなしかった。潤みもない。それ以上のものは見出せなかった。

「ここでは人がいる。向こうに行こう」

指差したのは、百科事典の居並ぶ一隅だった。窓側はめいっぱい光の入る形だが、置かれているのはかなり昔の百科事典一式と、旧かなづかいの背表紙の本だけだった。たぶん、過去三年くらいは誰も棚をいじってないに違いない。そこには高いところから本を取るための脚立が一台置かれていた。立村は脚立の踏み台に手をかけ、健吾が来るのを待っていた。

——大人からみてこいつはどう見えるのかってか。

淋しそうな奴だ。立村はブレザーのポケットから、黒い手帳を取り出した。下のところに金で型押しされているものだった。かなり使い込まれているだけあって、光沢が鈍かった。開いて後、唇をかみ締めるようにして目を落とした。そのままゆっくりと健吾に向き直った。

「今回のことは、俺が一方向的に新井林へ迷惑をかけたようなものだ。すまなかった」

頭を下げず、しっかりと瞳を見つめてきた。

「いくつかのことについてできることはみな片をつけておいた」

「片ってなにを」

するんですか、と丁寧語は使えず、言葉を切った。立村の声は細かったけれどはっきり聞こえた。

「たぶん、桧山先生がそのことは、すると思う。それに任せておけばすべてが終わるだろう。そして新井林、お前が俺について聞いてきたことはすべて本当のことだ。先輩と思えないのも当然だ。だからせめて俺のできることだけ、こちらにまとめておいた。俺がお前に提供できるのはこのくらいだから」

手帳から一ページ、丁寧に破り取り、健吾に差し出した。

受け取った。ミシン目のところが全く破れていない。毛筆の文字みたいな、上品な筆跡が並んでいた。

一 青大附中内の委員会と部活動の関わりについて

評議委員会……演劇関連と学外渉外関連（来年以降の予定）

規律委員会……美術関係および写真関係（青大附中ファッション通信の発行など年四回）

音楽委員会……文字通り音楽関係。音楽関連の大学を目指す人向け。

保健委員会……医療関係および病院関係、また医学部を目指す人の溜まり場

体育委員会……体育系部活動関連を一通り網羅。

学習委員会……文芸部と理科系の部活動を兼ねる。

その他、文集委員会、美化委員会、図書局、放送局など。

生徒会は主に渉外活動中心だが、来年以降は評議委員会にも渉外関係の活動を求める予定。

「委員会最優先主義」の内訳が、健吾もわかっているようでわからなかった。評議委員会の連中がやたらとステージもの好きだというのは辟易していたけれども、他の委員会も相当深いことをしているとは思わなかった。特に規律委員会については、次期委員長の南雲先輩がかなり女子人気ありということしか聞いていなかった。単に制服の違反チェックをする集団ではなかったらしい。

「これってどういう」

ことですか、とはつなげられず、また言葉を切った。

立村は健吾の手元で揺れている紙を見つめながら続けた。

「現在の青大附中委員会活動の流れみたいなのをまとめておいた。これからの参考にしてくれないか」

「これからの参考って、いったい」

いいたいことがわからない。

「来年以降は俺が評議委員会を仕切ることになるが、たぶん学校内よりも学校外の活動が中心になると思うんだ。これにも書いたけれど、生徒会と一緒に他の公立中学との交流会を活発に行おうとか、それこそ部活動との兼ね合いも考えようとか、いろいろな案が今出ているところで、俺もちょうど検討してたところなんだ。新井林、今作っている『青大附属スポーツ新聞』のことなんだが、お前ひとりで続けていくのは正直なところ、かなり困難だと思う」

——あんたとは違うぜ、何考えてるんだあほんだら。

いかん、大人の意識。引っ張り出す。

「この紙にある通り、体育系の部活動については体育委員会がかなり詳しい。お前が駈けずりまわって探しまくる情報を、早い段階で手に入れていることが多いらしいんだ。俺も知らないけど。それから写真なども規律委員会にかなりプロはだしの奴がいると聞いた。あそこは実質美術関係についてなら逸材のてんこもりだからかなり面白い面子が揃っているはずだ。それから音楽委員会。合唱コンクールの時くらいしか出番がないと言われているけれど、暇な時にはバンドとかコンサートとか、いろいろ練習していると聞いたことがあるんだ。臨時吹奏楽みたいなこともやりたいと話していたのを聞いたことあるんだ。だから、もし応援などでそういうのが必要だったら、音楽委員の誰かに声をかけてみるといいかもしれない」

よどみなく立村は述べ立てた。最後に、

「あとで次期委員長の名前とクラスもこちらで用意して渡すから」

「なんで、俺に？」

さっぱりわけがわからない。今聞いた感じだと、立村のしゃべったことはかなりのトップシークレットなはずだ。そう簡単に、一年坊主にしゃべりまくることではないような気がする。しかも、各委員会の次期委員長関連もとなると。いったい立村は何を言いたいのだろう？ 一時は殴らせろとまで言い放った相手に対してだ。

「なんでそんなこと俺に言うんですか？」

立村は手帳を閉じ、もう一度健吾を真面目に見つめた。

「再来年の評議委員長は、新井林、君を指名したいからだ」

自分の口がぼかんと開いていくのがわかる。

——あんた、今、なんて言った？

立村の表情は変わらない。様子を伺っている風にじっと覗き込んでいる。

「評議委員長、って、君っていったい」

「今の一年の中で評議委員長としてふさわしいのは新井林だけだと判断したってことだ」

「けど、あんたそれでいいのかよ！」

激するものが確かにある。開いた口を急いで閉めた。もういちど「ああ？」とつぶやき、健吾は立村に一步近づいた。さすがに図書館、音声は低いけれど、腹からどすは利かせて。

「あんた俺を嫌ってるだろ、あんた俺を殴りたかったんだろ。俺よりもあの女の方を本当は気に入ってるんだろ。なんでだよ、今度はそれでだまし討ちしたいってのかよ」

「違うよ。新井林。俺の判断で、杉本よりも君の方が評議委員長としてふさわしいと思った、それだけだ」

おびえずかすかなやわらぎとともに立村は答えた。おとなしいまなざしと共に。

後ろの窓から伸びた氷柱に雪が降りかかるのが見えた。立村の表情だけが、それを溶かすかのように温かみをもってるように見えた。茶室の裏で見たような、凍るまなざしではなかった。

「まだ俺も正式な評議委員長として任命されてないし、来年果たして評議委員が元のままかどうかもわからない。状況はかなり揺れ動いてる。でも新井林を俺の次にしたいってことははっきりしている。君なら一年連中をまとめるだけの力を持っているし、俺なんかと違って女子受けも

いい。新しいことをどんどん切り開いていくだけの能力もあると、俺は思っている。それに」
言葉を切って、健吾の手元にある紙を指差した。

「来年以降、俺としては評議委員会を学内だけではなくて外に出して活動させる方向を取りたいんだ。できれば生徒会とか部活動とかともうまく繋がっていける形にしたい。本条先輩のように強引なくらいひっぱっていきだけの力が俺にはないから、これまで通りのやり方では評議委員会を持たないと思う。学内関係は部活動と一緒に協力して、人数集めて盛り上がっていく方がいいんじゃないかって、前から思っていた。新井林の企画した「青大附中スポーツ新聞」は、いいタイミングだったし、俺も全面協力したい気持ちはある」

——なんでいきなりひとりで語るんだよ。あんた。

妙だ。立村にしる本条先輩にしる、どうしていきなり健吾のご機嫌を取ろうとするのだろう。いつもの健吾だったら、すぐに噛み付いてやっただろう。でも、あえて大人モードで話を聞いている以上、黙るしかない。抑え抑えて健吾は立村の渡した紙きれを見つめた。

「来年二年に入ってからぜひ、新井林には学内の委員会と部活との繋ぎ役をぜひやってほしいんだ。もちろん部活のからみもあるだろうし、決して無理強いはしない。評議委員会は二の次でかまわない。新井林の代になったら部活動より評議委員会を下ろしてかまわない。できれば部活動も評議委員会も生徒会も全部取り混ぜた感じで活動したいと思っている。適任だと思う新井林、君にすべてを任せたいんだ」

——なんでだよ、なんでだって。情けなさ過ぎる。動揺している。頭の中がぱにくってる。

言葉が出てこなくて唇が震えている。評議委員長任命の内定は夏休みの評議委員会合宿で行われると聞いたが、まさかこの場所ででてくるとは思わなかった。それに立村のお気に入りたる杉本をなんで外したのか？ 保身なのか、なんなのか。本条先輩の話していた立村の像がいきなり重なってきて、わけがわからない。

——いつのまにかこいつに取り込まれるって、このことかよ。

大人の目で、大人の視線で、大人の考えで。

やっと、大人の言葉が流れ出た。「君」に健吾の二人称が変わった段階で。

「最初は杉本を指名するつもりだったって、それがどうしてだよ」

「半年以上それぞれの性格を考えて、決めたからだ。俺なりに判断したってところだ」

「俺はあんたに相当ひでえこと言ったけど、そんな恨みも捨ててかよ」

「新井林の言うことは、すべて本当のことだ。ただふたつだけ頼みがあるんだ」

健吾は振り返って立村の言葉を待った。

「たぶん、このことが判明したら、杉本は冷静ではいられないだろうと思う。俺もかなり気を持たせる言い方ばかりしてきたから、当然だと思う。もしかしたらまた新井林や佐賀さんに、辛い思いをさせるかもしれない」「そうだな。確かにな。あんた正しいよ」

逆恨みはあの女の特許だ。背がぴんと伸びる。

「桧山先生もあの調子だと手加減をしないだろう。先生たちのやり方には口出しできない。俺も一年のことについては、今のやり方が限界だ。だからせめて、お願いだ。杉本が一年B組に卒業

までいられるよう、せめていじめられないようにしてやってもらえないか。仲良くしてくれなんて言わない。ただ、男子連中が無視するだけでいい。存在しないものだと思うだけでいい。手出しだけはしないでほしい、それだけなんだ」

「俺たちにそんなことできるってか」

「今、新井林が一年の野郎連中に対して『杉本に一切手を出すな』っていうあれだ。三年間、有効にしてやってほしい。無視される辛さとか惨めさを味あわせるなどとは言わない。ただ、実力行使だけはやめさせてほしいんだ。今、近所では杉本の家を村八分にするような運動が起こっているとも聞いている。もう完全に杉本は制裁を受けているんだ。自分がおかしいんだということをいやというほど言われつづけているんだ」

「じゃあ反省しろって言いてえな。第一あんた、どうしてそこまであの女をかばうんだよ」

立村は臆することなく、答えた。

「俺が杉本について言ったことはみな、俺が毎日感じてることばかりなんだ」

すべてが繋がった。ずっと感じていて、でも口にできなかったことがやっと理解できた。

——同じ穴のむじなってことを認めたってわけかよ、あんた。

立村は健吾の隣りに並んでいる、埃臭い本棚を指差した。

「今棚に並んでいる本、これを数えてもらえるか？」

「はあ？」

ざっと目で追って数え終わった。二十冊。

「早いな」

「あたりめえだろ」

次に立村は、指で一冊一冊、題名を抑えながら何かをつぶやき始めた。

「いち、にい、さん、しい……ええと四、五、六……」

実にまどろっこしかった。なんとか二十冊まで言ったところで、

「十九冊じゃなかったよな？」

「何考えてるんだよ。二十冊に決まってるだろ」

なんと自分で「にじゅう」と言ったのを忘れてる。度忘れか。

もう一度目で追って確認した。立村もまた指で押えながら数えていた。今度は無事二十冊にたどり着いたようだった。埃で灰色になった指を見つめていた。

「俺はものを数えることが苦手というより、どうしても普通にできないんだ。途中でかならず数字が違ってしまふ。遠足の時の整列でも、点呼を取る時に一度も数字が合わさったことがない。だから点呼はいつも、人の肩に手を置いて、どこまで数えたかを忘れないよう口で言いながら数えている」

「それでも自分で言った数字を忘れるってなんだよ」

「そういうことなんだ。いくら自分ひとりでやろうとしても、うまくいかない。普通に数えて普通にあわせようとしても、どうやればいいかが、俺はわからないまま今まで来た。だから杉本が、新井林たちの感じる普通というものがわかんないのも、なんとなく俺には通じるんだ」

「けっ。それが言い訳だってんだ」

「その通りだと思う。自分がおかしいから、自分の感じ方が普通じゃないからといって言い訳するのは、きちんとした感じ方をする人たちに迷惑だって俺も思う。だから、毎日どうすれば、周りの人たちの迷惑にならないか、どうすればいいかを考えてる。勘違いばかりしてるし、毎日数え間違いを繰り返しているけれど、そうしないと受け入れてもらえないとわかっているから、なんとかしようと思っている。けど」

もう一度、立村は指を本棚に置いたまま、背を眺めた。

「きっと杉本も同じなんだって、思うんだ。どんなに数えても二十冊にならない理由がわからないんだ。きっと杉本は、新井林とふつうの話をしてみたかったんだろう。佐賀さんとずっと友だちでいたかったんだろう。でも、どうすればいいのかが今だにわからないんだと思う。他の人たちに迷惑をかけている以上、杉本が制裁を受けるのは当然のことだろう。それをするなどとは言えない。ただ少しだけでいい、杉本に情けかけてやってもらえないか？」

「情け？」

「俺のような数え方をする奴と新井林たちとは、勝負付けが終わっているんだから」

向き直り頭を垂れた。動かなかった。

健吾の中に何か動いた。

——勝負はもうついているだろう。

ずっと立村と言い合いを続けてきた。殴られて当然のことをぶつけてきた。先輩としてどうして腕力勝負に出ないのかいらいらしていた。いったいこんな馬鹿鹿野郎のどこがよくて、みんな立村を高い評価するのかがわからなかった。本条先輩の話でだいぶ見方が変わったとはいえども、どうしてみんなは立村の言うことを素直に聞くのか理解できなかった。

——退学も辞さない性格、か。

すべての感情を「大人」モードに切り替えてみて、初めて見えたものがある。

立村は今、すべてを失うかわからない足場のもと、物を言っている。

いくら腕力的に劣っているとはいえ、後輩に対して頭を下げ、罵り文句を受け止め、再来年以降の評議委員長の座まで用意しようとする。そこまでしてなぜ、あの女をかばおうとするのだろう。受け入れてもらう努力もしないでずうずうしく迷惑をかけるあの女を。立村が何度も訴えた言葉が蘇る。

——どんなに感じようとしたって感じられないんだ。どんなに受け入れてもらおうとしても、そのやり方がわからないんだ。普通の人たちがどうすれば喜んでもらえるか、わかろうとしたって、わからないんだ。だから、自分の感じたことを必死に訴えるしかないんだ。

健吾の返した言葉を思い出す。

——じゃあ、あんた、普通の人間に迷惑かけるなよ。努力しろよ。けど、あんたは。

立村の目を見た。指の埃を見つめた。

——こいつは、努力してるじゃねえか。十分に。

敬語が混じらない。ただけんか腰にならないように気をつけた。立村にあわせて静かに。混乱していたあの言葉をすべて吐き出すかのように。

「あんた、前から言ってたよな。杉本は精一杯なんだってな。必死に努力して、懸命に俺や佐賀と仲良くしたいから、ああいう嫌がらせをするってな。俺としたらたまったもんじゃねえが、やっとわかったよ。あんたも同じことしてたってことだよな。がむしゃらに俺たちと近づきたかったってことだよな。本条先輩や清坂先輩や羽飛先輩とうまくやりたかったってことだよな」

立村は黙っていた。そのまま続けるように促すまなざしのまま。

「それがあんたの保身のせいだって、この前までは思ってた。ああ、俺もガキだった。噂を鵜呑みにしてたからな。けど、本条先輩から話を聞いて、あらためて今までのことを考えなおしてみても、あんたもまんざら馬鹿じゃないし、頭切れるしって思った。俺を評議委員長にしたいというのが本心だったというんなら、俺もあんたを見直したいって思ってる。少なくともあれだけ俺が言いたいことを言っておいて、うらんでないっていうんならな。けど、俺ももうひとつだけ言わせてもらってんだ。あんたはな」

横目で人影がないのを確かめた。

「人並み以上に、俺たちに受け入れられようとして、努力してるじゃねえか。あの馬鹿女と同じ気持ちを持ってるかもしれないかもしれんけど、本条先輩にも、清坂先輩にも、羽飛先輩にもちゃんと受け入れてもらってるじゃねえか。青大附属の評議委員会にも、二年の連中にも、みんなにさ」

つぶやきながら、立村の後ろに見える氷柱に語りかけた。

「そういう努力をしてくれる女だったら、俺も杉本を許せたかもしれねえ」

視線を逸らさない立村に、もう一度健吾は言い放った。

「けど、あの女は一切近寄ろうって努力のかけらも見せねえ。佐賀に謝る気もなければ、さんざん悪口言われて塩かけられている親のこと考えて頭を下げようとしねえ。どんなにあんたが一生懸命杉本のために走り回っても、ほら、一切あんたを無視したままだろ？ あんたが頭にどうい問題抱えているか知らねえけど、あの女はあんたをかばうどころか自分の武器にして桧山先生を責めたんだぜ。あんた、杉本のどこが気に入ってかばいまくってるんだよ。あの女の性格が悪いことを、わかっていてなんでだよ。俺が徹底してむかつくのは、自分が他の奴と違うことを正当化して押しまくる奴であって、受け入れられる努力をしている人間じゃあないんだ」

はっと、立村の目に揺れが見えた。

「評議委員長のどうたらこうたらはまだ先のことだよな。だから、今の話は後回しにしとく。けど、これだけは言っとく。あんた、自分で思ってるほど馬鹿じゃねえし、俺が今まで言い放ったような最低馬鹿野郎ではないってな。立村さん」

ちょうど鐘が鳴った。健吾は明らかに震え上がった表情の立村を取り残し、図書室を引き上げた。

勝負は、ついた。

世の中みんなガキばかりってことだ。健吾が青大附中で得た真理とはそれである。ここは一部の出来た大人を除いては、みなおしゃぶり加えてばぶばぶ言っているか、水色のスモッグを羽織って走り回っている幼児に過ぎない。その中で一步でも早く、大人になるためには、気付かなくてはだめだってことだ。ガキがガキでいることのくだらなさ、情けなさを鏡を見て、きゃあと尻尾巻いて逃げだなくてはならないってことだ。

立村との話し合いが、結局健吾の優勢勝ちで終わったのをきっかけに、ゆっくりと風車が回り出したような気がする。それまではずっと健吾がひとりで立村を罵りつづけていたのだけれども、あえて自分を「ガキ」だと自覚したのか、わざわざ自分から風を起こしてくれるようになった、というのか。

——俺が、評議委員長か。

立村ももちろん、平常心ではなかったに違いない。健吾があえて「立村さん」と呼びかけた時、明らかに動揺していた。ちょうど鐘が鳴ったから、それ以上の展開はなかったけれども、でも確かに健吾は立村を見下ろすことができたと思う。軽蔑の気持ちなく、ただ、懸命に涙ながら訴える幼稚園児を見下ろす、保父さんのように。

蹴りを入れずに見下ろすことは、気持ちいい。

怒鳴らずに、あっさりと許してやることは、楽だ。

図書室を出て行ったと同時に、健吾の周りで別の風車が回り始めたことに気付くのはすぐそこだった。英語の授業は松山先生だった。ほとんど授業はぬるま湯状態だった。予習も手抜きのみだった。

「起立、礼、着席」

健吾の号令で、みなだらだらと一礼をする。視線が健吾に刺さるので、顔を上げてみる。松山先生がじいっと健吾に笑み含みのまなざしを送っていた。

「なんっすか」

「まあいい。とりあえず、B組は一通り授業も消化しているし、今日は臨時のホームルームと行こうか。本当は終業式に一発かますかと思ったんだが、やはり二十四日はみな、予定があるだろうしな」

ふたたび健吾に意味ありげな視線を送る。そんなの知らないと言いたい。ご自分の方こそ、二十四の男らしく、なにかあるのだろうか。

杉本の方をうかがうと、相変わらず直角に座り、まっすぐ顔を上げていた。

口をしっかりと結び、一点を見つめていた。今度は杉本を一瞥した後、松山先生は軽く腕を回し始めた。

「まだ先のことなんだが、来年、四月以降の委員選出方法について、みんなから意見をもらいた

いんだ」

切り出した。少しざわめく。健吾もぴんとこない。

「青大附中の伝統として、今までは一年時に決まった委員で三年間通すという方法が、どのクラスも取られていると思う。もちろん三年間持ち上がりなんだからそれも一つの方法だろうな。みんなが同じ目的で一生懸命やるのだったら俺も反対はしない。あくまでも、順調に行っていれば、の話だが」

——順調に行っていれば、な。

まだ繋がらない。ちらちらと健吾の気をそらさないよう顔を向ける楢山先生。

「だが、みんなも知っている通り、この一年B組では委員会制度というのが、あまりよい方向に進んではいないのではないかと、という気がする。少なくとも、俺がこのクラスを一目見た時から、それを強く感じていた」

背中越しに男子連中の、「一部、だけな」とささやく声が聞こえる。だんだん反応が男子女子共にささやきで流れてきている。

「その原因はなんなんだろう、と、闘病中の溝口先生や、他の先生たち、そしてクラスのみみんなに少しずつ意見を聞いていったんだ。そしてやっと原因が判明したというわけだ。遅くなってしまったのが本当に申しわけない」

「その、原因とは！」

大向こう、一声掛かる。調子いい男子だ。

歌舞伎役者のように一度両腕を広げ、見得のポーズを取りおどけた。楢山先生はすぐに正面に向かい、呼吸を整えるようなしぐさをした。

「杉本、立ちたまえ」

「何か理由があるのですか」

座ったまま杉本は、姿勢を崩さずに答えた。

「恥ずかしいのかな、僕の言葉を聞くのが」

「恥をさらさせるような話し方でしか対処できない人間と話す必要があるのでしょうか」

「君はまず黙って僕の話聞き、その後言いたいことを話す時に立ち上がりたまえ」

静まり返った教室。呼吸ひとつ、鼻をすする音ひとつ、響きが跳ね返りそうだった。健吾は悟った。

——勝負をかけたか、楢山先生。

観客になるべく、健吾は耳を済ませた。

「このクラスに、女子中心のいじめがあったという事実は、男子の諸君から何度も忠告を受けている。ただ、噂だけを信じるわけにはいけないので僕は、毎日のようにみんなの様子を観察していた。三日くらいで原因は杉本が女子を扇動して、佐賀を無視しているということが明らかになったというわけだ」

——そんなにかかったのかよ。先生。

心の中でつつこみを入れる。

「しかし、いじめられている佐賀を呼び出しても、本当のことを言わない。それどころか、口癖のように『杉本さんはかわいそうだから』の一点張りだ。友だち 同士の行き違いに口出しをしたくない。よくあることだ。だが、なぜクラスの女子たちまでもが、佐賀に話しかけないのか、それが不思議でならなかったんだ」

桧山先生は杉本以外の女子たちをじろっと眺めた。男子に向けたものとは違う、冷たい視線だった。

「女子全員、起立」

恐る恐る動く女子たちの椅子の音。響き渡った。健吾が見る限り、ひとりだけ座ったままの女子がいる。当然、あの不良女、花森のみ。

「何度か女子たちにも集まってもらい、意見を聞かせてもらった。やはり、ひとりひとは佐賀に対して申しわけないと思っているし、さらにこのままではいけないと意識もしているようだ。反省することができるのは、まだ自浄作用が働いている証拠だ。反省しているか」

何も言わない。手を動かしているもの、うなだれているもの、ぼおっと聞いているもの、いろいろだ。どう考えても全員が反省しているとは思えない。

「答えられないということは、反省してないということだな。反省しているならはい、と言いたまえ。もう一度チャンスを与える。佐賀を無視したことを、反省しているか」

かすかに、「はい」の声が角々から聞こえた。

「声が小さい」

「はい」

くぐもった声と、途中涙声あり。全員とは思えないが、一通り多数決で行くとなんとかかなりそうな数だった。

「口先だけなら何でもいえるが、このまま立ったまま聞きたまえ」

明らかに信用していない顔で桧山先生は続けた。はるみがなぜか立っていることに気付いたのか、

「佐賀、君は座っていいよ」

おずおず、椅子を引いて杉本に振り返った。困りきったという顔だった。一切無視して一点集中している杉本は、動かなかった。

「どういう理由があるにせよ、いじめは許されない行為だ。男子一同もその点についてはみな賛同してくれた。一学期から、何度も杉本に対して佐賀をいじめるのをやめるよう抗議をしていたのも知っている。少々荒っぽいやり方だったらしいが、常識が通じないものにはそうそう簡単に言葉を通じさせることはできないのだから」

今度は両手を組んだ。桧山先生、結構役者だ。

「本当だったら正義感が行き過ぎて、杉本をさらに叩きのめそうとする疎きもあったと聞く。それをあえて押さえたのが、新井林、君だな」

——いきなり当てるなよ。

女子の一部が声を上げて泣き出した。泣けばすむと思っている奴らだ。

「杉本に反省させようという努力を、新井林は懸命にしていた。男子連中もそれはよく見ていた

と思う。もちろん女子も気付かないでいたわけではないだろう。でも心が弱すぎて醜い自分を反省することができなかった。そういうことだ。そしてまだ、自分を見つめられず反省できない人がいる」

杉本と桧山先生、目が合った。一切逸らそうとしない杉本を、桧山先生はそりかえったまま見下ろした。

「杉本、君はずっといじめられていたと勘違いしていたようだが、周りは一生懸命に君の間違った行動をやめさせようとしていただけだ。理由については問わない。しかし、佐賀が懸命に杉本のことを許してやってほしいと頼んで、君と友だちでいたいと言い続けているのに、一切それを受け入れようとしなないのはどうしてだろう。仮に佐賀になんらかの非があったとしてもだ。頭を下げられたら当然、心の広い人なら許してあげようとするだろう。佐賀のように、君に何をされてもがまんして、小学校時代の仲良しだった杉本を許そうとしているんだ」

「関係ありません」

一言返すだけだった。

「君はそうされたことがあるか」

「すべての男という生物にされてきたことが答えにはなりませんでしょうか」

不謹慎にも噴出す奴。気持ちはわかる。

「君はその男子たちに何をしてきたかな。君は男子たちに何を言ってきたかな。男子は馬鹿ばかり。男子は頭がおかしい。男子たちは常識がない。確かに君に悪口を叩いていた男子が多かったのは事実だ。しかし、そうするきっかけを作ってしまったのは、杉本、君の方がほとんどではないかな」

「私にしたことはいじめではないということを知りたいのですね」

言葉は一切揺らがない。

「本来、いじめはどういう理由があろうと許されないことだ。だが、君は自分が感じている以上に男子たちに対し、何を言ってきたかを考えるべきだ。君のされてきたと思っていること以上に、ほかの人たちは迷惑をかけられているということだ。ふつう『嫌い』といわれたら辛いだろう。ふつう『死ぬ』といわれたら哀しいだろう。ふつう『不細工』『デブ』とか言われたら気にしている人は絶望するだろう。自分がそう言われたら、と想像したことはないのかな」

「想像するまでもなく、そう言われ続けてきたのでよくわかりますが、私はなんとも思いません。言うべき相手に真実を伝えるだけであり、人を傷つけてまでする必要はないと思います。事実、女性にはそういうことを言う必要のない人ばかりですので、私は一言も言いません。私を罵る人々がどういう人間かを伝えるために言うだけです」

「ふ、子どもだな」

ひとりごとのようにつぶやいた。桧山先生の口元がだんだんほころびてくる。奇妙な笑みだった。目が笑っていない。鬼のようなまなざしだった。

「中学に入学する時に、僕は君たちを大人扱いしたいと思ってきた。青大附属の校訓は『紳士であれ、淑女であれ』だからな。どの先生たちも、多少君たちのやんちゃぶりには目をつぶってでも、大人として扱ってやりたかった。だが、杉本、君はそれを裏切ったんだよ。わかるかな」

「勝手に決め付けられるのは迷惑です」

「そうだな。僕たちは、君がしていることを見て、判断することしかできない。杉本が佐賀にしていることはあきらかに、『いじめ』だ。懸命に仲良くしようとしている佐賀を、クラスの女子たちを利用して無視するという、人間として最も恥ずべき行為だ。そして」

ゆっくりと前かがみになり、杉本を覗き込んだ。

「君は現在、評議委員だ。評議委員とは、クラスの代表であると同時に、クラスのみんなをまとめる仕事を任せられている。決して、委員会の中で演劇ごっこをしたり、派手な音楽を鳴らしてうっとりしている『部活』ではないはずだ。本当は、上下関係がはっきりした、部活動をするべきだったのではないかなと、僕はずっと思っていた。どうだろう」

「評議委員として選ばれたのですから当然のことです。私が立候補したわけではありません」

「そうだね。君は一年の最初、入試成績トップで入学した。成績のいい人は、きっと人望があるだろうという思い込みの信頼を受けて選ばれたはずだ。だが、今の君はいじめの頭取としてすましかえっている。君はどうしても『いじめ』だと思えないようだが、ふつうの人たち、一年B組の人たち、先生たち、みな君のしていることを『してはならないこと』だと思っているんだ。わかるかな。やってはいけないこと、なんだ」

「幼稚園児に話しかけるような言葉遣いは失礼です」「そう言わないと、『理解』できないだろうか？」

初めて杉本の目がきつと見開かれた。

——ガキがガキと言われて反応したってか。

手ごたえあり。さらに口のしつけ糸をほどきつつ桧山先生は笑顔を振り撒いた。

「杉本、家ではわがままがいくらでも通じたようだけれども、ここは学校だ。そしてここは青大附中だ。ふつうの感じ方をするふつうの人たちがたくさんいるんだ。もちろん君がしていることを『いじめ』だと思えないのだったらそれはしかたない。君がそう感じざるを得ないんだから。でもな、そういう感じ方をする人は、佐賀を始めとしたふつうの感じ方をする人に、どれだけ迷惑をかけているか、あらためて考えなくてはならないんだ」

「ふつうの感じ方？ まるで私が頭がおかしいという言い方をするのですね」

「おかしいとは言っていないよ。ふつうの人は、佐賀が君に無視されてどれだけ辛い思いをしてきたか、想像することができるんだ。しかし、君にはその力が無い。そう思うだろうと、考えることすらしない。もちろん普通の感じ方ができないのならば、それは仕方ない。君の問題だ。君がこれからいっぱい怒られて、傷ついて、覚えていかななくてはならないことだ。君が大人になるためにはそれは当然のことだ」

大きく息を吸い、夜叉化した桧山先生は目を吊り上げて笑った。

「だが、君が普通の人への思いやりをマスターするまで、佐賀がいじめられていていい理由はない。そのために杉本、君はもっと人への思いやりを勉強してほしい。人がどう感じて、どう考えるか。そして自分がどれだけ普通ではない感じ方をして、迷惑をかけつづけているか。それを勉強するために、ひとつ提案をしたい」

「提案とは」

ふたたび無表情に戻った。

「来年、杉本を女子保健委員にしたいと思う」

——ちょっと待てよ、松山先生。評議外れるのは万歳三唱だけだな。保健委員だっているんだぞ、うちには！

現在保健委員の男女が顔を合わせ、すぐに女子、男子同士でささやきはじめた。立ちんぼうの女子たちも目を光らせ、いきなり杉本に視線を集中させていた。杉本だけが落ち着いたまま見据えていた。

「では、評議委員は」

「クラスのみinnであらためて、冷静に誰がふさわしいかを考えてもらう。成績ではなく、人格として誰が一年B組をまとめるのにふさわしいかを、三ヶ月かけてクラス全員に考えてもらいたい。しかし、その際に杉本の選択肢はなしだ。君が学ぶべきは、クラスを率いることではなく、もっと人と触れ合うことだ。怪我をしたり具合が悪くなった人を連れて行くときに、どうしたらいいのか、どうしたら楽になれるのかを勉強するのに、保健委員が一番ふさわしいものだと思う。自分以上に他人がどう感じているか、自分よりも傷ついている人がたくさんいること学ぶためにもだ。女子保健委員をやっている人には申しわけないけれども、あえてお願いしたい。杉本を保健委員に回してやってくれ」

女子保健委員がこっくり頷いた。

——保健委員って、確か医者か看護婦になりたい人にお勧めコースってやつじゃねえか。おいおい、未練ねえのかよ。

健吾が男子保健委員の顔を探すと、露骨におえっと吐き気をこらえる真似をしている。先生も気付いたらしいが、注意しなかった。

「本来委員は、クラス全員によって選出されるべきものであり、教師が決め付けることについては何かおかしいのではないのでしょうか」

「本来ならそうだ。しかし今回は緊急事態だ」

切り捨てた。

「委員会活動というのは、本来教育の一環として、君たちが勉強するきっかけを作る場所であり、部活とは異なることを意識してほしい。今、青大附中の委員会 はほとんどが部活動と重なってしまっている。一度委員が決まったあと、ずっと同じというデメリットも持っている。今回のように、明らかに委員としてふさわしくない人間が出てきたら、当然それは変更するべきだ。それは、担任として当然の処置だ。文句あるかな、杉本」

「あります。はたして誰が賛成しますでしょうか」

とうとうとどめだ。もう笑顔とにらみとがドレッシング状態だ。

「今、ここで、決を採ってもいいんだよ」

「どうぞ自由に」

杉本は一切かかわりなしといった風に、じっとにらみつづけていた。はるみがなんだか貧乏揺すりをして振り返る。まだ心配しているのだろうか。いい気なもんだ。

——だから無視してろって言うんだ。お前の勝ちが決まりかけてるってのに。

健吾がにらみつけようとしたとたん、はるみの右手がするんとあがった。

「お、どうした佐賀」

「あの、いいですか」

頷く楡山先生に、はるみは正面から見つめ返した。いつも見ているはるみの、おびえた表情とは違った。

——あの時とおんなじだ。

小さい頃、健吾の側で「私が健吾のお姫さまなのよ」とくっついていた時の、誰にも文句言わせないと言いたげな瞳。いつか取り戻したかったあの瞳。

——畜生、あれは俺のもんだ。

楡山先生に毒づいてどうする、とすぐに自分につっこんだ。

「あの、私、さっきから楡山先生のお話を聞いていて違うと思ったのは」

切り出して、一度言葉をゆるがせるようにして、すっと顔を上げた。

「私、本当に梨南ちゃんのことがかawaiiそうでならないんです」

——かawaiiそう？

ざわめきが生まれたのは女子の方だった。ひとり、後ろで寝たふりをしている花森を除いて。みながぱたぱたと顔を合わせている。

「だって、梨南ちゃんは小さい頃から、どうしても男子とおしゃべりしてもうまくいなくて、だから私がいつも間に立ってあげていたんですけれど、それでもどうしてもだめだったんです」

立て板に水って奴だ。はるみ、度胸全開だ。健吾は思わずひいた。

「どうしてもか、私もわからなくて、梨南ちゃんがかawaiiそうなので、一生懸命友だちになってあげたんです。今、青大附中に来て、やっぱり梨南ちゃんは男子たちにいやがられてます。楡山先生は私のことを梨南ちゃんがいじめていると思っているみたいですが、梨南ちゃんは私と一生懸命仲良くして、って言ってるんだと思います。ただ、ふつうの人にはそれが、そう見えなないんだと思います。だから、私、梨南ちゃんが男子たちとうまくいくようになるまで、ずっと友だちでいたいんです。かawaiiそうです」

「そんなこと、言ってないわ。いいかげんにしなさい、はるみ」

低くつぶやく杉本。いさぎよいのか往生際悪いというのか。

「だって、うちのお母さんも言ってたもの。梨南ちゃんは生まれつき、そういうことがわからない人だから、何を言われても許してあげなさいねって。私も梨南ちゃんがそういう人だとわかってたから、私が守ってあげなくちゃって思ったの。そうしないと、私以外だれも、味方がいなくなっちゃうでしょ。私、梨南ちゃんが何をしても、許してあげなくちゃって思ったの」 女子たちの集団に、不気味な空気が漂う。ちょっとまずいぞ、佐賀。そう言いたい健吾だが、くちばしを挟む勇気はない。改めて思う、佐賀はるみ、ちょっと怖い。「生まれつきそういうことがわからないとは、どういうことなの。いいなさい」

声が震えてる。杉本を何かが揺らしている。

比べてはるみの言葉は、一切揺れなかった。

「聞いたの。うちのお母さんが話してたのよ。この前梨南ちゃんのお母さんがうちに謝りに来てくれたことがあって、教えてくれたのよ。『梨南ちゃんは生まれつきそういう感じ方しかできないから、今度病院に連れて行きます』って泣いてらしたんですって。でも、梨南ちゃんが病院に嫌がるのも分かるわ。それなら私、ずっと梨南ちゃんを守ろうと思ったのよ。梨南ちゃんがふつうになるまで、私、待ってあげようって決めたの」 静まり返った。今度は鼻息ひとつ立てやしない。 桧山先生も息を呑んでいる。「それがどうしたの。私はおかしくなんてないわ」

——それがすべてだ。

健吾の目には、男子連中はおろか、女子連中の顔がオセロのように一気に白くひっくり返されたように見えた。給食時間までは一切、杉本にたてつこうとしなかったあの女子たちが。はるみの言葉を境にすべて、納得したように頷いていったのを。女子たちが向ける杉本への視線がずっと鋭く冷たく変わっているのを感じた。

——佐賀、良くやった。

——あの次期評議委員長さまは、このことを、知ってたのか？

すべてがつじつま合う。 健吾にいきなり評議委員長の座を勧めてきたのも、杉本に情けをかけてやってほしいと言い出したのも。

桧山先生の出方をすべて読んでいたか、聞き出したか、その辺はわからない。しかし本条先輩から聞いた立村伝説を裏返せば、可能性はなくはない。杉本が来年の評議委員に選ばれないならば自動的に、評議委員長の座を与えることはできないわけだ。そういうことだったら、当然予定変更を強引に行うのも当然のことだ。つまり、杉本のプライドがとことん剥ぎ取られるのを、立村次期評議委員長はすべてお見通しだということだ。

——まじかよ。

健吾はあらためて、つぶやいた。あいつはガキかもしれない。けど、怖い。

——けど、俺だって大人だ。

さっき立村と語った時に見えたものが、すいと立ち上がった。

——けど、このままじゃあ、桧山先生がまた叩かれる。

——先生の言うことは正々堂々、当然のことだけど、あの女はガキだ。救いようのないガキなんだ。ガキは何するかわからないんだ。

立村について本条先輩がつぶやいた言葉が耳に残っている。

——俺は、大人だ。大人だから、するべきことは、わかってる。

手を挙げた。すぐに指された。

「先生、いっすか。俺、評議委員としての提案なんだけど。このままじゃあ泥沼だし、佐賀、お前は座れ」

先生には悪いが、はるみが言うことを聞くのは、健吾の方だと思う。

「新井林、言いたまえ」

「ああ、言います。とりあえずこの審議、来年の四月まで待つてことはできませんかね」

「来年の四月？ 二年に入ってからか」

思わぬ行動に驚いているのか、桧山先生は早口だった。

「そう、どうせそれまで委員会の改選はまだだろうし。それに一応評議委員会は部活動みたくなってるから、他の先輩たちに迷惑をかけるのもなんかまずいかなってことで」「そうか、まあなあ。二年、三年に罪はないもんなあ」

ちろっと杉本をにらみ、笑顔で健吾に向かう。

「そして、提案その二なんだけど、いっすか」

「おう、どんどん言ってみろ」

女子連中が立ったままでけずってくるのを跳ね返し、健吾は続けた。背を伸ばし、堂々と。「今のことで、佐賀をいじめている馬鹿女子どもが反省したかどうかってのは、俺は信じちゃいねえっすよ。先生もわかってるだろ。いじめた奴ってのは、必ず後でしかえしするって。だから俺が佐賀を命賭けて守る。それは続ける。でもし、一言でも佐賀にいちゃもんつけるようだったら、その時は俺も黙っちゃいない。残念ながら腕力勝負は女子相手に不公平なので、いつでもどこでも、先生に行司軍配持ってもらって、裁いてもらう。けど、それもうまくいく保証はない。でもうひとつ」

健吾はもう一度椅子に低く座っている杉本を見た。

正面から見るのは、これで最後にしたい。

「杉本、お前がとことん腐っているのはよっくわかった。だが、俺は大人だ。紳士でありたい。だから、三ヶ月猶予をやる。三ヶ月、お前が評議委員として認めてやれるかどうかをとったり、観察してやる。当然俺たち男子はいじめなんて姑息な技を使いはいねえ。暴力行為その他悪口一切、封じてやる。結果、お前が佐賀を始め他の連中に謝る気持ちになったら、その時はその時で評議になるなり、その他の委員になるなり、判断が下るってわけだ」

「あんたに言われたくはないわ。命令される筋合いもない」

「ああそうだな。俺はお前とこれから一切口を利く気もない。俺は紳士でありたいけれども、杉本を好きになることだけはどうしてもできない。これだけは理屈抜きでそうだ。ただ、いじめないことだけはできる。どんなにむかつくことをされても、半殺しにしてやりたいと思っても、手を下さないようにしようと、思うことだけはできる。それが俺の仁義であり、情けだ」

反応誰かしる、と言いたいのだが、誰もしゃべらない。ひとりで盛り上がってて馬鹿みたいだ。健吾は指で鼻をすすった。肝心要の杉本だけが、壊れんばかりの瞳で健吾をにらみつける以外は。

「情けなんてかけられたくもないわ。だから新井林、あんたは馬鹿なのよ」

「俺の話はこれで終わりです。桧山先生、ではお裁きを」

健吾は、わざと手を差し出すようにして、そのまま座った。

「新井林、素晴らしいぞ。お前こそ、評議の鏡だな」

「俺は評議として当然のことはしただけです」

——立村次期評議委員長との仁義を守っただけだったの。

前から、後ろから、指先だけで叩く拍手の音が聞こえる。最初ぱたぱたと、そして上から、斜め向こうから。あちらこちらから。とうとう手のひらで叩く拍手で一杯になった。健吾が見渡すと、男子連中がオーバーアクション気味に手を挙げています。

——健吾、最高だあ！

——勝利だ勝利！

——ざまあみろ、馬鹿女！

「おい、やめる、黙れ」

もう一度健吾は立ち上がり、足をとんと踏み鳴らした。

「いいか、前から俺が言っていることを忘れるな。俺たちはこれから、卒業するまで、勝負に出たんだ。どんなに杉本にむかつくことを言われても、どんなに腹が立っても、暴力や悪口を言わないでがまんするって言う、すっげえきつい勝負だ」

——ほんときついんだぜ。七年どれだけ俺が苦しんできたかわかるかよ。

「だから、俺たちは正々堂々、その勝負に勝とう。紳士として、大人として、俺たちの考えが正しいことを証明するんだ。もちろん、杉本を始め、間違っていると謝ってきたら、その時は『大人』として許してやれ。佐賀が今だに杉本をかばうようにだ。すっげえしんどいことばかりだが、俺たちは絶対、やり遂げる。紳士として、大人として。わかったな。そのことで反目する奴がいたら、その時は俺がぶん殴る」

握りこぶしを立てた。

健吾の筋肉は、中学に入ってからだんだんさわり心地よくなってきている。殴りがいある腕だ。

「杉本、これだけ言ってくれても、気持ちは伝わらないのか」

「あたりまえです。私をだしにしていやがらせをしているだけです」

桧山先生は音の聞こえるため息をついた。

「君はかわいそうな子だね。どんなに思いやりをもってみんなが心配してくれても、反省することも、自分がどんなことしているか想像することも、できないんだ」

——俺は大人だ。そして紳士でありたいんだ。

あらためて健吾は、はるみにふさわしい男でありたいと祈った。

窓から覗く真っ白い空に願った。

——俺は、あの女を好きになることはできない。けど、佐賀のようにあの女を許せるようになりたい。佐賀、どうしてなんだ。どうしてあんな女をかわいそうだって思えるんだ？ あれだけ無視されつつけて、あれだけ顔を奪われて、どうしてなんだ？

女子連中のいじめは陰湿だ。桧山先生がいなくなったら、すぐに反省したふりの女子が現れて嫌がらせに向かうだろう。杉本がいつ権力を取り戻すかわからないのだから。だいぶ雰囲気的に変わってきているのが一安心だが、まだまだ危険であることは確かだ。健吾はあらためてはるみを守ることを決意した。

悪の根源たる杉本梨南のプライドをたっぷり傷つけたところを見せ付けられて震え上がったに違いない。授業が終わった後、女子の数人がおそるおそる杉本に近づいて行って、

「杉本さん、謝ったほうがいいよ。先生、杉本さんになにか罰与えるかもしれないよ」

とアドバイスしていたが、

「謝るくらいなら、退学したほうがまし」

とつぶやき返していたのを聞いた。救いようのない奴である。

——心底、腐ってるよな、あの女は。

健吾はあらためて思う。

——俺だって、あの次期評議委員長を「さん」付けで呼ぶことにきめたってのにな。

杉本に近づく女子も減った。かといっではるみとしらじらしく仲良くすることもなかったが。みな、楡山先生の言葉ひとつにおびえ、男子連中のけん制にうつむいていた。男尊女卑なクラスの完成だ。

いじめ問題についてはあっさりけりがついたように見えるのだろう。いじめの先鋒だった杉本を絞り上げて、立場をなくしてしまったのだから。叩いていたものが一転、あまされものになったというわけだ。

もっとも杉本も再起不能のどん底に突き落とされたわけではない。二年の先輩たちは相変わらず杉本を図書室に連れ出しているし、あれ以来サボり不良女の花森なつめがしっかり学校に来るようになり、杉本を陰日なたなく見守っている。

この女の問題まで片付けてしまったんだから、楡山先生の評価はうなぎのぼりになって当然だ。

——まあこんなもんだろ。先生。

もちろん健吾も、杉本の復讐心がいかに恐ろしいものかを身をもって知っているから、手を抜く気はない。断言した通りいじめという手段は取らないが、少しでも変わり身を見せたらその時はいかなる手を使ってもぶつつぶす用意がある。ガキが何をするかわからないのは、よっくわかっている。

大人の自分が徹底して大人の憲法を貫くに尽きる。

終業式後はクリスマスイブということもあって、かなりプレゼントの話題で盛り上がっていた。ちなみに健吾の場合、新しいスニーカーを買ってもらおう予定だった。はるみの家ではおとなしくケーキを食べるだけらしいとのことだが。

「行くだろ」

「うん」

約束していた通り、はるみとふたりで、この日は菊乃先生の家へ遊びに行くことになっていた。公認の恋人同士なのだから、せっかくだし甘いひと時を提供したい、とのお言葉だ。ちなみに赤ちゃんはすでに生まれて二週間くらいとのこと。今はお家でねんねしているとのことだった。

「赤ちゃん、女の子だったんだって」

「けっ、つまんねえの」

健吾はかばんを持ち替えて、人目を気にした後、そっとはるみの手を探した。拍子にコートを触る格好となり、どうやらそこがお尻だと気付いて慌てて離れた。あたたかかった。

「わりい、間違った」

はるみは黙ってその指を握り返してくれた。

「佐賀、どうした」

「髪、ほどいていい？」

学校からだいぶ離れ、近くには誰一人青大附属の連中が見当たらなくなった。菊乃先生のアパ

一トの前で、立ち止まった。

「貸せよ」

複雑な手まりをこしらえたようなはるみのお団子髪。中華娘風のこしらえだ。毎日どういうやり方で編み込んでくるんだろう。健吾はピン止めを指先で探し、はるみの黒髪をばさりと下ろした。肩を握りこぶし程度隠す長さに広がった。少しパーマをかけている風にさらさらと揺れた。

待っていてくれた。赤ちゃんの泣き声が響き渡る桃色の部屋で、おなかをぺたんこにした菊乃先生がさっそくふたりを中に入れてくれた。もちろん、旦那はお仕事なので家にいない。まずは赤ちゃんを覗き込み、名前を聞いたり、べろべろばあしたりと遊んでみた。はるみは楽しげに菊乃先生の側で笑いつづけていたが、健吾としては、

「人間、猿から始まったってほんとだよな」

というのが本音でもある。髪の毛がほんのわずかだった。

「あらら、健吾くん、来年まで待っててよ。きっと髪長くなって、私似の美人になっちゃってるから。今言ったこと、後悔するかもよ」

「赤ん坊にもえるかよ」

ちよんとつつかれて、ふたり炬燵に入った。申しわけ程度のツリーが窓辺に飾られていた。緑色のランチョンマットに赤のコースター、ワイングラスが用意されている。はるみを窓辺に座らせ、健吾は直角右側であぐらをかいた。鳥のから揚げ、イチゴケーキ、シャンパン、三人では食い切れそうにない量の料理が並んでいた。

「じゃあ、琴が寝てる間に、まず食べちゃいましょう」

おなかの落ち着いたのか、琴ちゃん……赤ちゃんの名前である……はベビーベットの上でおとなしくねんねしている。三人、しーっと指を立てながら、さっそく食べることに専念した。腹すかせてきて、正解だ。

腹がくちくなくなったところで、シャンパンを開けた。ひそかに期待していたのだけれども、やっぱり子ども用の甘いノンアルコールだった。はるみが黙ってすすっているのを見て、なんか落ち着かなくなった。

「佐賀、俺に」

「なあに？」

「もうねえんだ」

言われている意味がわからないみたいだ。はるみはきょとんとしたまま菊乃先生を見て助けを求めた。

「やあねえ、亭主関白今からやってどうすんの。しょうがない。今日は私がサービスしてあげるから」

今度は軽く拳骨で叩かれた。菊乃先生が注いでくれた。そんな怒られることしてないつもりだ。うちでいつも母が父にしていることを、なんとなく、やってほしかっただけだ。

「ね、でも、健吾くん、本当に二学期は大変だったらしいねえ」

「なんとか一件落ち着きそうな気配だし」

健吾はさっそくシャンパンを飲み干した。テンションが上がってきた。

「あの女、結局、負けてやんの。ざまあみろってんだ」

「あの女って、杉本さん？」

はるみと目を合わせて頷きあう。

「桧山先生がさ、みんなの前で言い渡したんだ。杉本を来年の評議委員から下ろすってな。評議として選ばれる価値がないからなってな」

「きゃあ、偉い！よく言った！」

手を叩く菊乃先生、むせこんでいる。

「佐賀を無視したりいじめたりしてるくせに、評議委員なんてやらすわけいかねえってな。で、クラスの女子連中にも、もし手を貸す奴がいたら、おしおきするぞって言い渡した。先生かっこよかったぜ」

「ほんとよねほんとよね」

「けど、俺としちゃあなんか、一方的過ぎるってのと、やっぱり大人としてもう少し冷静になろうと思ってさ」

ちょっときざに決めてみた。

「なによ、気取ってないで教えなさいよ」

肩をゆさぶられ、何度か左右に揺れた。

「来年の三月まで猶予やるって言ってやったんだ。お情けでさ。もし三ヶ月で佐賀や桧山先生にざんげして許してくれって言うようだったら考えるが、もし反省しないんだったら、桧山先生の言うとおりに保健委員に回ってろってな。けど、保健委員の奴は露骨にいやな顔してたなあ」

「ふうん、保健委員にするって、でも、そうなると、困るねえ」

いたずらっぽく菊乃先生がにやつく。

「なに困るんだよ」

「保健委員って、具合悪くなった人を連れて行く係でしょ。保健室の当番もあるでしょ」

「よくわからねえよ。青大附属では医者になりたい奴ご用達の委員会らしいけど」

今度は膝をぽんと叩かれた。

「みんな、具合悪くなくても保健室いけない人が増えそうね。杉本さんに連れていかれたら、さらに病気悪化しそう」

もっともだ、健吾は爆笑してうつぷした。はるみが困ったようにうつむいている。

「けど、俺なりの考えとしてさ」

あまり下品に走るのも、ガキっぽいので健吾は背を伸ばした。

「あの女はどうしようもなく、ガキだってことはよおくわかった」

「私の言ったとおりでしょ」

菊乃先生も胸を張る。

「俺がそう思ったんだ。絶対」

はるみに横目を使い、健吾は鳥のから揚げをもうひとつ放り込んだ。

「ふつう、あそこまで桧山先生がな、反省しろって言ったら泣くか謝るかするだろ。ふつうの感覚持ってる奴だったらそうだよな。なあんも言わねえんだぜ。ただ、にらんでるだけ。ただ、口尖らせているだけ。あいつ、人間の感情ってまともにねえなって、ほんっと思ったぜ」

「だから言ってるでしょ、普通じゃないのよ、あの子はね」

両肘をついてあむあむとケーキをほおぼる菊乃先生。

「六年の時だっていっつもそうだったじゃない。一点しか見つめないで、あの世を見つめているような目で、棒読みでしゃべってるじゃない」

「俺も本能で思ってた」

「うちのお母さんも、梨南ちゃんは小さい頃からおかしいって言ってたわ」

はるみが口をやっと開いた。

「でしょ、ねえ健吾くん。クラスの女子たちはどうなの？ あれだけ怒られてまだ、杉本さんの味方っているの？」

「いる、ひとりだけ、すげえ不良」

「花森さんのことね」

結局花森が、杉本を取り囲む女子たちを一喝して教室から連れ出したのを見た。

「でも、ほとんどの女子は、もう桧山先生がおっかねくて、これ以上杉本の側にいるとやばいってことで、離れてるみたいだ。当然だよな」

「ふうん、桧山先生だったっけ？ 担任の若い兄ちゃんにも言っておいたのよ。杉本さんの行動に同調している人たちも、まともな神経の人だったらだんだんあの子がおかしいと気付くはずだから大丈夫ですよってね」

——担任の若い兄ちゃんって、菊乃先生とそう歳変わらねえはずだぜ。

健吾は声に出そうとして、飲み込んだ。

「先生、ちょっと待った」

はるみにも目を向け、健吾は尋ねた。

「なんで桧山先生のこと知ってるんだ？」

「だって会ったもの、ね、はるみちゃん」

完全に事実と認めた顔でうなだれるはるみ。一言も聞いていない。

「健吾くんから話を聞いてね、大切な私の教え子たちが悩んでいるなら一肌脱がなくっちゃってことで、はるみちゃんに頼んであわせてもらったのよ」

——なんで何も言わなかったんだ、佐賀。

氷柱が折れたような音が、芯に響いた。

はるみは黙ってうつむいていた。

「前から不思議に思ってたのよ。どうしてあの子が青大附属に受かったのかなあって。健吾くんたちから話は聞いていて、先生も大変だろうし、でも私はもう小学校の先生じゃないからと思って。それではるみちゃんにお願いして、一度杉本さんのことについてご相談したいということをお話したの」

——だからなんで、俺に言わねえんだよ。

あとのおしおきが怖いだろう。たっぷり、してやる。

「健吾くん、はるみちゃんをいじめちゃだめよ。私が頼んだことなんだから。それで桧山先生と会って、はるみちゃんを交えているいろいろお話を聞いたの。たぶんはるみちゃん、途中からわけわからなかったと思うんだけど。杉本さんの場合、小学校の頃から問題行動が目立っていたので、そういう人にふさわしい学校に行かせた方がいいんでないかしら、ってことまで話したの。ありのままのことを話ただけよ。ちゃんと本も渡してあげたんだから」

——本？

わけがわからない。菊乃先生は本棚から一冊の教科書みたいな厚みの本を取り出した。

「難しくない本なんだけど、もしかしたら杉本さん、これじゃないのかなあって思ってね」

題名は『ふつうに見えない子どもに教師・親がやらねばならないこと』

「そのものずばりじゃねえか」

健吾はそれだけ口にした。

「でしょ。健吾くん。この本少し過激なこと書いているんだけど『クラスの和を乱したり、人の言うことを聞けない子どもには、断固とした態度で挑まなくてはなりません。ふつうの感覚を持つ子ども達の迷惑になる以上、教師はその子どもに対して、これ以上は受け入れられない旨の線引きをするべきです』での。私も先生だった頃はなあなあにしちゃっててまずかったなあとは思うんだけどね。でも、杉本さんの家に恨まれてから私、学校辞めさせられたようなもんだからねえ」

はっとした。あかんぼが腹に入ったからじゃないのか。

「本当はね、健吾くん、はるみちゃん。私ももっと先生のお仕事したかったのよ。でもね、教育委員会に思いっきりにらまれて、ちょうどタイミング悪く琴がおなかにできちゃったでしょう。先生たちってねえ、結構性格悪いのよ。あのことさえなければ、ちゃあんと一年休みを取って、琴が大きくなってから小学校に戻るつもりだったのに」

まだ後遺症が残っていたと、初めて知った。

「今、先生じゃなくなったから、桧山先生にはお話できたようなものよ。私がうっかり杉本さんの親に言ってごらんさい。私が水商売して作った子なのよ、とかさんざん噂流されて、青湯追い出されるかもしれないもの。でも、桧山先生ってしっかりしてるよね。ちゃんと私の話聞いてくれて、納得してくれたの。『わかりました。佐賀さんが苦しんでいるのは気付いてました。僕は佐賀さんとクラスの全員を守るために、戦います』って言ってくれたのよ。やっぱりねえ、ふつうの人は、気付くのよ」

ふつう、ふつうと連発する菊乃先生に、なぜか胃がおかしくなるようなものを感じていた。から揚げ食いすぎただろうか。健吾は一度トイレを借りることにした。はるみに話し掛ける声だけが聞こえる。

「けどそうよね、はるみちゃん。杉本さんは自分が正しい、自分が素晴らしいと信じて、実はみんなから嫌われていることに気付かないのよ」

はるみがか細く答える声もする。耳を澄ませた。

「先生、あの後、梨南ちゃんのお母さんにあの本貸したみたい」

「あらら、そうだったの」

「うん。梨南ちゃんのお母さんを学校に呼び出して、証拠の写真とか、録音テープとかビデオとか、そういうのを全部見せたんですって。私、いじめられた記憶ないのだけど、でも、梨南ちゃんのお母さん泣いちゃったらしいんです」

「今更自分の娘がしたことに気付いてどうするってのよ。早く気付けよばか親って感じよね」

トイレの水を細く流し、健吾はさらにドアへ耳をくっつけた。自分が出て行くと黙りこくるかもしれない。

「これ以上私のことをいじめたり、桧山先生に口答えするようだったら、青大附属を退学にしますよ、って脅して、そのあと優しく言ったんですって」

「なにになに？」

「菊乃先生の言った本を渡して、『もともと小学校の頃から梨南さんはおかしかったらしいので病院に行けば直るかもしれませんが』って言ったんだって。『本人が悪気を持ってやっているのだったら退学してもらうけど、生まれつきの病気とかだったらしかたないので面倒みます。病院に連れて行って証明書を出してもらってください』とかも言われたって、お母さん言った。梨南ちゃんのお母さん、それから三日くらい、小学校時代の人たちの家にお菓子もって土下座して回ったんですって。うちに一番先に来て、私にしたことを謝って、許してくださいって」

「はるみちゃんのお母さんは、許したふりしたの」

「『梨南ちゃんは、そういう子だから仕方ありません』って言ったの。そうしたらずうっと、梨南ちゃんのお母さん泣き出して、学校で先生に言われたことをひとりでジャベリ続けてたの。お母さん話聞いてたけど、あとで言った。『生まれつきだったら、どうしようもないですよね』って」

——そういうことか。

つながるつながる。頭の中でぷちぷちと切れる音がするようだ。

「実際この本に書いていることは、私からするとどうかな、ってまゆつばものなんだけど。もし琴にこう言うことを言われたら、きっと先生にたんか切って転校させるわ。うちの娘をばかにすんなってね。でもあの親にはそのくらい言わないとわからないのよ、あそこのうちは普通じゃないんだから親も娘も」

「梨南ちゃんはまだ病院に行っていないみたい」

「あらら、大騒ぎしておいて？」

「梨南ちゃん、学校ではつんとすましてる。お母さんに何度も病院に行くように言われてるらしいんだけど、『私は狂ってない、私は間違っていない』と言い張って、お母さんとも最近口を利いてないらしいの。病気でないってことになったら梨南ちゃん退学させられるから、お母さんは必死になって病気なんだってことにしようとしてるんだけど」

「認めるのが怖いよね、赤ちゃんばぶばぶ。うちの琴の方がまだましかしら。まだご機嫌いい時はにこにこするもんね」

べろべろば一と、菊乃先生ははしゃいで笑った。

「やっぱり、単純に信じちゃったのね。半分以上大嘘ばかりなのに、あまりにも自分の娘のしていることと病気の内容がおなじだから鵜呑みにしちゃったのねえ。少しはお勉強しなさいって感じよね。ま、あとは杉本さんの家でいろいろ修羅場くぐってもらえればいいのよ。親のしつけのせいだったら退学だし、病気のせいだってことになったら学校にいられる限りそれなりの扱いをされるし。さあて、どっちを取るのかしら。はるみちゃんへのいじめがなくなるよいうだったら」

ぐふふ、声を押し殺して。

「青大附属は、私立ですから梨南さんは公立に転校することは簡単なんですよ、って、桧山先生言ってたの、覚えてる？」

——そこまで言うかよ。

もし菊乃先生やはるみの言うことが正しければ。

とうとう桧山先生は、杉本梨南に対して、いや、杉本梨南の親に対して十分すぎるほどとどめを刺したということだ。『クラスの和を乱したり、人の言うことを聞けない子どもには、断固とした態度で挑まなくてはなりません。ふつうの感覚を持つ子ども達の迷惑になる以上、教師はその子どもに対して、これ以上は受け入れられない旨の線引きをするべきです』

杉本がいつぞや本を叩きつけて抗議したことがあったけれど、ネタはたぶんその本なのだろう。『精神病院』うんぬんという言い方だったが、はるみの言葉を信じる限り、実際それに近いことを口にしたのだろう。どんなに桧山先生が怒っても、のれんに腕押しだった現実を見れば。

しかし、菊乃先生がはるみに手引きさせ、桧山先生に話をしたというのは初耳だった。菊乃先生はかなりおなかが大きかったはずだ。

そこまでして桧山先生に杉本の悪口を言いに行く意味って。

はるみもなぜ、健吾に一言も言わなかったのだろう。

今聞いたことが本当だとすれば、健吾はすべてを否定しなくてはならなくなる。健吾の持つ「正義」「正々堂々」がすべて覆されることになる。ずっと守ろうとしてきた、ふたりの「正義」が泥にまみれてしまうことになる。

白い雪に泥のしぶきがかかったような、そんな冷たさに。

——桧山先生があの子の親に言ったことは間違ってるねえよ。あの子のせいでクラスが大迷惑だったのは、すげえわかるし、あのままだったら佐賀が傷つくってわかってた。あの子の親が大泣きして土下座して歩いたってのも、ざまあみろってのが本音だ。塩かけたって当然だ。けど。

一週間前までだったら平気で罵れたはずなのに。違う粘着力のある言葉が身体をうごめいた。動けなかった。

——でも、菊乃先生、違ುದろ。その本、嘘っぱちだったって知ってたんだろ。

汚点。

菊乃先生にも、はるみにも見たくなかったもの。

杉本梨南を染めている汚い色。

同じものを健吾は見つけてしまった。

「あら、遅かったねえ、おなか大丈夫？」

上機嫌の菊乃先生はまだけらけら笑いながら、シャンパンを手酌で注いでいた。はるみがちろっと健吾を見上げたが無視した。目で感情を読まれるのが恐ろしかった。

「菊乃先生」

健吾は正座した。

「なあに、かしこまっちゃって」

「今の話、全部ほんとかよ」

目をそらさなかった。健吾の方をきょとんと見つめた菊乃先生は、すぐにまぜっかえすがごとく、

「やだなあ、みんな聞いてたんでしょ。はるみちゃん話してなかったの？」

「聞いてねえよ！　なんでだよ！」

はるみの方を向いたら何をするかわからない。こらえた。わめきたいのを必死に押し殺した。

「菊乃先生さ、さっきの本、大げさに書かれた本って言ってたよな」

「ずいぶん詳しく聞いてたのね」

「黙れ、話せよ。内容かなり嘘っぱちってことだよな」

戸惑ったように菊乃先生はテーブルクロスをもみもみした。

「そうよ。私、心理学の本って結構読んでるんだけど、本によって書いていることって違うの。大きくなったら分かると思うけれどもね、本を書いている人によって、価値観というか、信じるものが違うっていうのかな？　ある人は杉本さんみたいな人を優しく見守ってあげましょと唱えてるし、またある人はさっさと追い出しましょって話してるの。もちろんどちらの方にも言い分があるんだけど、本当だったら杉本さんを許しましょ、って言ってあげたほうがいいのはわかるのよ。私だって人の親だもの。自分の子どもにはそうしたいわ。でもねえ」

はるみと再び目を合わせて意思疎通。ぶっちぎりたかった。

「そんなこと言ったら、さらにあそこの親、開き直るじゃない？　自分の娘はがんばっている、一生懸命。だから問題なのは学校なのよ、とか言いかねないじゃない？　守ってあげない松山先生が悪いのよ、いじめられるはるみちゃんが悪いのよ、うちの梨南姫が一番なのよ、って言い出しかねないじゃない」

健吾は頷いた。

「問題の解決になんてなんないのよ。嘘でもいいから爆弾を落として、ショックをたっぷり受けて、それからなんとかしてもらった方がいいと私は思ったの。もちろん杉本さんがおとなしくなって健吾くんやはるみちゃんの邪魔にならないところに追いやられれば完璧だけど、まずはたっぷり罰を受けてもらわなくちゃ。いじめをしている張本人として当然よ。どうしたの健吾くん、杉本さんのこと、死ぬほど嫌いだったでしょ」

「ああ、ゴキブリだと思うぜ、あの女は」

——それは変わらないさ。

「けどな、菊乃先生、それって、やり方汚ねえよ」

手が震えた。まずい、また感情が高ぶってしまう。

「健吾、どうしたの」

「黙ってる！」

肩を震わしている隣りのはるみを見無視して、健吾は怒鳴った。

「そりゃあ、俺はあの女死ねばいいと思うさ、見るだけで吐きそうになる女なんてこの世であいつだけだ。国家権力で抹殺されてもなんとも思わない女だ。けどな、俺はあんな女と同じやり方で勝つのはいやだったんだ。先生、知ってるだろ？ 俺、ずっと青大附属に行ってから『いじめをしない、正々堂々』と勝負したって。あの女の悪事を全部さらけだして、自分で土下座して謝らせるところまでさせて、最後は他の奴らから軽蔑されて罰せられるのがベストだって。だから、俺はずっと正々堂々、誰にも文句つけられないやり方をしてきたつもりなんだ。ずっと、そうだったんだ、けど、けど」

目を腕でこすった。カフスポタンがひっかかって痛い。

「菊乃先生してること、あの女とおんなじじゃねえかよ！」

声が震えて、たんがからみそうだった。鼻水がじゅるじゅる流れた。

「いいさ、あの女は何言われても感じないみたいだから、それくらいされるのが当然だと俺も思う。けど、あの親が土下座して謝ってるのって、菊乃先生が言う、嘘っこき本の内容でショック受けたからだろ？ 嘘の情報読んで、自分の娘が狂ってるんでないかって泣いてるんだろ」

「全く嘘ってわけでもないのよ。内容がセンセーショナルかなってことだけ」

「関係ねえよ。菊乃先生、あの女の親を騙したことになるよ。菊乃先生まで、あの女と同じ奴になんてなってほしくねえよ。俺は菊乃先生もはるみも、あの女と同じレベルにしたいくねえんだよ！」

しばらく言葉よりも涙で壊れそうになりながら、健吾はティッシュを何枚か消費した。ごみ箱がだいぶ一杯になった。雰囲気は湿り、時々琴ちゃんが泣きじゃくるのが聞こえた。健吾の分、何倍も声を出して泣いてくれていた。

あやしながら菊乃先生は、もう一枚ティッシュを渡した。

「健吾くん、落ち着いた？」

「ばかやろう」

くぐもった声でしばらく健吾はつぶやいた。

「健吾くん、正義感強いのはわかるよ。とっとも真っ直ぐだってわかってるわよ。でもね、正々堂々なだけでは、人を反省させたり、まともにしたりすることは出来ないのも、わかってね——言い訳すんなよ！」

涙で目が曇り、隣りのはるみを覗く。すっかりうなだれたままだ。健吾を見るのが怖いのだろう、膝真っ正面でうつむいていた。

「もし、私があの時、杉本さんの親あてに話をしたとして、はたしてうまくいったと思う？」

正々堂々と、健吾くんの言う通りにそういう本を渡して、杉本さんの親に話をしていたら。反

省するわけないでしょ」

「ねえよ、ねえけど」

「そうしたら、かえって桧山先生は逆恨みされたはずよ。はるみちゃんにいじめられた原因があるんだから、うちの姫に間違いはないわって、開き直られて、どんなに桧山先生が口すっぱく行っても聞く耳持たなかったはずよ」

——わかってるわかってる。

耳をふさぎたかった。でも菊乃先生は続ける。

「でも、ちゃんと桧山先生は正しいことをきちんと、冷静に説明してくれたみたいよ。はるみちゃんの話だと。そして、杉本さんのお母さんは素直に反省して、娘をなんとかまともな人間にしようとしているみたいよ。自分の娘が親友づきあいしてた子をいじめまくり、クラス全体で無視するなんて、どんなに言い訳しても許せない。その原因がもしかしたらご自分のしつけなのか、それとももとの性格からなのか、それは調べないとわからないわ。でも私たちふつうの人にはそんなこと関係ないでしょ。はっきりしているのは杉本梨南という子が私たちにとってゴキブリだってこと。彼女のご両親には、おもいっきりハエたたきで叩いて見せ付けてやらないと、気付かなかったってことよ。ゴキブリの生命力ってすごいんだから」

——だから許されるって正当化してどうするんだよ。

「健吾くん、よく聞いて。大人になるってというのは、正々堂々とするだけじゃないのよ。もちろん間違っただけをすることはよくないけれども、黙っていたら はるみちゃんが杉本さんの餌食になってしまうとこだったのよ。守るためには、鬼にならなくちゃだめなのよ。口で言ってもわからない人には、頭を使って攻撃するのも当然なのよ。知恵者でなくてはならないのよ」

大人になるということ。

混乱してきた。本条先輩の言う、「大人」の眼が違う。

汚いことを場合によってはしなくてはならない「大人」。

はるみを守るためにはそれをしなくてはならなかったこともある。

杉本と、立村次期評議委員長を間にしてにらみ合った時。

かつての想いを刺激するような言葉をたっぷり浴びせた時。

でも、決してもうそういう汚い手は使わないと決めていた。

はるみのために。はるみにふさわしい男であるがために。

——それだけじゃだめなのかよ。

涙は止まらなかった。

「先生、頼む、聞いてくれよ」

声がひっくり返り、健吾はしゃくりあげながら続けた。

「あの女の親をインチキ本でもって騙したことだけは謝ってくれよ」

「何言ってるの、当然のことをしてあげただけじゃないの」

「謝る必要ないなら、せめてさ」

鼻水を何度かすすった。

「これから俺たちのクラスの連中に電話かけて、もういいかげん杉本の家を馬鹿にしあつたりするのはやめようとか言って、治めてくれよ。そうすりゃ、先生は心の広いすげえいい人なんだってみんな思ってくれるぜ。あの馬鹿女の親を許してやったすばらしい人なんだって思ってくれるぜ。俺にもそう、思わせてくれよ。だって、俺は」

はるみを見つめて、咽から吐き出すように。

自分の発する言葉が熱すぎて舌が焼けそうだ。

「俺も、今まであの女をはじめ、さんざん馬鹿にしてきた連中にしてきたことがいじめだったとしたら、土下座する覚悟はあるんだ。反省して、涙流して、もうしないって思うことはできるんだ。それに、自分の頭が普通と違うとわかって、どうしようもないとわかって、それでも必死に努力する奴だっているんだって、最近知ったんだ。自分の性格に問題があったとしても、最後の最後で悪かった、なんとかしたいって思う奴だっていないわけじゃないんだ。どんなにシュートしても決まらなくて苦しんでる奴を物笑いにするなんて、絶対にしたくないんだ。だから杉本が奇跡的に佐賀に向かって頭を下げるかなにかしたら、俺は許してやる。挨拶くらいはかましてやる。すげえやだけど、でも、俺は人間になりたいんだ。だからお願いなんだ、菊乃先生、謝っているっていう杉本の親を許してやってくれって、他のおばさん連中に頼んでやってくれよ。ゴキブリを焼き殺すんでなくて、外に投げ捨てる程度にしてやってくれって言ってくれよ。そうしたら」

菊乃先生の瞳は揺れなかった。六年の時の健吾たちを見つめている、先生のまなざしと一緒にあった。いくら頼んでも、無理かもしれない、そう思った。

「菊乃先生をあんな馬鹿女と一緒にしたくねえんだよ！」

すっかり宴がしらけてしまったので、健吾は立ち上がった。

「また、落ち着いたら来てね」

答えなかった。菊乃先生は果たして電話をかけてくれるのだろうか。どこかで健吾はあきらめていた。どんなに泣いても訴えても、菊乃先生は完全に先生の目に戻ってしまっていた。子どもの言うことなんてかまわれないわという風にだった。

「あら、はるみちゃんは置いてくの？」

慌てて荷物をまとめているはるみに首を振った。今日はひとりで帰りたいかった。

「ごちそうさまでした」

やっとそれだけ口にした後、健吾はゆっくりとアパートのドアを締めた。

菊乃先生の顔は、困っていたけれどもやったことを後悔しているようなものではなかった。

——勝負はついたさ、ああ、あの女とは勝負付け終わったさ。俺は大人だと思ってあの女に情けかけてやったんだ。けど、そんな裏工作があったなんて、しかも佐賀の奴、何にも言わねえで。

怒ったってしかたないと分かっている。でもどこにぶついたらいいのかわからない。健吾は足を何度かこすりつけるようにして雪道を歩いた。

杉本の親には同情なんてしてやしない。

ただ、健吾のやり方に汚点がついてしまったことが許せなかつただけだ。

なにも土下座して回るといっておまけがつかなくても、健吾は杉本だけを正々堂々たたきのめせたはずだ。頭がおかしいんだよ、という匂わせぶりがなくても、杉本を言葉と態度の二通りでどん底に突き落とせたはずだ。たとえ感情に響かなかつたとしても、クラスの女子たちから支持を失っているのは明白だ。していたことがすべて間違いだつたと思われているのも確かだつた。頼みの綱である立村次期評議委員長から三行半を突きつけられているのも、知らないだろうが本当のことだ。保健委員の連中には同情禁じえないが、評議委員から引きずり下ろされたということには変わりない。どうせ来年の二学期以降は、反省の色を濃くしない限り.....濃くしたとしてもわからないが.....委員そのものを選んでもらえないに違いない。

それに、桧山先生は、親に向かってはっきり「退学」も匂寄せたという。

そうしてくれれば万万歳というのが健吾の本音だ。

でも、それは杉本ひとりの罪であり、親とは関係ないだろう。

少なくとも親は、土下座してあやまり、少しでも娘を真人間にしようとし始めているのだ。

あの立村次期評議委員長が、自分のみっともない過去を反省し、自分のプライドをずたずたにして健吾に頭を下げたように。杉本に情けをかけてやってくれと、屈辱をもって耐えていたように。

——努力している奴を、いくら馬鹿だと言つたつて、踏みにじる奴になつてなりたかねえよ。

はたして杉本がそれに気付いているのかどうかはわからない。しかし、親があれだけ泣き伏していたということを考えると、そうとう家では修羅場が巻き起こっているに違いない。

——桧山先生ははったりをかませない人だな。退学させようとしたら、本気でさせるな。絶対に。

杉本が泣いて許しを請うかしない限り。心底悔い改めて、はるみのパシリにならない限りは。現在も街ではさんざん物笑いの種になっているのだ。全校生徒から同じ制裁を加えられて初めて、桧山先生は情けをかけようと思うだろう。それまでは一切、許しはしないだろう。

——それは正しい。当然だ。けどさ。

「健吾、待つて」

ぎざぎざに切り裂かれた風の中、聞こえていた声。

健吾は無視して歩きつづけた。

「健吾、お願い、話、聞いて」

背中に飛びつく温もりを、健吾は振り払つた。長い髪と一緒に頬を張つた。

顔を覆つて泣きじゃくるはるみがいた。

しゃくりあげるように、しばらく口元を押えるようにして。

「私、私」

「ばかやろう！」

泣き顔を見つめる。目がうるみ、にごった風に見えた。

「なんで俺に言わねかったんだ！」

「ごめんなさい」

「謝るよりわけだわけ。お前、俺のこと信じてなかったのかよ」

「健吾、私」

はるみは口に髪の毛をくわえそうになりながら、払いつつ近づいてきた。健吾の熱気に一歩たじろいだが、思い切ったようにまた進んできた。

「俺が正々堂々、命かけてお前守るって、あれだけ言ってもわからなかったのかよ。あの女とおなじ汚いやり方なんてしねえって、あれだけ言ってたのに、お前と菊乃先生がしたこと、杉本と同じことなんだぞ、なんでだよ、ばかやろう」

ばかやろうと口走りながら、健吾ははるみの肩を揺さぶった。再び涙が込み上げてくる。ふたりに顔をあわせて泣きじゃくるのを、通りすがりの人が奇妙そうに眺めていく。もう他人様なんてどうでもいい。とうとうふたりは雪道のど真ん中でしゃがみこんでしまった。足に力が入らなかった。

「健吾、聞いて」

一方的健吾の罵声を聞き終わり、はるみが髪の毛を押えながら健吾を見つめた。だいぶ瞳が落ち着いていた。

「私、健吾が私を守ろうとしてくれたこと、知ってた。だから梨南ちゃんとも離れなくちゃって思ってた。私、梨南ちゃんのこと今でも嫌いじゃないし、お母さんが言う通り生まれつきかわいそうな子なんだから、優しくしなくちゃって思ってる。でも、健吾が私のために一生懸命なのに、梨南ちゃんのことを大切に、って思うのが悪いような気、してならなかったの」

「いいかげんにしろ。お前あの女に無視されたって」

「ううん、だからこの前話したでしょ。梨南ちゃんは、自分で自分がわかんないかわいそうな子だって。私、小学校の頃からなんとなく、そうなんだって思ってた。みんなふつうの子と違って、梨南ちゃんだけ変だと思ってたの。みんなが物笑いにしてるのを自分を誉めてくれていることなんだって思い込んでたり、健吾の……知ってるよね」

——繰り返すな。

肩を力なく揺さぶったがはるみの口をふさぐことはできなかった。

「あれね、他の先生が教えてくれたの。小学校に入学した時記念撮影で、健吾が私にずっとくっついてたから、梨南ちゃんが泣きじゃくってしまってどこかいなくなったってこと。覚えてないよね」

——覚えてるわけねえだろ。

「私もほんの少ししか覚えてないの。梨南ちゃん覚えてないらしいし。でも他の先生はあんなに激しく泣きじゃくった梨南ちゃんを見たのはあれが最初で最後だって言ってた。梨南ちゃんのお母さんも、同じこと話してたの。確か、あれからだよね。健吾のことを目の仇にするようになっ

たの。私をひとりじめしようとするようになったの」

——きっかけなんて知らねえよ。俺が覚えているのは、顔を見た時から吐き気がして寄りたくないと思っただけだ。「なんとなく、健吾のことが大好きだったんだなって、大きくなってから思ったの」

「けっ、へどが出るぜ」

「だから、変な虫を靴に入れられてしまった時、梨南ちゃんを健吾が突き飛ばした時、もう私、梨南ちゃんに嫌われるのはしかたないんだって思ったの。すごく淋しかったけど、私、どうしても梨南ちゃんを選べなかったの。健吾が大切にしてくれればしてくれるほど、私、どうすればいいかわからなかったの」

「だから俺を信じろってあれほど」

「うん聞いて。でも私、もう梨南ちゃんと友だちにはなれないってあきらめようと思うの。だって健吾が私のことをあれだけ必死に守ってくれるんだもの。私も、大切なことを、捨てようって思ったの」

——大切な、こと？

初めて健吾ははるみに目をやわらげた。立ち上がり、手を下ろした。髪の毛が一本指にからまったままだった。

「健吾のために、私も梨南ちゃんに対して鬼になろうって決めたの。私、健吾を守りたい」

——俺を守りたいって、おい、佐賀、正気か。

はるみを何度もじろじろ眺めた。嘘が隠れてないか、必死に探した。でも正真正銘、はるみの声も顔も言葉も、真実だと体に響いていた。

「健吾、たぶん梨南ちゃんに逆恨みされてると思う。梨南ちゃんのことだから、きっと別の方法で歯向かってくると思うの。梨南ちゃんは、好きってことを嫌がらせすることでしか表せない子だって、健吾のことをまだ想っているのなら、いやがらせもエスカレートすると思う。菊乃先生もお母さんも、桧山先生も同じ意見よ。だから、私、梨南ちゃんがふつうの言葉で好きと言えるようになるまで、どんどん私のやり方で責めていくつもり。大丈夫。私、梨南ちゃんに向かって何を言われても、かわいそうな子としか思わないから」

すすり泣くはるみを、健吾は手のひらでさすってやった。さっき思いっきりはたいた場所だった。

「痛かったか」

「うん」

「反省してるか」

「何を？」

「俺に嘘を言ったこと、俺に隠し事してたこと、俺に菊乃先生のたくらみを教えなかったことを」

威厳を保ちたくて、両腕を組んだ。

はるみは頬にある健吾の手を押えるようにして、頷いた。

「本当だな、もう二度としないな」

「うん」

「俺に隠し事しないな。俺のこと、信じるな」

「うん、信じる。健吾のこと、信じる」

「証拠、見せてみる」

はるみが戸惑うのを健吾は強引に引き寄せた。人が見てようがかまわなかった。いつものような、額だけに唇をなぞらせるのではなかった。

「おしおきだ。覚悟しろよ」

舌を思いっきり唇の中に押し入れた。歯にぶつかったけれどこじ開けた。息が続くまで、からめたままだった。

はるみを家まで送り届け、もう一度いつもの額への挨拶を交わし、健吾はクリスマスプレゼントの待つ自宅へと向かった。

——かわいそうな子、か。確かにな。

悪いことをしているのにはるみのような反省をしない。

それどころかさらに逆恨みしている。

もっと言うなら、自分のプライドを捨ててまで頭を下げている立村次期評議委員長のことすら、気にかけようとしなない。

はるみが精一杯、杉本のことを心配しているのに……哀れんでいるのかもしれないが……全く、許すことすらしない。

どうしようもなくガキなのだ。

そういう中途半端な杉本梨南が健吾はどうしようもなく不快だった。存在そのものがいやだった。想いをかけられているということ自体が耐えられなかった。でも、立村次期評議委員長の言うとおりに、杉本は周りの連中がどんなに思いやっても、気付くことができないのだろう。頭の中がどうのこうのというのはともかく、変わることをすらできないのだろう。大人になるということすら理解できないのだろう。桧山先生がしつこいくらい「君は理解しているのかな？」と繰り返したのも、今ならわかる。

——勝負はもうついている、か。

反省の色すら見せず、戦いを続けようとする杉本梨南。

大人の振る舞いすら拒否する、哀れな女。

——俺がはるみを守ろうとするのと同じく、あんたが杉本をどうやって変えていくのかをとっくりに拝見させてもらおうか。あんたは努力してるよ。ふつうになろうって涙ぐましいことしてるよ。だから許されてるんだ。杉本に、そこまでさせることができたなら、そう思わせることができたなら、俺はあの女にやさしくしてやれるかもしれない。そうだよ。俺がこれから、あんたと評議委員会でやっていきたい、そう思うようにな、立村さん。

健吾は家に入る前にもう一度空を見上げた。闇は雲に覆われてにごっていた。
——俺は、正々堂々、大人になってみせる。

——終——

暁紅を待て

<http://p.booklog.jp/book/77992>

著者：舞夜じょんぬ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/maiyouaogata/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77992>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77992>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ